九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

人物と交流IV(中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館資料叢書 14)

大島, 明秀
熊本県立大学：准教授

ミヒェル, ヴォルフガング
九州大学：名誉教授

吉田, 洋一
久留米大学：准教授

https://hdl.handle.net/2324/1498292

出版情報：2015-03-27. 中津市教育委員会
バージョン：
権利関係：

中津市歴史民俗資料館　分館
医家史料館叢書XIV

人物と交流 Ⅳ

ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀　共編

中津市教育委員会、平成二七年三月

中津市歴史民俗資料館　分館
医家史料館叢書XIV

人物と交流 Ⅳ

ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀　共編

表紙　ミヒェル・ヴォルフガング作

中津市歴史民俗資料館　分館　医家史料館叢書XIV

人物と交流 Ⅳ

ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀　共編

中津市教育委員会、平成二七年三月

編者前書き

昨年度の叢書では、従来から追究してきた村上家資料に加え、中津で代々医業を修めていた田渕家の資料をはじめて取り上げ、また、近代看護学に貢献した田代基徳と高木兼寛に関する寄稿論文も掲載しましたが、本年度は屋形家に再び着目することにしました。

大島は、屋形家資料の中から「醫籍考」に焦点を当て、その内容の分析と位置づけを行いながら、書写者の同定とその医学・医療的背景について検討しました。

吉田は、村上医家史料館所蔵の「諸雑用記」を翻刻し、幕末期の村上家における中津藩との関係について検証しました。

前年度から明治期中津の小学校について追求している當所は、これまで謎であった「三旗小学校」にまつわる一連の沿革を解明しました。

中津の史料の奥深さや内容の豊富さを、改めて再認識していただけることと期待しています。

平成二七年　春

編　者　一　同

目次

編者前書き

凡例

【原著論文】

耶馬溪屋形家と「豎籍考」
大島明秀 …… 1

村上春海の紀行文 ― 「諸雑用記」を中心に ―
吉田洋一 …… 39

明治初期における「中津市立北部小学校」及び「中津市立南部小学校」の沿革
當所美恵子 …… 82

【資料紹介】

中津市歴史民俗資料館蔵「詩經」（大島） …… 106

明治初期の中津における薬種店舗と諸売薬（ミヒェル） …… 108

Abstracts（英文要旨） …… 114

索引 …… 117

【凡例】

一、底本は中津市歴史民俗資料館蔵「竪籍考」（史料番号　屋形三五三）、村上医家史料館蔵「諸雑用記」（史料番号　九‐一一三）、及び中津市歴史民俗資料館蔵「三旗小学校」史料（史料番号なし）を使用した。

一、原文の欠字・改行・平出・削除線その他体裁は総じて底本の表記を反映するように記した。

一、異体字・略字などは通用する字句に改めた。

一、見せケチや削除線は二重線で、修正前の文字が判読できないほど塗りつぶしている箇所は■、虫損・破損等で判読不能な箇所は□または［　　］にて示した。また筆者による補足・修正がある場合は丸括弧で示した。

一、「竪籍考」原文で、読者の便宜を考え、王朝名はゴシック体にして前後一行を空け、著者名には墨付き括弧を付した。

耶馬溪屋形家と「鑿籍考」

大島明秀

要旨

本稿では、耶馬溪屋形家旧蔵「鑿籍考」写本に焦点を当て、これを分析した。

まず、筆跡から検討した結果、諸道による筆写本であることを突き止めた。

次に、京都大学富士川文庫本に所蔵された同名の資料と校合し、諸道写本は独自の創作ではなく、野津玄海が編集した資料に遡るものと位置付けた。さらに、富士川文庫本と比べて、諸道写本は原型からより遠いものであることも判明した。

諸道は、中津城下町に在住していた田中田信や倉成龍渚と交友関係を持ち、医学・医療の情報を獲得していた。また、長崎遊学の機会を有効に利用して、吉雄耕牛にも紅毛流医学等を学んでいた。「鑿籍考」も人的交流の中で入手したことは間違いない。

中津城下町から約一七キロメートル離れた屋形村に、漢方医学から紅毛流医学に至るまで様々な資料が伝わっていたことは、近世後期の地域における知の伝播を物語る興味深い事例となろう。

キーワード

屋形家、屋形諸道、養民、鑿籍考、医学、地域医療、漢方、紅毛流医学、中津、耶馬溪、長崎、田中田信、倉成龍渚、吉雄耕牛

はじめに

近世および近代に本耶馬溪で医業を営んでいた屋形家については、これまで既に家系を明らかにし[1]、とりわけ養民の医療活動を中心に論考が重ねられてきた[2]。一方で、目下、五百点に及ぶ同家の旧蔵和書が整理中ということもあって、重要ながらも、いまだ謎に包まれている部分も多い。

一例を挙げると、山間の過疎地域にありながら、屋形家はどのような方法で医学・医療情報を入手していたのか。また、いかなる知識や技術を有していたのか、等々である。

以上を踏まえて、本稿では、同家資料のうち「鑿籍考」（屋形三五三）に焦点を当て、その書誌情報、著者ならびに資料的位置づけを行いながら、屋形家の医学・医療的背景について考察する（図一）。

図一　「醫籍考」（中津市歴史民俗資料館蔵）。

一、書誌情報

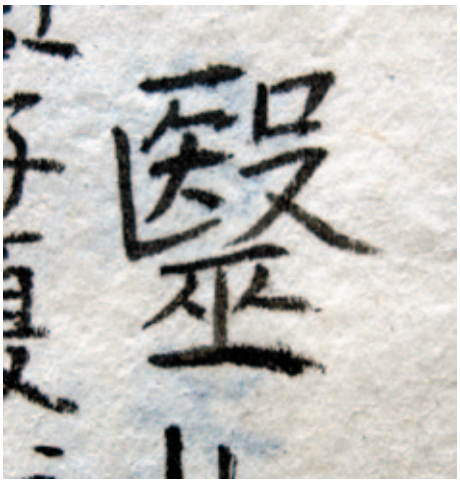
「醫籍考」は、楮紙三八枚を袋状にし、最初を表紙、最後を裏表紙として使用し、こより紐によって四つ目綴じにした横帳写本である。墨書打付された外題と内題はともに「醫籍考」で、上下二巻が一冊に合綴されている。

「醫籍考」という書名が示すように、内容は、伏羲から清朝まで、王朝順に中国の医書を列挙したもので、宋代までが上巻、明代以降が下巻として編纂されている。記載方法は、秦以前は王朝名を表示せずに、秦以降は王朝ごとに分類した上で、書名、著者、巻数がこの順で素朴に記され、掲載は、一、〇〇〇点を越える。

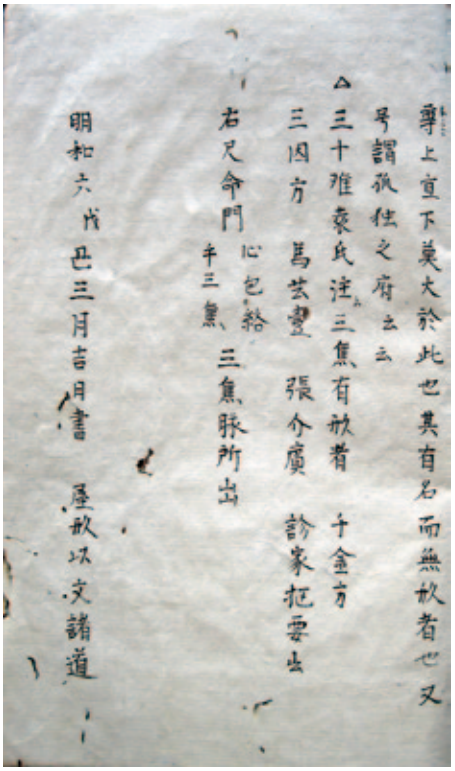
筆写者に係る明記は不在であるが、筆跡を手掛かりにこれを突き止めることができる。とりわけ「醫」字に着目すると、左上部「医」部分の「かくしがまえ」の上部横線と縦線が接続していない点、下部横線が右上がりになっている点が特徴的である。その他、「醫」字右上部の「るまた」の上部が口となっている点、「醫」字下部の「人」の形なども目を引く（図二）。

これと同じ特徴を有する「醫」字が、屋形家資料のうち、「脉訣」との小口書を持つ写本（屋形三五二）に確認できる。本資料は上巻に「明和六戊丑三月吉日書　屋形以文諸道」との奥書を有しており、ここから筆跡を同じくする「醫籍考」も屋形諸道の筆写と見て間違いない（図三、四）。

図二　「醫籍考」における「醫」字。



図三　「脉訣」における「醫」字（中津市歴史民俗資料館蔵）。



図四　「脉訣」の奥書。

二、屋形諸道の医学・医療的背景と「醫籍考」

屋形諸道の名は「屋形家家系図」に確認できる。父に当たる諸榮には嗣子が無く、弟の諸道に家を継がせた。諸道については「称養民号来徳始メ医為業　以梁字訓屋形」、「文政九年十一月廿三日卒」、「室秣村稲用氏女」とあり、ここから、妻の素性や死去年次、姓に梁字を用いたこと、養民[3]、来徳を名乗ったことなどが分かる。さらに注目すべきは、諸道が医業を始めたとする記述である[4]。

ここで西屋形村庄屋（屋形氏）記録である「記録并聞書扣帳」を確認すると、天保一一（一八四〇）年七月の冊子に

「延享三寅年、養民出生、文政九戌十一月廿三日死去、八拾壱才也、養民より医師株相初[ル5]」とあり、先述した「屋形家家系図」の内容と一致することから、両史料の信憑性が担保できるだろう。

その他、筆跡から諸道筆と同定できる資料を探ると、「羅山[6]」という、これまで知られていなかった号を用いた署名が認められる。

以上を総合して、本稿に必要な情報を再度まとめると、諸道は延享三（一七四六）年に出生し、文政九（一八二六）年に没した。そして、屋形家で初めて村医者となり、初代養民を号した人物であった。

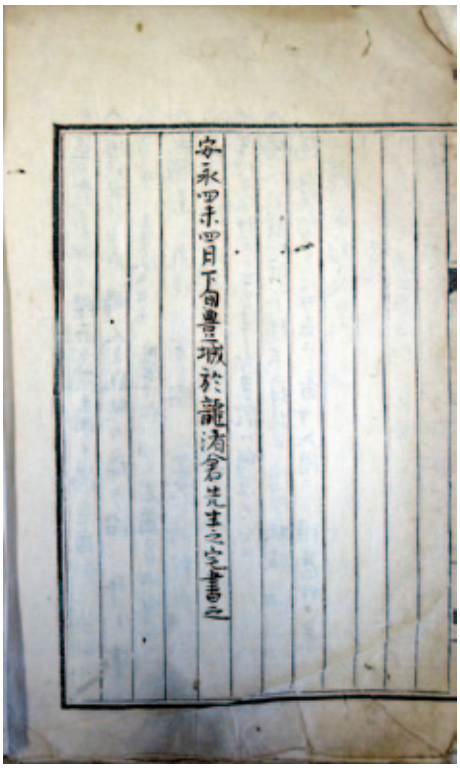
ところで、近世医師の一般的な学習経歴を考えると、幼少年時には、基礎的な漢学を中心に、士分であれば藩校、郷学ならびに私塾等で、士分以外ならば私塾で修めることとなろう。これらを修了すると、都市に出るか、或いは郷里の医塾に入る。そこでは、書籍と、師や門下生を通じて伝えられる情報による知識や技術の獲得がある。また、その他の人的交流による伝聞や、遊学といった学習機会も見逃せない。

これを踏まえて村医である屋形諸道を考察してみると、旧蔵医書は、内治や灸といった漢方系から、いわゆる紅毛流医学に係るものまで、幅広く揃っていることに気付く。無論その背景に、人的な交流が横たわっていることは容易に察知できるだろう。

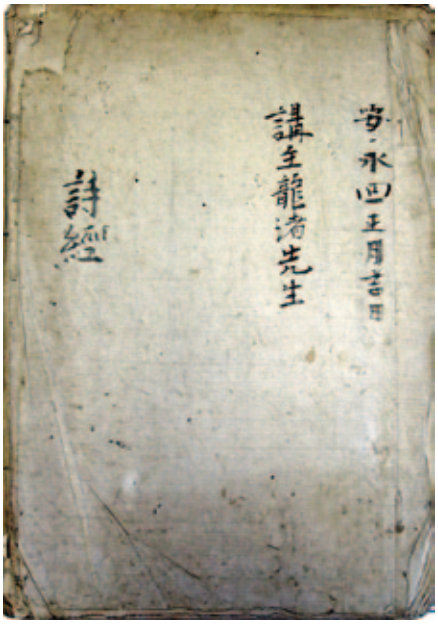
まず、豊前中津の町医者で雅人でもあった田中田信（一七四八～一八二四）と親交を深めていたことに留意すべきである。田信から諸道に宛てた書簡には、長崎の阿蘭陀通詞吉雄耕牛（一七二四～一八〇〇）と会った旨、金瘡（金創）の良薬を伝授され次第教える旨、また、中国の産業技術書『天工開物』（一六三七刊）に係るやりとり等が窺える[7]。

次に、中津藩儒倉成龍渚（一七四八～一八一二）との関係も見逃せない。「外療内治法」下巻（屋形三四九）の奥書「安永四未四月下旬豊城於龍渚倉先生之宅書之」や、諸道宛龍渚書簡から、諸道が城下町に出て、倉成の私塾で漢方を学んだことが知れる（図五、六）[8]。

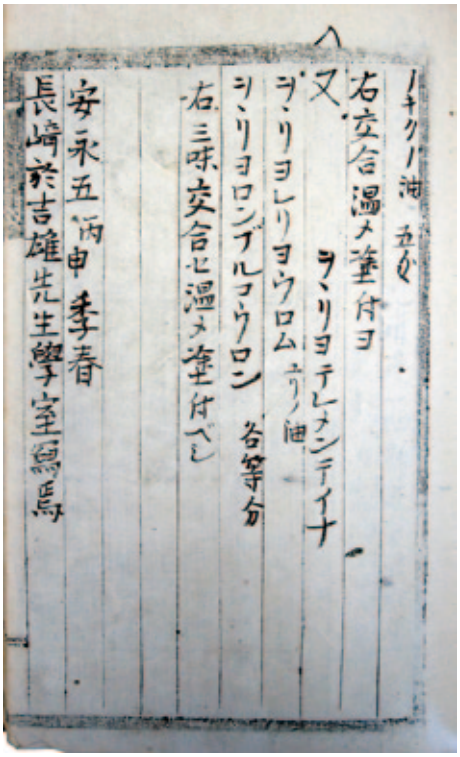
続いて、長崎遊学も特筆すべきであろう。年記の早い順から並べると、西洋医学の内容である「金瘡跌撲療治伝」（屋形四一）の奥書には「安永五年甲申季春〔ノ〕長崎於吉雄先生學室寫焉」とある。一方、同塾では漢方系も学んでいたようで「必用灸穴秘訣」（屋形四〇）には、「安永五次丙申年夏六月念四日〔ノ〕長崎吉雄先生於學室瀉焉」との奥書が確認できる。また、「雑記」（屋形四一）には「安永五年丙申秋九月十八日嵜陽於西山写焉」とある（図七、八）。加えて、奥書は不在であるが、向井元升（一六〇九～七七）「証治指南」に遡る部分を有する「雑書」（屋形四五）は、この遊学期間中に吉雄塾で学んだことは間違いない[9]。既述した「外療内治法」が「安永四未四月下旬豊城」で作成されたことを勘案すると、諸道は安永五年春から秋にかけて長崎滞在したものと見てよい。



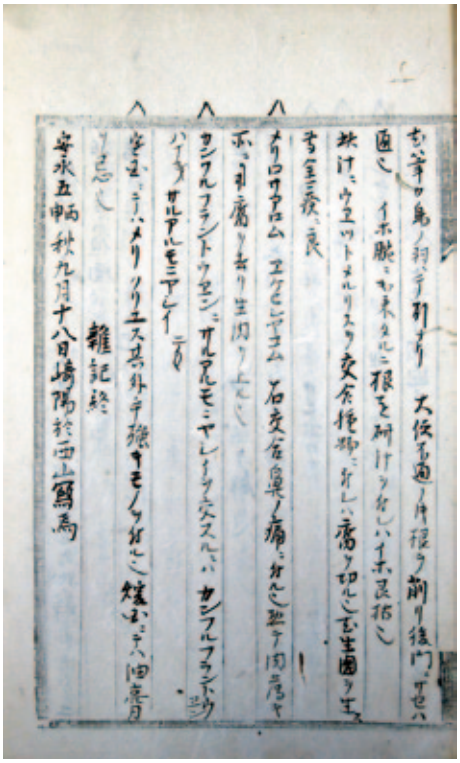
図五　**「外療内治法」の奥書**（中津市歴史民俗資料館蔵）。



図六　**「詩經」の表紙。ここからも諸道が龍渚宅で学んでいたことが窺える**（中津市歴史民俗資料館蔵）。



図七　**「金瘡跌撲療治伝」の奥書**（中津市歴史民俗資料館蔵）。



図八　**「雑記」の奥書**（中津市歴史民俗資料館蔵）。

さて、屋形諸道写「醫籍考」に話を戻そう。本資料が諸道の創作か、他資料からの転写かを突き止めるために京都大学富士川文庫に所在する同名の資料に着目したい[10]。早速、本資料と諸道写「醫籍考」とを突き合わせると、書籍の構成、医書の編成や順序に至るまで一致することが容易に見て取れ、同資料であることは一目瞭然である（図九、一〇）。

ただし、両資料間で異同も少なからず見受けられる。最も特筆すべきは、富士川文庫本の巻頭に「津玄海　集」と編者名が明記されている点である。諸道写本には編者についての記述は不在である。なお、富士川文庫本に捺されている蔵書印から、編者の姓は野津氏であると見てよい。

次に目に付くのは配巻であろう。諸道写本では明代を境に上下巻に分かれているが、富士川文庫本には配巻の明示は不在である。その他、巻末部分にも異同が見られ、富士川文庫本では、諸道写本には不在の「醫書五經」や「東垣十書」が掲載され、最後に「合一千二百十二部」と記されている。

加えて、書式にも大きな相違が認められる。例えば、諸道写本の巻初を見ると、「大始天元冊」のすぐ下に「伏義氏」と添えられているだけであるが、富士川文庫本では、「大始天元冊」の前に一行使用して冒頭を一字台頭させた上で「太昊伏犧氏（姓風號伏義　氏称帝太昊）」とある。さらに、諸道写本では「大始天元冊」にそのまま「神農本草経」が続くが、富士川文庫本ではこの二つの資料の間に、「炎帝神農氏（姓姜稱炎帝　亦號烈山氏）」が挟まれている。

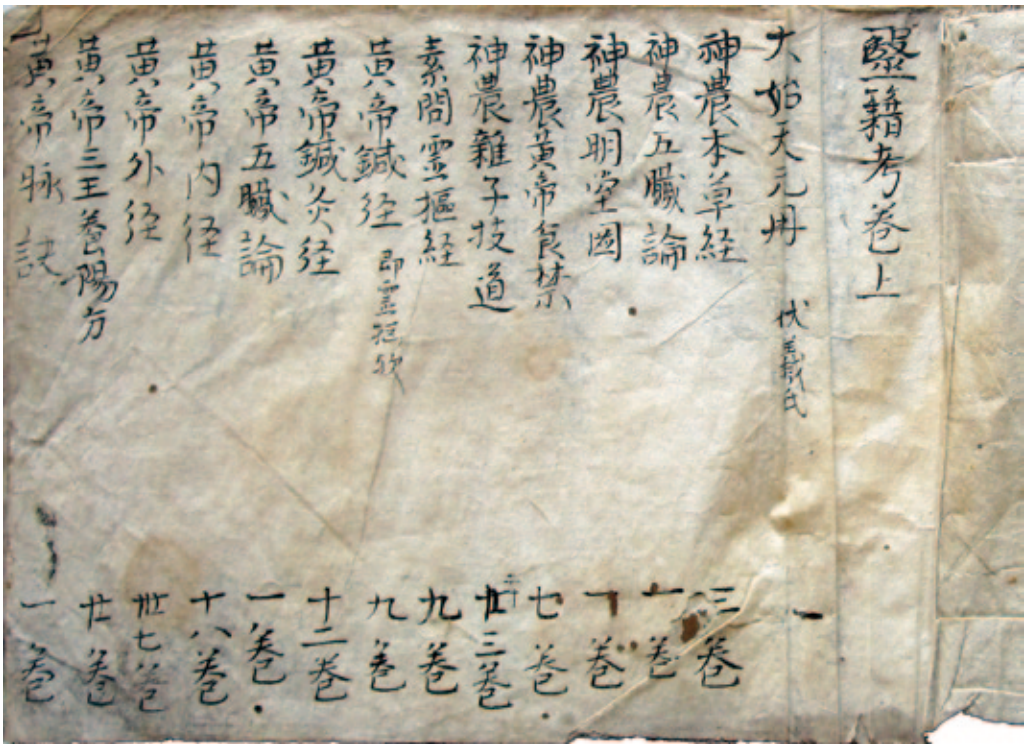
このように、富士川文庫本においては、全丁に渡って、著者名を書名が始まる前に一行使用して示す記述方針を採っている。

また、興味深いことに、富士川文庫本では「徐子宇」が記した医書を「致知樞要[11]」（正しくは『致和樞要』）と記しているが、諸道写本でも同一の誤りを犯している上に、さらにこの前後で錯乱を起こし、著書名まで「徐爾良[12]」と取り違えている。

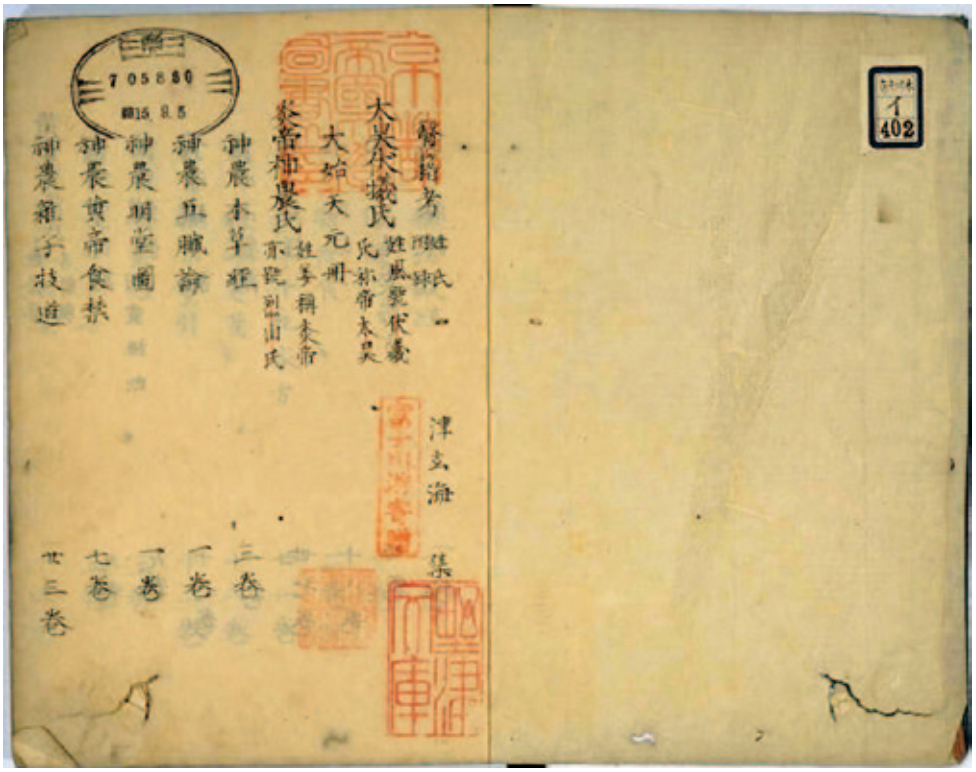
かかる錯乱は他の箇所でも認められる。例えば、富士川文庫本では「廣愛書」、「痘疹大全」並びに「五診集」の著者について、それぞれ正しく「陳會」、「汪旭旁」、そして「陳景魁」と記しているが、諸道写本では、「廣愛書」は「汪旭旁」、「痘疹大全」は「陳景魁」と、著者名が一つずつ前にずれた形で誤って記され、これに伴い、「五診集」の著者名は空白となっている[13]。

諸道が底本とした資料がそもそも誤っていたのか、或いは、諸道転写時の誤記なのか、錯乱が生じた背景に何があったのかについては定かでないが、いずれにせよ、諸道写本は事実関係の誤りが多く、富士川文庫本より正確性の低い資料となっていることに留意すべきである。

以上を勘案すると、屋形諸道写「醫籍考」は、独自の創作ではなく、不明の学者野津玄海[14]が編集した資料で、諸道写本はそれに遡るものだと見るべきである。ただし、これと富士川文庫本とを比較すると、原型に対する距離は、富士川文庫本の方がより近いものと見られる。



図九　諸道写「醫籍考」の一丁表（中津市歴史民俗資料館蔵）。



図一〇　富士川文庫蔵「醫籍考」の一丁表（京都大学附属図書館蔵）。

おわりに

以上、屋形家旧蔵「竪籍考」写本は、筆跡から諸道（初代養民）が写したものと判明した。また、諸道独自の創作ではなく、野津玄海が編集した資料に遡るものと位置付けることができた。富士川文庫本と校合すると、諸道写本は原型からより遠いものであった。底本や書写経路の捜索は、今後の課題となろう。

諸道は、中津城下町との交友関係や長崎遊学の機会を有効に利用して、医学・医療に係る情報を獲得していた。「竪籍考」も人的交流の中で入手したことは間違いない。いずれにせよ、中津城下町から約一七キロメートル離れた屋形村に、漢方医学から紅毛流医学に至るまで様々な資料が伝わっていたことは、近世後期の地域における知の伝播を物語る興味深い事例となろう。

【史料】「竪籍考」

【原文】

［一丁表］

竪籍考巻上

大始天元冊　【伏羲氏】

神農本草経　三巻

神農五臓論　一巻

神農明堂図　一巻

神農黄帝食禁　七巻

神農雑子技道　二十廿三巻

素問霊樞経　九巻

黄帝鍼経　【即霊樞欤】　九巻

黄帝鍼灸経　十二巻

黄帝五臓論　一巻

黄帝内経　十八巻

黄帝外経　卅七巻

黄帝三王養陽方　廿巻

黄帝脉訣　一巻

［一丁裏］

黄帝雑註鍼経　一巻

黄帝鍼経　同

黄帝雑飲食　二巻

黄帝雑子十九家方　廿一巻

黄帝雑子芝菌　十八巻

黄帝雑子歩引　十二巻

黄帝明堂経　三巻

同　同

黄帝内経明堂　十三巻

黄帝十二経明堂五臓図　一巻

黄帝鍼灸蝦蟇忌　同

黄帝書

黄帝岐伯鍼論　二巻

黄帝岐伯論鍼灸要訣　一巻

黄帝岐伯按摩　一巻

尭舜陰道

［二丁表］

湯盤庚陰道

精臓論　【岐伯】

灸経　【仝】

采藥録　【桐君】

脉経　【扁鵲】

内経　【全】　全
外経　【全】　全
采藥別録　【桐君】　全
至教論篇　【雷公】
雷氏灸経　一巻
容成陰道　【容成公自称黄帝卿】　廿八巻
藥對　【雷公名医傳畧桐君作藥對四巻】　二巻
神農本草　【集注同】　四巻
炮炙論　【同】　三巻
湯液本草　【伊尹】
［二丁裏］

秦　【戦国】

難径　【扁鵲】　二巻
扁鵲方　【全】　三巻
脉訣　【全】　一巻
神鏡経　【全】
秘訣　【全】　一巻
鍼傳　【全】　全
偃側鍼灸図　【全】　三巻
肘後方　【全】　全
子午経　【全】　一巻
陷冰凡方　【全】　全
療黄経　【全】　全
本草経　【子儀】　全
脉経　【容婆】　全
［三丁表］
八十四門　【全】　全
五臓論　【全】　全
仙人命論方　【全】　全

西漢

太倉公方　【淳于意】
決死生秘要　【全】　一巻
食径　【淮南王】　百廿巻　【径作百六十五巻】
本草藥性　【全】

東漢

傷寒論　【張仲景】　十巻
金匱玉函方　【全】　八巻
金匱玉函要略　【全】　三巻
金匱録　五巻
［三丁裏］
素問遺篇
仲景方　【張仲景】　十五巻

脉録　【仝】　一巻
本草薬性　【仝】　三巻
神農本経　【仝】　三巻
評病要方　【仝】　仝
五臓論　【仝】　仝
口歯論　【仝】　二巻
療婦人方　【仝】
四逆三部厥経　【衛沈】
婦人胎臓経　【仝】　三巻
小児顱顖経方　【仝】　七巻
蔡邕本草　【蔡邕】
［四丁表］

魏

華佗方　【呉譜撰之】　十巻
仲藏経　【華陀】　一巻
觀形察色　【並三部脉】　一巻
華陀内照図　一巻
枕中灸刺経　【同】　仝
済急仙方　【同】　仝
李氏薬録　【李当之　一作李氏本少】　三巻
呉普本少　【呉普　源流作呉氏本少一巻】　六巻
薬録　【同】

本少経　【李当之】　一巻
経鈔　【同】　仝
趙賛経　【同】　仝
寒温五味本少　【呉普】　仝
本少因　【同】　六巻
［四丁裏］

呉

黄帝衆難経　【呂博望注】　二巻
難経注解　【呉廣】　同
五発方論　一巻
養氣術　【晦父録】
隠形法
衛生経

蜀

備用本少
蜀本少　【韓保昇】　廿巻
医鑒紀暦　【呉群】　一巻
廣正集霊宝方　【羅普宜】　百巻
産方　【周挺】　三巻
保童方　【同】　一巻

［五丁表］

西晋

脉経　【王叔和】　十巻
脉訣発蒙　【同】
脉訣図要　【同】　六巻
脉訣機要　【同】　三巻
脉賦　【同】　一巻
論病　【同】　六巻
総兒経　【晋厳助】
禽経　【張華】　二巻
張仲景傷寒論　【同編次之】　十巻
医傳　卅六巻
南方屮木状　【嵇甫謐】　十二巻
三部鍼灸経　【同】　仝
薬對　仝

［五丁裏］

東晋

神仙良史　【葛洪】　十巻
隠逸纂異　【同】　仝
方伎雑事　【同】　三百十巻
金匱薬方　【同】　百巻
肘后救卒方　【同】　三巻　【一作六巻】
肘後作要晋書備急方　【同】　四巻
肘后百一方　【同】　五巻
東陽方　【范浩】

南宋　【南壮朝】

炮炙論　【雷斅】　三巻
乾寧記
本屮集撰　【隋志】　四巻
薬對　【唐志】　二巻
雷氏灸経　仝
思遺方　【劉涓子】

［六丁表］

辨傷寒　【徐文伯】　一巻
辨脚弱方　【仝】　仝
療婦人瘕　【仝】　仝
徐文伯方　【仝】　二巻
觧寒食散方　【徐叔嚮】　六巻
療少小百病方　卅七巻
脚弱方　八巻
体療雑病本屮要鈔　【同】　十巻

鍼灸要鈔 【同】 一卷
本朝病源合藥要鈔 【同】 五卷
鮮散消息節度 【同】 八卷
雜療方 【同】 十三卷
体療雜病方 【同】 六卷
百病要方 【胡洽居士】 三卷
経驗方 【同】 卅卷
釋僧深集方 【釈僧深】 ［六丁裏］
明堂図 三卷
脉経 六卷
偃側人経 二卷
秦承祖方 四十卷
秦承祖本朝 一作六卷三卷

齊

本朝藥對 【徐之方】 二卷
徐氏八世家傳効驗方 十卷
龍樹眼論 【竜樹菩薩】
龍樹菩薩藥方 四卷
龍樹咒法 一卷
医論 【楮橙】 仝
尊生経 【同】

雜病論 【徐嗣伯】 仝
落年方 三卷
［七丁表］
穢藥方 【楮橙】 十二卷
食経 【劉休】 十卷
食経 【仝】 一卷

梁

梁武帝坐右方 十卷
各医別録 【陶弘景】 七卷
藥捴訣 【同】 二卷
集藥訣 【同】 一卷
神農本朝 【集注方】 八卷
太清朝木方集要 【仝】 三卷
効驗方 十卷
補闕肘后百一方 【仝】 六卷
経本補肘后救率備急方 ［七丁裏］

后魏

單方 【王顕】 一卷
医方 【仝】 卅五卷

后周

本草性類　【杜善】　一巻
集験方　【姚僧坦】　十巻
撰行記　【仝】　三巻
通元経　【同支義方】　十巻
本草音義　【姚最】　三巻
李氏薬方　百巻

隋

新撰脚気論　【姚最】　三巻
青渓消渇論　【仝】　一巻
万病拾遺　三巻
［八丁表］
南行方　【李従卒】　仝
本草音義　【李含光】　二巻
海薬本草　【李珣】　六巻
青渓子脈訣　一巻
食療本草　【孟詵】　三巻
必効方　【仝】　仝
補養方　【仝】　仝
本草拾遺　【陳藏器】　十巻
食性本草　【陳士良】　仝
北京要備　【陳元】　一巻
胎前十八証　【時覧】　三巻
指微論　【何若愚】　三巻
指微針賦　【仝】　三巻
随身備急方　【張之仲】　三巻
四時軽重術　【仝】　一巻
藏府通元賦　【張】　一巻
本草括要　【張】　二巻
［八丁裏］
四声本草　【粛炳】　五巻
集験方　【権甄】
薬性本草　【仝】　三巻
鍼経鈔　【仝】　同
本草音義　【仝】　七巻
脈訣賦　【仝】　一巻
脈経　【仝】　二巻
明堂人形図　【仝】　一巻
本草音義　【甄音同】　七巻
古今録験方　【仝】　三巻
傳信方　【劉禹錫】　二巻
五藏類合賦　【刘清海】　五巻
五藏論　【裴璀】　七巻

五色傍通五藏論　【裴光庭】　一巻
五藏旁通明鑑図　仝　
療疤疽要訣　【喩義】　仝　
［九丁表］
瘡腫論　【仝】　仝　
笘氏産宝　【笘敫】　二巻
食医鑑　三巻
五藏論応家　【呉競】　一巻
黄帝内経明堂類式　十二巻
黄帝内経太素　卅巻
内経訓解　【金木起】　十八巻
四海類聚方　【隋煬帝初撰】　二千六百
隋煬帝類聚単方　【仝　唐春存十六巻　巣元方】　二百巻
病源候論　【又日葉氏病源】　五十巻
黄帝素問　【金元起治】　九巻
灸経　【見隋志】　五巻
医方論　【仝】　七巻
小兒経　【仝】　一巻
食経　【仝】　十四巻
雑香膏方　【見隋志】　一巻
［九丁裏］
粧臺方　【隋宇文士及撰士及之妻　則南陽公玄主楡傳之方】　一巻
五藏論　【見隋志】　五巻

唐

千金方　【孫思邈】　九十三巻
千金翼方　卅巻
單方藥図　【玄宗皇帝】
玄宗開元廣済方　五巻
徳宗貞元集要廣方　仝　
脉經　一巻
食経　
千金食治　卅巻
房中経　【孫思邈】　
養生真録　一巻
枕中記　
千金体方　廿巻
千金月令方　
［一〇丁表］
医家要鈔　五巻
禁経　貳巻
五藏旁通導養図　一巻
鍼経　同
天元玉策　【王冰】　卅巻
内経註　【仝】　廿四巻
玄珠蜜語　【仝】　十巻

外臺秘要　【王燾】　四十巻
外臺秘要略　【仝】　十巻
仙人水鑑訣　【壬超】　一巻
續傳信方　【王顔】　十巻
嶺南方　【王方慶】
新本屮　【仝】　四十一巻
薬性要訣　【仝】　五巻
園庭屮木疏　【仝】　廿一巻
難経註釈　【楊玄操】　三巻

黄帝明堂経註解　五巻
［一〇丁裏］
刪繁本屮　【楊損之】　五巻
楊氏産乳集驗方　【楊姉厚】　三巻
膳夫経手録　【楊曄】　四巻
六十四問　【唐許祢】　一巻
篋中方　【許孝崇】　三巻
唐本屮　【李勣】　廿巻
脉経　【仝】　一巻
石光明家傳方　【沈和先生】　仝
平泉屮木記　【李徳指疑操】
何首烏録　【李朗】
薬図　【李勣】　廿巻
図経　七巻

嶺南脚気論　【李晦青渓子】　一巻
呂楊註難経　【楊玄操】　五巻
脚気方　一巻
五藏論　五巻
［一一丁表］
群方秘要　【蕘越】　三巻
玄感傳屍論　【蕘遊】　一巻
三家脚気論　【蕘徐王唐侍中　三家之説】　壹巻
三家脚気論　【集蕘徐唐三家之説　稍異者】　一巻
延齢至寶方　【姚和家】　拾巻
童子秘訣　【仝】　参巻
衆童延齢至宝方　【仝】　十巻
姚和衆方
明堂論　【朱遂】
崔氏纂要方　【崔行功】　十巻
韋氏獨行方　【韋宙】　十二巻
太和済要方　【宜成公】　五巻
金宝鑑　【唐衛嵩】　一巻
医門金鑑　【仝】　三巻
診脉要訣　【唐強明】　一巻
制伏草石論　六巻
食譜　【韋居源】
［一一丁裏］
鄭注薬方　【唐志鄭撰】　一巻

鮮寒食方　【見唐志】　十五巻
婦人方　【仝】　廿巻
少女方　【仝】　十巻
少女雑方　【仝】　廿巻
食法　【嚴鼇】　十巻
薬名譜　【侯孟極】
昇元廣済方　【華古春】　二巻
排王集　【郡英俊】　仝
口齒論　【仝】　一巻
経心録方　【宋俠】　八巻
発焰録　【同空与】　一巻
病源手鑑　【段元亮】　仝
五藏鑑元　【仝】　四巻
名医傳　【甘柏宗】　廿巻
医苑　【伏適】　一巻
南中時摂生論　仝
治病藥　【釈霊微】
「一二丁表」
王函経
唐陵正師口齒論　【僧普済】　一巻
口齒玉地論　【仝】　仝
太僕医方　【仝】　仝
呑字帖腫方　仝

五代

本草藥性　【日華子】
諸家本草　【仝】　廿巻
経驗方　【仝】
令体治世集　【刘輪】　卅巻
経用方書　【仝】　仝
論候　【仝】　十巻
令体治世集　【仝】　廿巻

宋

「一二丁裏」
開宝本草　【李昉】　廿一巻
傷寒百問　【李知先】
治人書括　【仝】
難経句解　【李明】
叔和脉訣集註　【仝】　十二巻
太平聖恵方　【李明】　百巻
太平聖恵方單方　【仝】　十五巻
紹興校定本草　廿二巻
普済方　五巻
百一選方　廿巻
金生指途論　【王聡】　三巻

銅人腧穴鍼灸図経　【王惟一】　五巻
秦定養生主論　【王陸】　十六巻
嘉裕補註本草図経　【掌禹編】　廿巻
本草図経　仝　廿一巻
図経本草　【蘇頌】
［一三丁表］
傷寒證治　参巻
指迷方　仝
肘后方　仝　卅五巻
本草單方
慶膽善救方　【来有青】　二巻
簡要済衆方　【仝】　五巻
南陽活人書　【朱肱】　廿巻
傷寒百問　【仝】　三巻
本草衍集　【寇宗奭】　廿巻
図経集註衍義本草　【仝】　四十二巻
三因極一方　【陳無】　六巻
病源論粋　【仝】
一百八十問得方　【仝】
幼々新書　廿四巻
小兒病源方論　【仝】　一巻
小兒痘疹経験方　【仝】
［一三丁裏］
小兒方　【仝】

婦人良方　【陳自明】
管見良方　【仝】　二巻
外科籍要　【仝】　三巻
本草外説　【陳承】　廿三巻
傷寒脈訣　【進兆】
口訣
傷寒方　三巻
蔬食譜　【陳達迪】
霊苑　【沈指】　廿巻
沈存中良方　【仝】　十巻
藁議　【仝】
恵氏薬局記　【仝】　三巻
傳家秘宝方　【孫朔和】
孫用和方　【仝】
集驗良方　【朱佐】　一巻
診脈須知　【刘元賓】　四巻
［一四丁表］
補注叔和脈訣　【仝】
傷寒総括　【仝】
脈要秘訣　【仝】　二巻
素問入式　【刘温舒】
運氣奥論　【仝】
素問奥論　【仝】
運気全書　【仝】

傷寒必用　一巻
傷寒括要詩　【元賓】　一巻
脉訣機要　【仝】　一巻
正俗方　【劉彝】　仝
活人事証方　【刘信用】
医学指南　【仝】
劉氏十全博救方　一巻
経用方書　卅巻
論候　十巻
令体治卅集　【仝】　廿巻
［一四丁裏］
傷寒式例　【仝】
歴代名医図　【許順斎】　一巻
傷寒百證歌集
傷寒辨疑　【仝】　六巻
本事方　【仝】　十巻
続本事方　【仝】　十巻
傷寒歌　【仝】　三巻
神応針経要訣　【許希】　一巻
扁鵲針傳　【仝】
小兒方薬　【銭仲陽】　一巻
小兒方訣　【仝】
銭氏小兒方　【仝】　八巻
銭氏小兒薬証真訣　【仝】　三巻

嬰兒百扁
傷寒百問歌　【銭聞礼】
本草薬性　【許法】　一巻
［一五丁表］
本草指南　【仝】　六巻
和済指南総論　【仝】　一巻
小兒直訣　【閻孝忠】
集効方　【仝】　一巻
医書會同　【鮑志大】　三巻
古今録驗　【初虞世】
養生必用方　【仝】　十三巻
續必用方　【仝】
尊生要訣　【仝】
傷寒卒病論　【龐安常】
家藏秘宝方　【仝】　五巻
難経注　【仝】
本草補遺　【仝】
傷寒総病論　【仝】　七巻
嬰孩宝書　【湯民望】　廿巻
嬰孩妙訣　【仝】　二巻
湯氏嬰孩妙訣　【湯衍】　仝
湯寒鮮惑論　【湯尹才】　一巻
［一五丁裏］
楊氏家藏方　【楊倓】　卅巻

仁斉直指方　【楊志】　廿六巻
仁斉直指附遺方　【仝】
活人総括　【仝】
嬰兒秘要　【仝】　廿巻
医行　【楊文修】
有存真図　【楊介】
傷寒脉訣　【仝】
究源方　【張松】
雞峰備急方　【仝】　一巻
傷寒百問　【仝】
経絡図　【仝】
医説　【張果】　十五巻
傷寒論　【仝】　一巻
医説　【張擴】
小兒医方妙選　【張演】　一巻
小兒方　【仝】　仝
「一六丁表」
本屮類要　【詹瑞方】　十巻
玉函経　【杜光庭】　二巻
難経補註　【丁徳用】　五巻
難経註　【紀天錫】　三巻
同　【謝復古】
胎産真経　【鄭瑞友】
全嬰方論　【鄭瑞友】

簡易方　【黎民弄】
玉函経註　【仝】　廿巻
断病提綱　【仝】
決脉精要　【虞度】　五巻
難経註　【文彦博】
薬準　壹　仝巻
脚気治方　【董及】　仝
小兒斑疹論　仝
食治通説　【袁居中】　仝
済生方　【嚴用】　八巻
門製方　【仝】
「一六丁裏」
新註定本屮　【盧多遜】　廿巻
補註素問　【林億】　廿四巻
神医普救方　【賈黄中】　十巻
劉涓子鬼遺方　【龔慶宣】　十巻
江殄饌方　【黄克明】　一巻
膏旨灸法　【莊綽】
金匱指微訣　【呉復圭】
医法図　【程】
四時養頤録　【趙自化】
名医顕軼傳　【仝】
過眼録　【周雲】

助道方服薬須知
経史証類備急本草
　宋徽宗大観二年校正之各註類本草上之朝廷改
　名大観本草又政和中校正刊行謂之政和本草
和剤局方
瘡瘍経験全書　【竇漠郷】　十二巻
［一七丁表］
局方本草　二巻
聖済総録　【徽宗】　二百四巻
魏氏家藏方
薬証病原歌　【蒋淮】　五巻
行要備急方　一巻
陳雷砲灸論　三巻
香方　【宋明帝孫】　一巻
奉雑養老書　【陳宜】　二巻
指南方　全

金

訣脉　【直魚圖】
針灸書　【全】
傷寒纂要　【李度嗣】　四巻
改正活人書　二巻
傷寒論　三巻
鍼経　一巻
流注指要　【李連】
［一七丁裏］
鍼経至難　【竇漠郷】
有標由論　【全】
仲景傷寒論註　【成無己】　十巻
傷寒明理論　【全】　四巻
図解傷寒論　【全】　十巻
論方　【全】　一巻
儒門事親　【張子和】　十四巻
六門三法　【全】
張氏経験方　【全】
潔古珍珠嚢　【張元素】　一巻
病機氣宜保命集　【全】　四巻
一各活法機要　【全】
保生方　【全】
潔古注叔和脉訣　【全】　十巻
産育方　【全】
薬註脉　【全】
［一八丁表］
医学啓源　【全】
潔古家珍　【全】
薬註難経　【全】
潔古本草　【全】

医学新説　【張璧】　二巻
保命傷寒論　【仝】
叔和百問　【仝】
傷寒道挌　【劉元素】　五巻
素問要指　【仝】
素問要旨　【仝】　八巻
素問薬證　【仝】　壹巻
原病式　【仝】
医方精要　【仝】　十五巻
宣明論方　【仝】
運氣要旨論　【仝】　三巻
保命集
［一八丁裏］

元

要薬珍珠嚢　【李東垣】　二巻
要薬法象　【仝】　一巻
薬姓賦註解　【仝】　六巻
脾胃論　【仝】　四巻
辨惑論　【仝】　二巻
内外傷辨惑論　【仝】　三巻
医孛発明　【仝】　仝
蘭室秘藏　【仝】　五巻

五経活法機要　【仝】　六巻
瘡瘍論　【仝】
医説　【仝】　廿四巻
試効方　【仝】
此事難知　【仝】
錫類鈴方　【李仲南】
仲景詳辨　【王好古】　一巻
［一九丁表］
医塁元戎　【仝】
湯液本艸　【仝】
疝瘕論　【仝】
光明論　【仝】
標本論　【仝】
医家大法　【仝】
小兒吊尽雑著　【仝】
傷寒辨惑論　【仝】
辨守真論　【仝】
十二経薬図解　【仝】
仲景一集　【仝】
活人節要歌括　【仝】
三備集　【仝】
衛生宝鑑　【羅】
薬象図　【仝】
経験方　【仝】

薬誤永鑑　【仝】
［一九丁裏］
薬類法象　【仝】
傷寒指掌図　【呉恕】　八巻
日用本屮　十巻
淡寮集驗秘方　【僧謗洪】　八巻
本屮歌括　【胡竒】　仝
癰疽神秘灸経　【胡元慶】　一巻
四時治要方　【陳釈氏】
医方集成　【孫允賢】　十巻
金嬰簡易方　【仝】
端竹堂経驗方　【薩謙斎】　十五巻
世医得効方　【産亦材】　仝
本屮元命苞　【尚從青】
脾胃論　【項脐】　一巻
医学宗旨　【趙良】
金匱〇方衍義　【仝】　二巻
難経本義　【涓壽】
［二〇丁表］
素間鈔　【仝】
診家枢要　【仝】　二巻
十四経発揮　【仝】
本屮衍義補遺　【朱彦修】

格致餘論　【仝】　二巻
局方発揮　【仝】　一巻
傷寒辨疑　【仝】
外科精要　【仝】　四巻
平治會萃方　【仝】　二巻
治痘要方　【仝】　一巻
新論　【仝】
風水問答　【仝】
医案　【仝】　六巻
保産全集　【仝】　五巻
産宝百問　【仝】　六巻
丹渓附録　【仝】
滂洄集　【王安道】　一巻
［二〇丁裏］
標題原病式　【仝】　一巻
百病釣玄　【仝】　廿巻
医学韵流　【仝】　百巻
十薬神書　【仝】　一巻
医学會同　【葛応雷】
医学啓蒙　【仝】
経絡十二論　【仝】
寿親養老新書　【鄒鉉】　四巻
脉訣刊誤　【載起宗】

［二一丁表］

明

救荒本屮　【明慶王】
普済方　【仝】　百六十八巻
袖珍方　【仝】　四巻
普済方　【明定王】　六十八巻
医学粹金　【周禮】　四巻
小兒推傘秘訣　【周子嵩】　一巻
医方選要　【周文采】　十巻
医説會編　【周恭】　十八巻
類證本屮　【孝宗】　卅一巻
易簡方　【世宗】　一巻
廋辛玉冊　【寧献立】
医卜農圃　【仝】
活人心統　【仝】
乾坤生意　【仝】　四巻
肘后方　【仝】
乾坤秘韞　【仝】
寿域神方　四巻

［二一丁裏］

金鑑本屮　【寧原】　一巻
本屮発揮　四巻
銅人腧穴鍼灸図経　【徐三友】　三巻
古今医統　百巻

捷経六書　【徐延璋】（春甫）
活人鍼経　【仝】　二巻
医滙　【徐廷璋】　十二巻
致知樞要　【徐爾良】　九巻
針灸大全　【徐子宇】　七巻
本屮證治辨明　【徐鳳】　十巻
宜綮大成　【徐彪】
資生経　【王執中　祭応金】
百代医宗　【徐紳】　一巻
明医雜著　【王綸】　八巻
本屮集要【仝】　十巻
惠剤方　【王永輔】
医斈碎金　【玉典】
続状寿精方　【王來賢】

［二二丁表］

内経合類　【王九達】
医林集要　【玉璽】　廿巻
野菜譜　【王磐】　一巻
傷寒綱目　【王執中】　十二巻

益寿全書　【全】
證治準繩　【王干泰】　四十四巻
胤産全書　【全】　四巻
普救録　【全】　一巻
医録　【全】　八巻
医辨　【全】　三巻
嬰童粕摯　【王大綸】　五巻
医方捷経　【王宗顕】　二巻
難経評林
仙製本草　【全】
医林時用　【王文徳】
慈幼津梁　【王仲成】　二巻
医便　【王三方】　五巻
［二二丁裏］
小青嚢　【王良惑】
切要秘要　【王夢蘭】　一巻
日用集験秘方　【全】　全
幼科類萃　【全】　廿八巻
本草單方　【王鏊】　八巻
食物本草　【王顕】　二巻
本草會編　【王機】　廿巻
石山医按　【全】　七巻
続素問鈔　【全】
運気易覧　【全】

推求師意　【全】
痘治理辨　【全】　十二巻
医孛原理　【全】　十巻
医讀　【全】　四巻
外科理例　【全】　八巻
針灸問答　【全】　三巻
重集脉訣刊誤　【全】　二巻
［二三丁表］
内経補註　【全】
医孛質疑　【汪子良】
統属心法　【全】
證治要略　【全】
痘疹大成　【汪如源】
本草蒙筌　【陳會　陳嘉】　十二巻
廣愛書　【汪旭奇】　十巻
痘疹大全　【陳景魁】　三巻
五診集
雪潭居医約　【陳徹】　八巻
済世良方　【陳仕賢】　十一巻
経験方　【全】　十巻
保産万全書　【陳次道】　一巻
外科正宗　【陳実功】　四巻
奚嚢便方　【陳朝階】
瘍科選粋　【陳文治】　八巻

蓋斉医要　【陳諫】　十五巻
痘疹金鏡録　【翁仲仁】　三巻
［二三丁裏］
活人指掌補註辨疑　【童北吾】　六巻
六書纂要　【全】　六巻
万病医衡　【王正之】　全
難経脉訣　【能宗之】
難経俗解　【全】
薬性賦補遺　【全】　二巻
婦人良方補遺　【全】
医書大全　【全】　一巻
医孛源流　【全】
運氣図括　【全】　十二巻
山居便宣方　【全】
備急海上方　【全】　十六巻
傷寒運気全書　【全】　二巻
傷寒括人指掌図論　【全】　十巻
幼科輯粋　【馮其盛】　全
古今医鑑　【龔信】
［二四丁表］
種杏仙方　【龔廷賢】　十巻
雲林神殻　【全】　四巻
魯付禁方　【全】　全巻
万病回春　【全】　四巻

寿世保元　【全】　十巻
済生全書　【全】　八巻
普渡慈航　【全】　十六巻
幼科百効　【全】
内外科百効　【龔居中】
痘疹医鏡　【全】
万寿丹書　【全】　二巻
炭火點雪　【全】
保嬰直指　【文乘中】
痘疹玄機　【全】　四巻
医方祖剤　【施沛然】
山公医旨　【施山公】　五　五巻
医孛正傳　【虞天民】　八　五巻
［二四丁裏］
痘疹傳心録　【朱惠民】　十六　八巻
四海同巻　【朱棟隆】　四巻
立命元亀　【朱儒】　七巻
續医統　【俞弁】　十巻
傷寒尚論扁　【喩嘉言】
医門法律　【全】
寓医少　【全】　六巻

医孛集成　【傳法】　十二巻
医孛権輿　【全】　全巻
脉證傳心法　【呉景隆】
傷寒薀要　【呉緩】
括人心　【呉球】
諸證辨疑　【全】　四巻
十二方　【全】　一巻
医経會元　【呉嘉言】　十巻
医孛権衡　【呉顕忠】
［二五丁表］
医方啓蒙　【呉從周】
素問註　【呉崐】
脉語十三科證治　【全】
参黄編　【全】
薬纂砭炳考　【全】
鍼法六集　【全】　六巻
医方考　【全】　七巻
扶寿精方　【呉旻】　二巻
食物本少　【呉文炳】
針灸大成　【同】　十巻
痘疹會編　【呉洪】　全巻
養生類要　【呉倫】　二巻
救急小兒良方直指　【都前】
眼科鳴飛集　【胡南渕】

衛生易簡方　【胡濚】　十二巻
万寿全書　【胡大須】　六巻
［二五丁裏］
丹渓纂要　【盧和】
医孛百問　【盧宗尹】　四十一巻
脉家典要　【全】
増定医学綱目　【全】
痘疹要訣　【盧詵】
医孛要訣　【全】
芝園臆少　【盧不遠】
医種子　【全】　十三巻
原機啓徴　【倪惟徳】
医説　【全】　二十巻
本少彙言　【倪朱謨】　六巻
眼科全書　【表孛渕】
名医類案　【江民宝】　三十六巻
赤水玄珠　【孫一奎】　十三巻
赤水医案　【全】　二巻
医旨緒餘　【全】
［二六丁表］
医家必用　【孫王奎】
丹臺玉案　【孫文胤】　六巻
脉辨　【孫光裕】　二巻

血症全集要　【仝】　仝巻
白飛霞方外奇方　【韓懋】
痰火論　【仝】　二巻
韓氏医通　【仝】　仝巻
試驗良方【渣揖】　一巻
医燈續焰　【仝】　十巻
袖珍小兒方論　【銭宏】
江樓遺稿　【仝】
活幼全書　【銭大用】　八巻
集善方　【銭原】　卅巻
運気説　【銭宝】　二巻
医林會海　【銭寧】　四十巻
鍼灸擇日　【全循義】
［二六丁裏］
軒岐救正論　【蕭京】
本屮真註　【調鼎楊】　四巻

救荒野譜補遺　【姚嘉成】可　一巻
明月良方　【銭鈬】　三巻
素問捷経　【高士】
霊枢摘註　【仝】
医斈指南　【高銘】
便産須知　【高賓】　二巻
素問捷経　【高武】

鍼灸聚英節要　【仝】
六種　【陶節菴】
傷寒明理続論　五巻
傷寒一提金　一巻
傷寒瑣言　仝
傷寒家秘投車槌法方　一巻
傷寒証詠薬截江綱　仝
傷寒家秘的本
以上謂六種
［二七丁表］
陶巨源薬集　【陶浩】
傷寒全書　【陶節菴】　五巻
癰疽神驗秘方　【仝】　一巻
陶節菴傷寒九種書　【仝】　九巻
傷寒三陽　【何塘】
栢斉三書　【仝】
咳嗽相火論　【仝】
発明證治　【何経方】
医斈統宗　【何一陽】
痘疹発徴　【何洛英】　二巻
医宗粹言　【羅周彦】　二十巻
原病集　【唐椿】　仝
奇考良方　【方賢】　六十九巻
丹渓心法附餘　【方廣】　二十巻

脉薬證治　【全】　全
傷寒地理　【全】　全
傷寒條辨　【方百執】　全
［二七丁裏］
医林繩墨　【方穀】　七巻
脉訣直指　【全】
本朝單方　【方如川】
医孝百問　【張世賢】
図註難経　【全】
救急易方　【張薬斉】　八巻
千金養性扁　【張孝懋】　二巻
医孝六要　【張三錫】　一巻
治方彙　六巻　四十一巻
経畧考　二巻
四診方　二巻
運気畧　一巻
病機　五巻
本朝選　六巻
類経　【張介賓】　四十巻
本朝正編　【全】　三巻
痘疹補書　【全】　六巻
蘇命方　【全】　三巻
傷寒全集　【全】　全
［二八丁表］

精選治痢神書　【全】　全
精選泄瀉神書　【全】　全
精選治瘧秘喩　【全】　全
精選幼科良方　【全】　一巻
腫脹全集　【全】　二巻
景岳全書　【全】　六十四巻
医門秘旨　【張羅】
丹渓方訣　【張応鵬】
摂生衆妙方　【張時徹】
傷暑全書　【張鳳起】
袖裏捷便方　【張道輔】
医孝訓科　【楊珣】
丹渓心法　【全】　三巻
傷寒撮要　【全】
鍼灸集書　【全】
針灸詳説　【全】　二巻
医方摘要　【楊拱】　十二巻
大素脉訣　【楊之徳】　一巻
［二八丁裏］
病揚手吹　【楊煩】
素問糾畧　【全】　三巻
治効方書　【蒋武】
慎斉稿　【蒋主忠】
脉訣本義　【全】

痰火顓門　【梁孝孟】　四巻
医孝集要　【光玉梁】
廣筆記　【莊継光】
本屮権度　【黄済之】　三巻
評註薛氏医按　【黄承昊】　七巻
附方　【仝】
折肱漫録　【仝】　二巻
痘疹全書　【黄廉】　六巻
医林統要　【黄惟亮】　四巻
済世丹砂　【黄河】
医林史傳　【程伊】
医林外傳　【仝】
医林拾遺　【仝】
「二九丁表」
松崖医経　【程介】　四巻
医彀【程伋】
医林欧治　【盛寅】　百四十巻
医鈔　【盛端】
医鈔撮要　【仝】　五巻
體仁彙編　【彭用光】
原幼心法　【仝】
医見　【彭大嶢】　二巻
医方集冝　【丁鳳】　十巻
先醒斉医方筆記　【丁元薦】　五巻

保赤詠談　【応麐】　四巻
経効医方　【刘基】
尋能鄙事　【仝】
玉機微義　【刘純】　三巻
傷寒治例　【仝】　七巻
医経小孝　【仝】　二巻
雑病治例　【仝】　六巻
太素脉訣　【仝】　四巻
「二九丁裏」
神応経　【刘瑾】　一巻
編註病機　【刘仝備】
編註薬性　【仝】
医孝三要　【刘起宗】
安老懐幼　【刘宇】　四巻
活幼便覧　【刘錫】
抜萃類方　【刘均天】　廿巻
医孝綱目　【楼英】　四十巻
経験良法　【鄒福】　十巻
痘疹一覧　【準有潤】
内経類考　【準乘暘】　十巻
方脉薬性　【史國信】
医史　【李濂】　十巻
医略正誤　【李象】　三巻
医孝入門　【李梴】　六巻

編註入門　【仝】　十五巻
人参傳　【李言聞】
［三〇丁表］
艾葉傳　【仝】
痘疹證治　【仝】
四診発明　【仝】　八巻
集觧脉訣　【李訓】　十二巻
袖珍方　【李恒】　四巻
婦人諸症便覧　【李春茂】　五巻
本屮原始　【李中立】　十二巻
本屮綱目　【李時珍】　五十二巻
瀕湖医案　【仝】
瀕湖脉斈　【仝】　一巻
奇経八脉　【仝】　一巻
食物本屮　【仝】　廿三巻
瀕湖集簡方　【仝】
薬性觧　【李士材】
頤生微論　【仝】　十巻
医宗必読　【仝】
内経知要　【仝】
内経翼　【仝】
［三〇丁裏］
四方医案　【仝】
病機沙篆　【仝】

本屮通玄　【仝】
鍼灸書　【許紳】
銅人図象
婁愚稿　【許諶】
野情集
薬性單方　【許希用】　八巻
達生録　【堵胤宗】　二巻
医経纂輯　【杜大章】
医斈鈎玄　【同】
保赤全書　【管橓】　四巻
保刊素問遺篇　【趙簡王】　一巻
痘疹全書　【趙継宗】
儒医精要　【仝】
趙氏医貫　【趙献可】　十巻
仲景全書　十六巻
傷寒論　拾巻
［三一丁表］
金匱要略方侖　三巻
傷寒類証　仝
外科序論　【趙原陽】　一巻
医方　【左忠】
内経註証発微　【馬言望】
難経正義　【仝】
医林正印　【仝】　十巻

保嬰録　【欧士海】　一巻
山谷便方　【全】　同
万痾必愈　【沈応賜】　十巻
明医選要　【全】
名医鈔　【費傑】
経験良方　【全】
博愛心鑑　【魏直】
眼科對證経験方　【顧可學】　一巻
脉訣炬燈　【顧方伯】　二巻
分部本少　【全】
［三一丁裏］
経験積玉方　【芥応期】
痘疹集覧　【蔡維藩】　一巻
痘疹方論　【全】　一巻
甦生的鏡　【蔡正言】
證治要訣　【戴原礼】
金匱鉤玄　【全】　三巻
類證用薬　【全】　同
万氏家鈔　【万表】　三巻
積善堂経験方　【全】
済世良方　【全】　五巻
素問淺解　【万全】
本草拾珠　【全】
脉訣約言　【全】

傷寒蠡測　【全】
医門摘錦　【全】
保嬰家秘　【全】
［三二丁表］
幼科発揮　【全】
痘疹世医心法　【全】　廿五巻
痘疹格致　【全】　五巻
保命歌括　【全】
廣嗣紀要　【全】
折肱録　【汗忱】
医経大旨　【賀岳】　四巻
明医典要　【全】
医閭漫記　【賀欽】
存斉稿　【賀栄】　二巻
回生達宝　【謝毓季】
薬性要略大全　【鄭康寧】
遵生録　【鄭達】　十巻
治痘詮説　【孟春沂】
幼々集　【全】
三錬歌　【鄭士魯】
［三二丁裏］
医経會解　【鄭景】　八巻
瘡瘍経験　【寶夢麟】
全幼心鑑　【寇美】

医書纂要　【郁震】
病逸漫記　【陸針】
脚気集　【車清臣】
傷寒類症便覧　【陸彦済】　十巻
識病捷法　【繆存斉】　仝
傷寒提要　【仝】
本朝経疏　【繆希雍】　十二巻
中流一壺　【白士偉】　一巻
家孰事親　【郭晟】
痘疹全方　【郭子章】　二巻
医李統旨　【葉文齢】
土林餘業　【葉雲龍】　六巻
奇効医術　【聶尚恒】
［三三丁表］
活幼心法　【仝】　二巻
医学彙函　【仝】
本朝発明　【皇甫嵩】　六巻
明医指掌　【皇甫中】　十巻
保嬰撮要　【薛鎧】　卅巻
外科心法　【薛已】　七巻
外科発揮　【仝】
外科精義　【仝】
外科枢要　【仝】
外科経験方　【仝】

瘡瘍機要　【仝】　三巻
家居医録　【仝】　七巻
内科稿要　【仝】
保嬰撮要　【仝】
保嬰全書　【仝】　二巻
痘疹撮要　【仝】
［三三丁裏］
本朝約言　【仝】　四巻
明医雑著附方　【仝】
校注婦人良方　【仝】　廿四巻
校正小兒直訣　【仝】　三巻
薛己二十四種
婦人良方　女科撮要
保嬰撮要　小兒直訣
小児痘疹方　保嬰全鏡鑑
明医雑著　原機啓微
内科摘要　外科金揮
傷寒鈴法　外科精要
難経本義　平治會萃
外科樞要　癰疽驗方
外科発揮　厲瘍機要
外科心法　本朝発揮

正體類用　外科経驗方
口歯類要　十四経発揮
［三四丁表］
医統正脉
素問霊枢　甲乙経
難経本義　傷寒論
傷寒明理論　類証活人書
原病式　脾胃論
傷寒標本　傷寒直挌
脉経　中藏経
金匱要略方侖　宣明論
保命集　儒門事親
此事難知　医塁元戎
外科精義　傷寒医鑑
傷寒心要　傷寒心鑑
医斈発明　内外科傷辨惑論
蘭室秘藏　湯液本屮
医経遡回　活法機要
格知餘侖　局法発揮
［三四丁裏］
明理續侖　傷寒一提金
傷寒瑣言　殺車槌
傷寒的本　證治要訣

截江綱　脉訣
金匱鈎玄　脉訣指掌
癍論萃英　丹渓心法
證治類方
以上四十三部也
霊蘭初集
素問逸篇　内景圖書
外景圖　脉微
医斈　説療
霊蘭二集
聖済経　彦経
痘疹折義　祖剤
診籍
［三五丁表］

清

金匱要略論註　【程郊債】徐彬
金匱要略直解　【襲乗赤】程林
聖剤總録纂要　【仝】
傷寒御條辨　【程郊債】
女科秘方　【襲乗赤】

校利保産紀要　【何炒】
本屮綱目類纂心讀　【何鑽】　一巻
濟陰綱目　【武之望】
茲幼綱目　【仝】
意医商　【蒋吉】
醫宗説約　【仝】
医鏡　【蒋】
痘疹証治大還　三巻
咳嗽證治大還　一巻
労損証治大還　同
［三五丁裏］
瘧痢証治大還　二巻
證治大還　【陳三良】
黴瘡秘録　【陳司成】　二巻
石室秘録　【陳土銀】　廿巻
本草新編　【仝】
傷寒五法　【陳養晦】
本屮洞注　【沈穆】
食物會纂　【沈李龍】　十二巻　同二書
経絡全書　【沈子録】　四巻
博物知本　【仝】
藥性纂要　【王応遴（遜）】　六巻
本屮大全　【王省乾（応遴）】　百巻
行笈驗　【王省乾】
秘方集驗　【王惠子】　二巻
功要秘方　【仝】　一巻
握霊本屮　【王胡】
［三六丁表］
雜症圖機　【同】
十剤新箋　【同】
傷寒啓櫃　【同】
女科要訣　【同】
医方集觧　【汪認菴】　六巻
本屮備用　【同】　四巻
霊樞纂要　【同】
錦農秘録　【馮張】
診宗山脉一巻
兼症折義一巻
　都各傷寒大成
医帰　【仝】
本艸滙　【郭佩蘭】　廿巻
痧脹玉衡　【郭士邃】
医林新侖　【陸鹿景】
疏鈔金錦　【盧子田】
［三六丁裏］

痘科鍵　四巻
救偏瑣言　【費啓泰】
痘科類篇　【翟良】
丹方彙編　【呉鼎人名銭字青綸　康熙丁亥著】　四巻
醫宗金鑑　【勅撰　乾隆帝却纂】　九十巻
幼科折哀　三巻
幼々集成　【陳飛霞】　六十巻
眼科大全
傷寒命三註　【周楊俊】

竪籍考終

【参考文献及び史料】

参考文献

▲青木歳幸『在村蘭学の研究』、思文閣、京都、一九九八年。
▲赤松文二郎『群誌後材　扇城遺聞』、中津小幡記念図書館、一九三二年。
▲内田鉄平「近世村社会における村医者の活動―島原藩豊州御領の事例について―」（『大分縣地方史』第一九八号、二〇〇七年所収）。
▲海原亮『江戸時代の医師修行　学問・学統・遊学』、吉川弘文館、東京、二〇一四年。
▲大島明秀「屋形家と中津藩儒倉成龍渚―写本「外療内治法」を中心に―」（中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第七巻、中津市教育委員会、二〇〇八年所収）。
▲黒屋直房『中津藩史』、碧雲荘、東京、一九四〇年。
▲後藤重巳校訂『記録并聞書扣帳』、別府大学附属博物館、一九八九年。
▲田﨑哲郎『在村の蘭学』、名著出版、東京、一九八五年。
▲田﨑哲郎編『在村蘭学の展開』、思文閣、京都、一九九二年。
▲富田修司「耶馬渓屋形家とその資料について」（中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第七巻、中津市教育委員会、二〇〇八年所収）。
▲中津郷土塾編『豊前中津　田信傳』、中津大神宮、二〇〇〇年。
▲本耶馬渓町史刊行会編『本耶馬渓町史』、一九八七年。
▲ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀「耶馬渓屋形家の系譜」（『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第八巻、中津市教育委員会、二〇〇九年所収）。
▲ヴォルフガング・ミヒェル「初期紅毛流外科と儒医向井元升について」（『日本医史学雑誌』第五六巻第三号、二〇一〇年所収）。
▲吉田洋一「明治初期における耶馬渓地域の医療―屋形家史料「年中行事日記簿」を中心に―」（中津市歴史民俗資料

館　分館　医家史料館叢書』第七巻、中津市教育委員会、二〇〇八年所収）。

▲吉田洋一「江戸時代後期における地域医療の実情―屋形家史料を素材として―」（『中津市歴史民俗資料館　分館　医家史料館叢書』第八巻、中津市教育委員会、二〇〇九年所収）。

▲吉田洋一「耶馬溪屋形家の種痘活動―明治初期を中心に―」（『中津市歴史民俗資料館　分館　医家史料館叢書』第九巻、中津市教育委員会、二〇一〇年所収）。

史料

▲「醫療歌配劑秘本」（写本、仮綴二八丁、二七・五糎×一九・八糎、田渕家資料、仮目録番号九、中津市歴史民俗資料館蔵）。

▲津玄海集「醫籍考」（写本、九四丁、京都大学附属図書館富士川文庫蔵）。

▲屋形諸道写「必用灸穴秘訣」（屋形四〇、写本、五六丁、一九・四糎×一三・六糎、中津市歴史民俗資料館蔵）。

▲屋形諸道写「金瘡跌撲療治伝」（屋形四一、写本、四九丁、一九・二糎×一三・六糎、中津市歴史民俗資料館蔵）。

▲屋形諸道写「雑記」（屋形四二、写本、五〇丁、二六・五糎×一七・八糎、中津市歴史民俗資料館蔵）。

▲屋形諸道写「雑書」（屋形四五、写本、五三丁、一二・八糎×一九・〇糎、中津市歴史民俗資料館蔵）。

▲屋形諸道写「詩經」（屋形三三八、写本、二二丁、二三・九糎×一六・五糎、中津市歴史民俗資料館蔵）。

▲屋形諸道写「外療内治法」下巻（屋形三四九、写本、二二丁、二八・三糎×二〇・五糎、中津市歴史民俗資料館蔵）。

▲屋形諸道写［無題］（小口書「脉訣」、屋形三五二、写本、上巻四五丁、下巻五一丁、二四・二糎×一六・九糎、中津市歴史民俗資料館蔵）。

▲屋形諸道写「醫籍考」（屋形三五三、写本、三六丁、一二・〇糎×一七・三糎、中津市歴史民俗資料館蔵）。

注

1 富田修司「耶馬渓屋形家とその資料について」（中津市歴史民俗資料館分館 医家史料館叢書』第七巻所収）。ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀「耶馬渓屋形家の系譜」（『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第八巻所収）。

2 吉田洋一「明治初期における耶馬渓地域の医療―屋形家史料「年中行事日記簿」を中心に―」（『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第七巻所収）。同氏「江戸時代後期における地域医療の実情―屋形家史料を素材として―」（『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第八巻所収）。同氏「耶馬渓屋形家の種痘活動―明治初期を中心に―」（『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第九巻所収）。

3 「養民」は『書経』中の「禹曰、於帝念哉、徳惟善政、政在養民」（大禹謨）から得たものであろう。拙稿「屋形家と中津藩儒倉成龍渚―写本「外療内治法」を中心に―」（中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第七巻所収）、八頁。

4 前掲ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀「耶馬渓屋形家の系譜」、九～一〇頁。

5 『記録并聞書扣帳』、一四頁。

6 署名は「羅山梁来徳」とある。「必用灸穴秘訣」（屋形四〇）。

7 『豊前中津　田信傳』、一九～二二頁。書簡に日付は入っているが年度は記されていない。

8 前掲拙稿「屋形家と中津藩儒倉成龍渚―写本「外療内治法」を中心に―」、九～一一頁。

9 ヴォルフガング・ミヒェル「初期紅毛流外科と儒医向井元升について」（『日本医史学雑誌』第五六巻第三号）、三七六頁。

10 幕府の医学館督事をつとめた多紀元胤（一七八九～一八二七）も同名の資料を編纂しているが、諸道写「醫籍考」とは構成、ならびに医書の配列が異なる。

11 富士川文庫本、四九丁表。なお、傍線は筆者による。

12 屋形諸道写本、二一丁裏。なお、富士川文庫本ではこの著者名は「徐尓貞」となっている。

13 富士川文庫本、五三丁表～裏。屋形諸道写本、二三丁表。

14 蔵書印より。

村上春海の紀行文 ―「諸雑用記」を中心に―

吉田洋一

要旨

本稿は、表紙に「諸雑用記」とある。表紙をめくると、嘉永元（一八四八）年京都より帰路の日記とあるが、「七月朔日府中より金谷まで八里」とあり、また、「駿府出立」、「浅間山に参詣」などとあるので、恐らく江戸から中津までの道中における備忘録と思われる。この頃の村上家は八代目春海（一八〇八～九三）が四〇代前半、九代目田長（一八三九～一九〇六）が一〇歳前後であることから、同書の作成者は春海である可能性が高い。同書の特筆すべき点は、道中にて宿泊した宿名や巡見した寺社、食事の献立とその値段などがほぼ連日記載されていることである。これらの情報は、中津藩士だけでなく、当時の旅行（紀行）の様子を検証する上で有益なものと思われる。

キーワード

「諸雑用記」、村上春海、江戸、京都、富士登山

はじめに

本稿は、村上医家史料館所蔵史料のうち、「諸雑用記」を素材として、江戸後期（特に嘉永年間）の村上家と中津藩との関わりについて検証するものである。まず史料の形態などに関して述べた後、同書の内容について現時点で解明したことについて瞥見する。

一、史料の概要

本史料は、表紙に「諸雑用記」と墨書のある全六八丁（表紙とも）の横半帳（小横帳）である。一丁表に「嘉永元甲し」（図一・図二）とあるが、この頃の村上家は、八代目・春海（一八〇八～九三）が四〇代前半であることから、作成者の可能性が高い。全六八丁の書体は丁毎に文字の大小はあるものの、筆体に相違点はみられない。

図一　「諸雑用記」表紙（村上医家史料館蔵）。

図二　「諸雑用記」表紙見返しと一丁表（村上医家史料館蔵）。

書写者と推定される村上春海について、『御家中系図　嘉永三年改』より紹介すると次の通りである。

維一　貞　貞吉　貞　宗玄　　生国豊前

文政七年甲申年四月四日家督無相違被　仰付候
同十丁亥正月十一日願之上烏髪被　仰付候
同年六月十日願之上宗玄ト改名被　仰付候
同年八月七日御領内松木谷寒水村元村瘟疫流行ニ付療治被　仰付先方廿日餘罷詰候
天保三壬辰年閏十一月十三日家業出精相勤候ニ付藥種料金二両被　仰付候

四

同五甲午七月朩日家業出精相勤候ニ付藥種料金四両以来被下候様被　仰付候
同年十月廿四日日田御郡代塩谷大四郎御領内今津浦御滞留ニ付伺御機嫌被　仰付先方十日罷詰候
同六乙未年三月三日手前抱御中間被　仰付候
同七丙申年五月廿二日昨年疱瘡流行之節家業出精相勤候旨被為及
御聽御目録銀子一枚被下置候
同八丁酉年五月朔日家業出精相勤候ニ付暮々銀子五枚宛被　仰付候
同年十一月朔日御近習御医師被　仰付候
同十三年壬寅年正月十一日當夏　御参府御供立帰被　仰付候
同年二月六日御代匕被　仰付候
同年十二月廿五日家業益出精相勤候之旨被為及
御聽暮々銀子拾枚宛被下置候様被　仰付候
弘化三丙午三月十八日願之上宗玄ト改名仕候
同年七月廿日久留嶋伊豫守様御大病被為在爰元御医師御頼被成度旨御使者ヲ以被仰進候ニ付只今ヨリ彼表江指急御様子相伺候様被　仰付同日即刻出立夜込罷越御容躰奉拝診御薬等指上候処先ハ少々御寛快被成候ニ付同廿四日夕彼表御暇申上同廿五日帰着仕候[1]

「宗玄」の呼称は、六代目村上玄秀にもみられる号である[2]。春海は文政七（一八二四）年に、七代目玄水より家督を相続し（一七歳）、同一〇（一八二七）年に「烏（有）髪」の許可を得ている。『医も亦自然に従う（村上医家事歴志）』によると、文政七年六月から約六年間、豊後日出の藩儒帆足万里（一七七八～一八五二）に入門したという[3]。同年六月には「宗玄」と改名、同八月には領内の松木谷、寒水村、元村[4]で発熱性の病が流行し、約二〇日医療に従事している。その他の療治に関しては、天保三（一八三二）年一〇月には日田代官の塩谷大四郎、弘化三（一八四六）年七月には豊後森藩主久留島伊与守[5]の治療を行っている。

『御家中系図　嘉永三年改』に記載のない春海の事績で主要なものは、天保八（一八三七）年三月に、一六五の病名を

記した「古今良方」を著し、弘化四（一八四七）年には、奥平昌服の侍医に就任、元治二（一八六五）年には隠居の許可を得ている[6]。

図三　春海（宗玄）の知行宛行状（嘉永元年）（村上医家史料館蔵）。

二、史料の内容

本史料を内容ごとにまとめると次の通りである[7]。

①「京都より帰路日記」（一丁表～二二丁表）
②「（仮）富士登山記」（二五丁表～四二丁表）
③「江戸御滞留中御到来」（四二丁表～五六丁裏）
④「（仮）日光東照宮道中記」（五六丁裏～六〇丁裏）
⑤「（仮）金銭書き上げ（備忘）」（六一丁表～六五丁表）

①の冒頭に「六月廿三日発足日記別帳へ有り」とあるのは管見に及ぶ限りにおいて詳細は不明であるが、⑤の「金銭書き上げ」の中に当日の支出と思われる記述がある[8]。史料によると、嘉永元（一八四八）年七月一日に府中を発し、八里先の金谷（現静岡県島田市）、浜松、掛川を経由して三河国二川宿に入り（同三日）、岡崎、前渡、鳴海、宮（熱田）、四日市、桑名、亀山、関、水口、石部、草津、大津から同月一〇日に京都に入った。同十一日より妙心寺や嵐山を巡遊していることも記されている[9]。道中での注目すべき点は、それぞれの宿場での「旅籠料」などが記載されていることであり、料金はおおよそ一名一二〇～一五〇文のようである。中津藩の『御参勤御供日記』[10]によると、同年に陸路にて参勤が行われているが、「五月二日四ッ半時発（参勤期幕府へ伺之上七月中ト定メラレシガ、病気ニツキ願之上）[11]」と記されており、春海の記述との齟齬が確認できる。しかしながら本史料には「余申とし君の御共して東都ニまいりけるとき[12]」

という記述もみられることから、今後の検証が必要となろう。

二五丁表から始まる②の部分は、六月二三日に江戸を発し富士登山を行った記述である。春海は「余、国を出候頃より不二山ニ登んと心中約しけれハ」[13]と、富士登山に興味を示していたことが分かる。当日の様子は次の通りである。

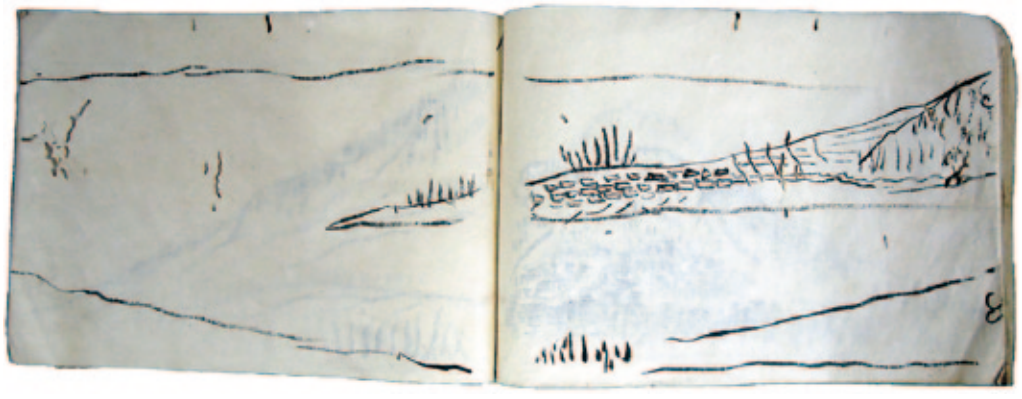
> 同廿六日暁七半時地蔵堂発足、九ツ時ニも有けん須走りといふ所ニ着、小甲学十大夫・今大夫へ相頼、富士登山之支度なん整ひて八時ニも有けん、合力吉兵衛といふ者を賃ひ登山を始む[14]

その後は、五合目辺りで一泊したこと、山中は寒風が冬日のようであったこと、七合目辺りの日の出が絶景であったこと、九合目辺りからは頂上が見え数百人は「市」をなすようであること、下山の折に膝を痛めて歩行が難儀であったことなどの記述がある。

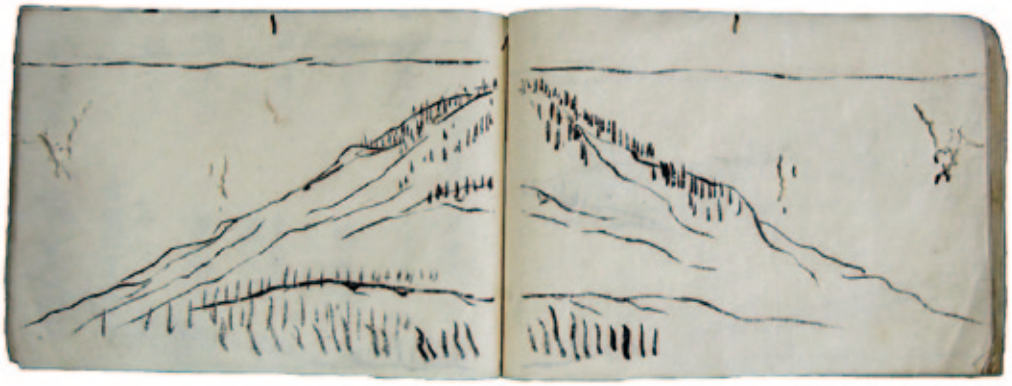
富士登山（富士詣）はいわゆる「富士講」信者を中心に広まっていったようである。他の宗教や教育（藩校など）とは違い「富士講」自体は幕府の統制には含まれていなかったようで[15]、当時は比較的自由に登山が可能であったと考えられる。その後②の記述は、①の記述の共通する箇所も見受けられるが、京都から大坂を経て瀬戸内海を通って国東半島付近の姫島に至っている（図四～図七）。

図四　姫島図（三八丁表）（村上医家史料館蔵）。

図五　姫島図（三八丁裏・三九丁表）（村上医家史料館蔵）。



図六　姫島図（三九丁裏・四〇丁表）（村上医家史料館蔵）。



図七　姫島図（四〇丁裏・四一丁表）（村上医家史料館蔵）。

③は春海が江戸滞在中に、中津藩士から藩主への献上品を記したものである。出自が判明した藩士も存するが、春海がこれを記述した意図など不分明な部分が多い。

④は日光東照宮参詣の記述である。判読不明の箇所が多く詳細な検証が今後の課題である。

⑤は「金銭書き上げ」と題したが、①から④の時期の主な支出を再度書き記した可能性も考えられる。また六五丁表には「雑用記」とあり、細目には「キウリ代」「油豆腐代」の記述もみえる。

おわりに

以上が本史料の概略であるが、史料②の序文と思われる箇所に、

> 余申とし君の御共して東都ニまいりけるとき、道中のあれらましを記さんと思ひけるとも、公務ニ者全うして其隙なかりけれハ、せめてまるさの途之事共あら〳〵書とめん、荒〳〵なから筆とりて東都之繁栄余所ニ感しける[16]

とあることから、①と②は同時期のことが記されていると考えるのが妥当であろう。それを踏まえたうえで、富士登山や日光参詣の詳細（同行人や支出、食事の献立やその値段など）を丹念に精読することが、中津藩士だけでなく、当時の旅行（紀行）の様子を検証する上で肝要なこととなると思われる。

【史料】

［表紙］
諸雑用記

［表紙裏］
植山新次郎

京都　竹三卿
雪月花
世の中江唯此三の
瀬をのミ
津々こそ
あらまほしけれ

［一丁表］
嘉永元甲とし
京都ゟ帰路日記
六月廿三日発足日記別帳へ有り
七月朔日大晴、府中ゟ金谷迄八里
一暁六半時駿府出立、浅間ニ参詣、陳臺寺義元首墓ニ参ル、山ノ嶺一間四方之辻堂有り、中々口リニ之首きほしを安置するのミ、其前ニ門有、草茫々誠ニ寂々たり、

［一丁裏］
古来見ひ出し落涙ニ及ふ、香典四銭寺へ上ケ焼香ニ頼置、
暮六ツ金谷着
一六十八文　岡部昼飯
一十六文　あめ代
一廿四文　金谷飯代
一金壱歩　引替ル
内
三　五
壱〆弐百五拾九文
壱分九十文
大井川上下
三人荷一荷
残て
半川越賃

四百六十三文つり

［二丁表］

又

五百廿四文　金谷三人旅籠

泊り宿　山田屋　治三郎

一五拾文　朝比奈川々越　三人分壱人十六文

□□

一弐百文源七へ

同二日晴　金谷ゟ濱松まて　十二里

一暁七ツ半金谷出立、原川昼、暮過濱松へ着

一十二銭　掛川出切飯

一四十八文　原川昼飯

［二丁裏］

一卅六文　佐夜中山　由来記三冊

一十弐文　茶代

一八文　同

一八文　同

一八十四文　見付ニて飯代

内十弐文　健蔵へ遣ス

〆七十弐文

濱松ニて

一五十文　肴代

百八十文ツヽ、

一五百四十文　三人旅籠

［三丁表］

旅宿浅田屋　長左衛門

一金弐朱　健蔵・源七へ

七百文　為昼旅籠

遣ス　二川

同三日熱蒸濱松ゟ□田迄海陸　七里余

朝六半時濱松出立、舞坂□荒井渡海、今切口関所舟ゟ飯田武兵衛呼寄せ通行、同人宿ニ昼飯頼置、床ニ宣長之和歌有り左ニしるす

［三丁裏］

おもふことをよめる歌
思ふことハ有すやまめやもろこしのかゝのこゝろのよの
人はきかすともよし今こそハきかすなりなめ大直日神し
いませハ真心に又もかへりて真直にしきくまにあらむを
思ふ

［四丁表］
こと心にこめていはすやまめや
宣長

夕七半過時三州二川宿ニ着
沢満屋
弥二右衛門元へ
此ハ荒井問屋舟世話人也
■一五拾文　濱松屋伊左衛門へ茶代
一百十六文　荒井渡し舟賃三人分
五分
一三百文　飯田武兵衛へ
三人昼旅籠

［四丁裏］
一百文　同所
茶代
一四文草　茶代
一八文水　茶代
一五百廿四文　二川三人旅籠

同四日大熱暑　二川ゟ岡崎迄
八里半余
暁七ツ時二川出立、四ツ時過法花寺村へ着、昼飯夕七

［五丁表］
半前岡崎へ着
口
旅宿　田田屋新助
一弐拾二文　御油前宿ニて
飯
一百文　二川宿出切
唐室へ香典
右者永仙院様御正当恵光童子三回忌、正殿ニ而恵菓
相頼尼僧二人居読経致候所立寄相頼置、法名相

［五丁裏］
尋候間両人法名相記シ遣候事
一弐拾八文　法花寺ニて昼
十一文
一七文　乞食子供へ

遣代
一六百文　岡崎ニて三人旅籠
一金壱歩　出金
内壱〆弐百沢田氏共一同ニ取替旅籠払

同五日熱蒸如昨日午後涼風
暁七半時岡崎田口屋新助

［六丁表］
宅出立、四半過時分前渡村昼飯、夕七時前宮へ着
旅籠　丁子屋■
謂義元　善右衛門
墓

五日暁
一弐拾四文　蝋燭壱丁
五日四半過時　前渡村ニて
一七拾四文　昼飯代
八　左側茶屋
一四拾八文　鳴海ニて飯代
一七百五拾文　宮ニて三人旅籠
明日舟中弁当込
五拾文

［六丁裏］
一金壱歩　銭ニ引替ル
内壱貫弐百七十弐文
宮渡海舟
賃銭三畳
敷壱畳ニ付
四百廿四文ツヽ、
六拾八文　同断、薬籠
此分手前薬籠　壱荷分
〆壱〆三百四拾四文辻
上下二人分
十ツ割〆

［七丁表］
内六十八文ヲ除ケ
壱〆弐百七拾弐文
二ツ割〆六百弐拾六文ツヽ、
六日
一百文　健蔵へ遣ス

君か代ハいそほを針と
なて
とまへらし給ふとも尽し

宮ゟ四日市まて十里余　天の羽衣
同六日曇
洛東雨月庵
一朝七半時宮ゟ　田雖丸
船
一弐拾四文　宮舟中
三人祝儀
一三拾文　桑名店
茶代
（頭書）「船船中ニ昼飯八半時」
［七丁裏］
一六拾弐文　桑名飯代
百八十文
一五百五拾文　四日市
三人旅籠
（頭書）「桑名着■七半過」
時分四日市着
宿　大黒屋
清兵衛
八日昼
一弐百文　健蔵・源長へ
遣ス
四日市ゟ坂之下八里半余
同七夕　熱蒸
暁七ツ時過四日市出立、四半
［八丁表］
時亀山御城ニて昼飯、夕七半時前坂之下へ着
坂之下
泊宿　中村屋孫七
一三拾弐文　亀山ニて昼飯代
一六文　同家へ茶代
一三文　関入口ニて同断
一弐拾六文　関ニて飯代
一五百弐拾四文　坂之下ニて
三人旅籠
一六拾八文　筆捨山茶屋
肴酒茶代　川地屋半兵衛ニて
［八丁裏］
一三百文　健蔵源丁へ
一四文　紙三枚
同八日熱蒸　坂之下ゟ石部迄九里
暁七過時坂之下出立、四半時水口、昼中村三郎宅へ立寄、

酒肴ヲ出ス、手前土産江戸苧末廣七半過時分石部ニ着
宿　土屋茂兵衛
一七拾二文　松尾村ニて早昼

［九丁表］
一十六文　水口ニて衣替之
帯
一三十四文　石部早宿ニて
夕飯
松尾手前
一金壱歩　す□原代
弐百文
一五文　水代
一四百文　健蔵源丁へ
一五百廿四文　石部三人旅籠
一

［九丁裏］
同九日炎暑如昨日
石部ゟ京迄九里半
暁六時前石部出立、九ツ時月之輪新田へ着、夕七半過時
上京油之小路出水通油小路西へ入ル御屋敷へ着
五十弐文
一三十文　草津追分
茶屋ニて
飯代

［一〇丁表］
一卅文　月之輪ニ　飯
一二十文　大津ニて同断
一五拾文　三条小橋
茶代
支度替
一八文　道中
茶代

十日炎暑如昨日
今日京都御屋敷留止願ゟ東山不銭遊覧、御屋敷物

［一〇丁裏］
弥助案内者致舟人ニて終日、夕ニ四条河原夕涼、誠ニに
ぎ〳〵しく繁華之事ニ相見候
一銀弐匁　南禅寺ニて
四分　両人昼飯
一百匁　各所ニ賽銭
一五百七拾五文　御屋敷止

留中
内　　米ゟ蚊衣
■損金まて

［一一丁表］
十一日
朝妙心寺参詣、趙心院立寄ル、其ゟ嵐山ニ遊ひ夏暮桜遊覧、八半時御屋敷へ返し、七ツ時御屋敷出立伏見へ、夕七半過時分大黒屋源兵衛へ着
一五十文　源長へ遣ス
百弐十四文
一五百文　伏見旅籠
六百弐拾四文　夕飯五人分

［一一丁裏］
一八百七拾五文　伏見夜舟賃銭
五人分
一百七拾文　薬籠壱同断
一百弐拾四文　明荷半荷
同断
〆
壱〆百七拾弐文
伏見ゟ大坂御屋敷迄着

［一二丁表・裏］白紙

［一三丁表］
覚　伏見夜舟夕飯共ニ入用
申
七月十一日
一壱貫四百文　御上下八人様
御乗合舟賃
百七十弐文ツヽ、
一百七拾弐文　御薬籠壱荷
御舟賃
一百弐拾四文　明荷半荷
同断
一壱貫文　御上下八人様
御片旅籠料
百廿四文ツヽ、
〆
弐貫六百九拾八文
右之通正ニ受取申上候、以上

［一三丁裏］
伏見京橋

大黒屋
源兵衛
申七月十一日
上
右伏見大黒屋仕切リ也

［一四丁表］
同船　大坂ゟ中津海上
飛脚
七月十三日
一金壱両壱歩　二番一間
小倉船頭□　借切り
岡田屋
治郎吉
内　新吉
日田久乙吉
六月廿日
一金壱歩　甲州路
内　明荷
六拾九文　賃銭
過原岡ゟ返ル

［一四丁裏］

六月廿日出立
一金子壱両　生民
初三歩　源吾両人
後壱歩
右者両人甲州路ニ荷才領ニ遣候、尤旅籠・昼旅籠共ニ込
一

［一五丁表］
一銀拾六匁弐分　舟中扶持
上下三人分
出金　壱歩ト
三拾文
右之通り御座候
七月十三日
紙屋
佐兵衛
右者古河ニて受取
一金子弐両　先ニ歩沢田氏ゟ
〆壱両銀四十三匁　入ル

［一五丁裏］
十四日　宇之吉

一金子弐朱　会沢宇之吉
　為酒手遣ス
同日
一同壱歩　二色白粉代
　未頼　京都着
　へ相頼置
同日
一同弐朱　女三徳二ツ
　買上ケ
一百七拾文　筆艸入れ

［一六丁表］
同日
一金子弐朱　黒蛇目
　弐百三十三文　傘壱本
一同壱歩　健蔵へ遣ス
　伏見ニて取替分
一弐歩弐朱　生民へ
　遣ス
十壱歩　源
同日夜
一金壱歩　健蔵へ
　遣ス

手前ゟ取替同人母土産買候而如此

［一六丁裏］
十四日
一金弐朱　生民へ
　取替
　同日百筆子代不足之分
同
一金弐歩　源吾へ遣ス
　此ハ京都之取替候分
　三歩之内弐歩
　のこり壱歩
同　大坂
一八百文　雪駄屋へ

［一七丁表］
同
一金四両　松井ゟ
　受取
同
一弐百四十匁　古棟團三
　筆十本
一百二十匁　黒弐丁

〆
同　　源長へ遣ス
一弐百文
　酒手ニて賃之外也
同
一百文　漬生姜
　梅干代

［一七丁裏］
同
一四十八匁　瓜三本
同
一金子壱両　原岡へ
　其外品々相頼ム　土産物
　　頼ム内遣ス
同
一同弐両三歩　沢田ゟ入ル
同
一同弐朱分　虎屋
　饅頭
　四箱
同
一弐百五拾文　酒壱升

［一八丁表］
一

［一八丁裏］
七月九日夕京都着、中一日滞留、十一日夕伏見へ下ル、
夜四ツ時夜舟ニ乗る

［一九丁表］
七月十四日　去ル十二日六半時
　着坂
晴
一十四日暮六半時冨嶋と申所ゟ□分小倉船頭町岡田屋治郎
吉船其夜舟中ニ泊ス、十五日朝出帆、四ツ一ノ谷之渚ニ着、
風を待ツ、夕七時前涼風起り出帆、終夜月夜星稀也、
　未明ゟ
海上ヲ走り十六日朝室津之沖江嶋と申所泊止ス、六半時
出帆
一十六日天気西風、朝出帆

［一九丁裏］
舟徘徊庄屋嶋辺行不滞六、七里

訪舟人舟捨

一十七日天気西風、舟如昨日順風ニ非ニ因て着〇田戸津、以
金比羅宮
謁須徳院廟余■謁之、
日暮帰舟　已而出帆動揺ニて
行三、四里舟中苦ム
夜半■投碇泊海中

一百弐拾文　金比羅宮御札
一九拾文　湯呑茶碗

［二〇丁表］
一百拾文　寝堂
壱枚
一金弐朱　舟頭ニ取替ル
一十二文　賽銭
一八文　途上茶代
一五文　同断
一五文　同断
一三十文　茶呑茶碗
一ツ

［二〇丁裏］
一十八日天気西風如昨日、朝六半時四人供ニ使櫓、舟行一
里捲帆舟行
頭
一金弐朱　船中船子共へ
為酒手遣ス
一丁銭百十文　魚舟ゟ魚代
回
同日午後ゟ櫓ヲ以四人舟行、四州豫州諸島此海

［二一丁表］
舟曰火打灘、夜半依嶋泊、今日舟行不過七、八里、三田
□井を発ス
十九日同、昨夜半出帆順風、舟大進先頃出帆之時諸使櫓
過ニ神室
四時舟行十九里、依之舟中不穏動揺不止、九ツ時上関ニ
留メ、舟人汲捨水手軍嶋、日已暮終夜舟行四十里、至豊
後姫嶋泊辺泊

［二一丁裏］
吹風
二十日暁七半時分出帆、舟漸進遙々益波涛不穏故也、夜
已曙順風舟行、九ツ時着岸、今日十里四、五里舟行也、
先ツ健蔵ヲ遣して宿へ着岸ヲ知らする
七月廿日　日明舟
手前

御手　生民
柴や　健蔵三人

［二二丁表］

三人
一金壱両三歩　飛船大坂ゟ中
津迄運賃
一六百文　船中旅籠
六日分　三人
飛船ハ小倉船中之間一間代金壱両三歩相渡

［二二丁裏～二四丁裏］白紙

［二五丁表］

余申とし君の御共して東都ニまいりけるとき、道中のあれ
らましを記さんと思ひけるとも、公務ニ者全うして其隙なかりけれハ、せめてまるさの途之事共あら〳〵書とめん、荒〳〵なから筆とりて東都之繁栄余所ニ感しける、六月後の三日東雲の頃東都御殿を発足、下僕二人を召連て同朋之輩品川といふ所まて送り、別を告て各返る鈴ヶ森、行々鈴ヶ森六郷川ヲ渡り、川崎・生麦・神奈川相達
何も西山ニ仰けれハ、程ヶ谷へ○泊ヲ乞ふ
中江懸申候、東都ゟ心宿迄人家相続き綿々として不断
○油屋善二郎へ

［二五丁裏］

天気　七
同廿四日未明木半時程ヶ谷を発足、堺木といふ所ニ至ル、此南ハ武蔵・相模之境、信濃坂を相越、戸塚・影取・藤
を通り
沢・四ツ谷を通り、南邨馬入川を渡り平塚、追々夕ニ趣（ママ）けれハ大礒の宿の鱗屋八郎右衛門へ一泊を乞ふ、余国を出候頃より不二山ニ登んと心中約しけれハ、此大礒者毎年東都不二山ニ参詣と旅したり、其宿を勤ける者も有けれハ大署主人に問ふ、八郎右衛門くわし、登山の事共尋けれハ、明日ゟは登山の道ニ取付けんと相楽けり、此里ニ辱も名高き鴫立沢
同廿五日天気殊ニよろし

［二六丁表］

といふ西行法師の古詠有り、正面ニ法師の木僧有安置す、左翁の墓有り、法師の安脚者路ふときニ用、朝暮夢しろ
込めし
ひける五尺ニ一世のふりの杖有り、余此を手ニ取り見る

に、実ニ偽物ニなし寄特之事共也古を思ひあくいと憐也
同廿五日天気殊ニよし、暁七半時大礒を出立、行々梅沢
通り酒匂川を渡り、井々つミ村・田古村・穴部・塚原・
関本を行通き、矢倉坂御関所通行、地蔵堂の山家へ泊す、
誠ニ山家ニて蚊衣不用、疏食飲水同然

［二六丁裏］
同廿六日暁七半時地蔵堂発足、九ツ時ニも有けん須走り
といふ所ニ着、小甲学十大夫・今大夫へ相頼、富士登山
之支度なん整ひて八時ニも有けん、合力吉兵衛といふ者
を賃ひ登山を始む、此ゟ先須走之瀧ニて嗽手水南ニて南
改此は不浄を清むらん也、何も小甲の案内也、芙蓉峯（山
＋廉）ゟ三里も行く、追々四、五里ニも相成ときハ揃木不
焦
生殊品途上ハ唯々焼土

［二七丁表］
持て
也、此ゟ一合、二合とて土人むろといふて石と木をもて
如箱家を造り、室ことに五、六人又ハ七、八人も居りて
ニ
□火打て
往来之人々ヲ茶水を与ふ、遥座蓉峯白電封峯すてニ五合
ニ到れハ寒風刺肌ホ、七合到れハ冬の日の如シ、絹入あ
わせニて冬の覚悟也
（行間）「□□行々俊坂斗上二里□といふ坂ニ五合五夕ニ
泊す、夜ニ四時也、夜半小用ニ行、四方ニ眺れハ残下
遥麓ニ見、我室残日ゟ高シ」
同廿七日未明七時五合五合之むろ発し炬者三本持て登、
九前
上方寒風刺肌冬日の如シ、皆

［二七丁裏］
衣服如冬日、行々俊坂斗上、途上甚苦む、六合を過き七
合ニ到けれハ由輪東方黄黒色絶景壁へん方なし、願考ル
ニ日輪出現之前也、願群全歌を思出て口すさミつ々登け
る
人とハ、如何対ん
言の葉も
及ぬ不二の曙の空

［二八丁表］
となん感泠しツ、登りける、漸ク七合のむろニ取付けれ
ハ、日輪出東方風景絶妙光線之奇麗なり、壁方なし、登
上巌石或者十里一枚之岩石、漸八、九合ニ挙上けれハ登
山の行人之衣白衣為市、各持金剛杖、唱経文登上、頂上

数百人
も又むろ有、登上人為市、茶店一膳飯甘酒・茶漬屋・小間物店有之、繁栄也、日も絶増々乾池西北之絶壁の如ク東南ハ平和ミ坂寸歩行て東

［二八丁裏］
方へ当て鳥居有之、其辺ニ唐金之造り木壱丈も有之乎、弥陀仏を安置ス、乾池之回り壱間、深さハ七間も有之様ニ見ル、東北之□御石之上三尺四方井有りて水年中満々、其水祈禱ニ相□ニ申唱、諸人小テ十利ヲ貰持返候者数不知、我家来も一十利求候由、

［二九丁表］
西京迄其所ニ而米ヲ飯一膳次之日ニも夕七ツ時ニ而有之と覚る、其ゟ下山上宮辺とハ違い、殊之外急坂ニテ其内へ□沢山流れて下山之者候ても其谷々々足ヲ□テ□ニそる、口者流ニ乗て苦も無ク一丁、二丁も下り候、暫時老夏衣へ冬衣着更所迄下申候、尤頂

［二九丁裏］
上有東之方へ当テ曇雲なる哉、とうく之声遥ニ聞候所下り見候へ者、須走之登山道大夕立ニ而、其頃ハ大雷鳴之由ニ諸人申出候、絶頂ゟ夜ハ遙ニ山之麓ニ少々の曇雲出来候様見下シ候、即此日ハ立雨也、絶頂ニて外僕百三郎ト申者へ

［三〇丁表］
氷一片包下候、此所ニ而賞翫□品暑中氷致物ニて風味も一段ニ覚候、其内日も傾キけれハ一昨夜之宿十大夫家ニ返り一泊頼候、此家病人有之診断被頼□□致遣候、為礼酒肴出候、献立左之如シ

［三〇丁裏］
一差肴　　苦鮒ニ油いり
一壽るめに指ミ酸浸し
　水芋せしミ□
一平皿　塩えび　汁アリ
　昆布
　　土産也　酒渡
一　右之口□■■□ミ□子ト共初肴ニ預ル

七月一日也
廿八日
一早朝須走小猪家ニ明て告て被立寄昨夕

［三一丁表］

下山之節左之膝ニ筋肉痛ミ候て歩行ニ難義、仍馬ヲ頼原近之故ニ着ク須走出立後九里之行駄始終ころ〳〵と下り道ニて原駅も芙蓉峯之麓也、□□海浜迄ハ指送之内也、夕四時頃原駅ニ着、一泊致候

七月二日也
廿九日
原駅出立、冨士川を

[三一丁裏]
舟ニ而渡、岩開ニ候故出ル、店屋甲州雨烟之硯石共□見ル、其ゟ道ヲ替て駿府ニ一泊、尤七ツ時前着ニて仙現之宮々ニ参詣、陳台寺今川義元公之首墓ニ仏参致候、何辻堂之躰ニて草茫々□不斗ニ差残り槿木□枝繁

[三二丁表]
茂して直不□外畑之畦ゟ参候所山中之静寂墓とて安置有之、往古之事感し私落涙ニ及ん事、段々青銅一百文出□備へ位□回香頼出し、今夜ハ金谷江一泊、濱松へ着、十二里也

七月三日

[三二丁裏]
一今日濱松出立、七里余り今切レ之渡海旧関所江ハ仰付武兵衛へ頼通候、同家ニ而昼両度□候所床ニ宣長之長歌有之、題ニ

思ふ事を読ル

思ふ事トはすやまめやもろこしの唐の心の人はきかすとも

[三三丁表]
よし今こそトきノ春ありなめ大直日神しいませハ真心に又もかへもて真直ニしきくよハあらんを思ふこも心にこめていはすやまめや

宣長

一午後武兵衛宿出立、夕七時頃三川弐川駅

[三三丁裏]
着

四日

一暁七ツ時二川駅発足、四時頃法蔵寺村へ着、昼二度□□致候、夕七半時岡崎へ着、永仙院様朝湍院ニ遥拝致候

五日

一昨日同刻ニ岡崎宿発足、宿屋田口屋新助也、四半時前後村へ着、書便夕七ツ時前

［三四丁表］

宮宿へ着、山間鳴海桶夾間を直行今川義元之墓一覧、唯々□山之尾浅キ谷中へ依然一片墳墓ヲ存ス、往事を思出し稍感吟致候

六日

一昨日同刻宮駅発足、桑名へ渡海也、八半時海上無異桑名着、初谷源内

［三四丁裏］

子ゟ同人親類桑名へ有之品物ヲ頼、完元持参候所彼等も無理引留酒等出、直ニ暇ヲ告て発足、夕七ツ半時四ヶ市駅着、今日行程十里也

七夕

一同時四ヶ市駅発足、亀山城下ニて昼飯、夕七半時

［三五丁表］

坂之下へ着、今日行程八り半

八日

外廻り通り

一同時坂之下発足、元朋友中村三郎宿博候所同人無理引留酒肴等出候、右少々手土産持参候、直ニ暇ヲ告て発足、七半時石部着、今日九里也

［三五丁裏］

九日

一同刻石部駅発足、九ツ時月之輪新田へ着、七ツ半時入京、三条通り左へ□り出水通り油小路西入ル御屋敷へ着、藤野吉郎へ対面土産共持参、今夜御屋敷へ一泊頼候、同人厚情而世話致□□ニて入用之品借申候、御同番

［三六丁表］

弥助ト申者へ聞合ニ所々座敷共を相伺

十日

一今日ハ一日豆留、弥助案内ニて里山之方荒々見物為妙心寺・嵐山等へも参候、四条川原之夕涼誠ニ■一面之人ニ而薄暮江乍替帰候

十一日

［三六丁裏］

一弥助案内ニて妙心寺之前趙趣院へ頼、妙心寺小僧モ案内
□る□共
頼、中中院へ出候、信長・信玄両公之墳墓も有之候、右之
脇へ信玄公ゟ寄付之宣法之謂□□有之中五、六尺端四尺も
有之、其ゟ嵐山葉桜共遊覧□

[三七丁表]
賀来ニ者遊覧中ニて案内共致呉候、午後
嵐山葉桜此方□天□寺共へ
之案内共致□候、午後□□□□還り其ゟ□□□□共□□
□□発足、夕七ツ時伏見駅大見屋源蔵宿着、一泊致候□
□後直同人世話野舟ニ乗り大坂へ下候間□出有之

十二日

[三七丁裏]
早朝大坂岩崎三郎屋敷へ着、然ル処江戸在番之面々疾ゟ
御屋敷参り居賑々敷有之

十三日

一宿ゟ大病人ニ而急ニ相戻候様書状参候間、直ニ早舟ヲ旋
義致内豊前小倉かしや町岡田屋治郎吉之□船申参候而□
□

一

[三八丁表]
間賃切り□□者へ乗船致候、其ゟ舟中六、七日、廿日宿着
姫島之図也（図あり）

[三八丁裏～四二丁裏]（図あり）

[四二丁表]
江戸御滞留中御到来
一酢食一重　戸室幸助
一肴煮付　牧野弥太郎殿
一同煮付　桑名藤右衛門殿ゟ
御両人へ
一同煮付　篠田証殿
一鍋壱ツ　志たし一丼
右同所ゟ御両人へ
一酢食一箱　桜井半次郎殿

[四二丁裏]
一醋飯一重　西原清菴殿
一同品　篠原金太夫殿

一同品　　前野雄治殿
一香ノ物壱重　　佐藤三禮殿
一肴煮付　　星平八殿
一肴煮付　　瀧澤檀弓殿
一鮑弐ツ　　星平八殿
一魚煮付　　久恒良仙殿

［四三丁表］
一同品　　篠金太夫殿
一瓜積一重　　同人殿
一魚煮附　　御同所
一生魚一尾　　桜井正半次郎殿
一キン着一ツ　　神谷源内殿
梅之粉包　　篠金太夫殿
すゝ一ツ
一足袋一ツ　　篠金太夫殿
烟艸入一ツ　　山﨑渚
一苧一包

［四三丁裏］
一御色糸一包　　間利子
十五日　　彌助
一煮豆　　篠原金太夫殿

壱ツ丼　　荒尾利右衛門殿
一肴煮付　　御同所
一うりつけ
壱ツ丼
一かまぼこ　　国見半太夫殿
鶏卵焼
こんにやく
いいたけ
かんひよう

［四四丁表］
一香之物　　瀧澤氏
一鮑
しま共
一肴煮附弐鉢　　佐藤三禮殿
酒弐升　　御両人様へ
一酒壱升　　高橋三平
一風呂敷壱枚　　瀧沢担右衛門殿
扇子弐本
猪口弐ツ
状ふし

［四四丁裏］

六月十四日
一手布　久恒
　壱包　良泉殿
一三品抱　荒尾利右衛門殿
［四五丁表・裏］（白紙）

［四六丁表］
　買物記
六月八日
一四百文ト三拾文　日雨傘代
同
一壱〆九百八拾八文受取候分
　此金壱歩ト三百六拾四文
　女三ツ櫛代
一但、壱組ニ付弐百廿四ツ、
同
一廿文　妙姜漬代
六月七日
一三拾六文　歯みがきト
　やうじ代

［四六丁裏］
六月九日
一弐十四文　夏朴一両
　葛根　同　代
　柴胡　同
六月九日
一正金拾三匁　江戸圓代
　但シ、六拾匁渡受取御座候
六月
一三百文　ウナギ代
同
一弐拾七文　刺見代
同九日
一百八文　或目書代
同九日　柳川ニ而
一六拾八文　木履代
同
一六拾八文　原岡氏江
　取替

［四七丁表］
同
一金壱歩　金鉛代
右六〆五拾八文
六月十日

一壱両弐歩　御懐中并余興
やたて
丸屋利平所ニ而
同
一百文　火打口代
同十一日
一三拾四文　菜種四両代
同十一日
一三百五拾文　牧野氏江
渡シ

［四七丁裏］
一壱両六月七日入替置仕舞候、又弐歩同十日入金仕候
一弐歩弐朱同十日播磨屋ゟ受取入申候
一三百文ト別ニ四銭六文六月十一日ニかたひら返金入申候
六月十一日
一八匁三分　雪駄代
同十二日
一四文　墨
黒坪毛代

［四八丁表］
同
一壱歩　小塚代
同十二日
一壱両ト弐百文　播磨屋遣シ
同　出シ
一八文　雑用之遣シ前ニ出シ
同十二日
一五拾銭　原岡氏江
槙野返金□上
同十二日
一壱歩ト弐百六拾弐文居滞留中之御飯料入金相成候

［四八丁裏］
六月十二日
一百八文　御草履代
六月十二日
一百疋　御股引代
同
一丁百十文　御雑用ニ出シ
十三日
一壱歩弐朱ト　かんさし代
弐匁　箸
同
一四十八文　茶代
同

一四十文　餅代
同　さんせん
一十六文

［四九丁表］
同　紙代
一十弐文
十四日
一七百弐十四文　目黒屋ニ出ス
同　四十七士ゑす
一拾六文　壱枚
同十五日
一五匁弐分　御股引代
十四日
一金弐歩　健蔵へ取替
一金壱歩　菅沼与太郎殿
相頼子供大小
□喜楽屋へ遣ス
一同壱両　土産買物代
入ル　健蔵へ渡ス

［四九丁裏］
十五日
一金壱両弐歩　湖白抄代
前野氏へ頼ム
同
一金弐拾八匁　苧壱〆匁
ゑひす屋ニて
同日
一五拾八匁五分　同代
百八拾四文　同小ミ
此金壱匁ト　苧壱〆匁
廿四文　内上五百匁
中壱〆五百匁
同十六文
一百文　醋飯
同
一参銭廿四文　朝□ち一ツ、
同　着物ぬい代
一百三拾弐文

［五〇丁表］
十七日　蓮生院殿ち被相頼候
一金壱匁弐朱　かんさし代、かんさし
内三歩受取　屋嘉兵衛へ

壱歩弐朱手前ゟ匁へ取替
同人ゟ被相頼之箸
一金六匁五分　紫たん銀之穂
此分手前ゟ取替匁へ
一　同人ゟ御頼之三ツ共
弐升
此分手前ゟ匁へ取替
一　同人ゟ御頼之旦
座棗三ツ
此分匁へ取替

［五〇丁裏］
此所丁銀四十三匁ト
金三歩入ル
〆丁銀ハ江戸不同ニ御返可申候、金□□匁之分
十七日
一金四両ト　従江戸大坂迄
銭百七文　道中諸渡り物
村越宗大夫ゟ受
取候□
一古金壱両壱分　加来長平ゟ
之買物代

［五一丁表］
新金ニ引替所内壱歩ハ悪金不通用、壱両ト弐百文ニ替ル
一三百七拾文　小月ゟ大坂迄
柳合利賃銭
後藤次之助へ存寄上納物也
壱〆□百八十五文
一金弐朱ト　両屋鋪付ト柳
百九十壱文　合利賃銭
上納古田新助・岩
田泰八へ残ス

［五一丁裏］
一金壱両壱歩ト弐百文　又百六拾弐文綱代
此内賃銭四百文次分助へ渡シ
一金壱歩ト百文　袷股引
壱足
十七日
一五百文　御歯磨代
同　やうし
一弐百弐拾四文　表歯
三十袋代
同
一拾四匁四分　切元結代

同　　切元結代
一七匁弐分
同　　ハサミ
一五匁弐分　　鋏弐丁代
同　　毛抜弐丁
一弐百文

［五二丁表］
同　　小やうじ
一弐百四拾八文　　三十袋代
十七日
一拾五匁　　本黒旦坐
束々代
同　　わし三ツ羽
一六匁五分　　壱本
同　　□ふくろ
一五匁　　同壱本
十九日
一金子壱両弐歩　　生民源吾甲
昼夜
州路旅籠ト馬

同日　　賃銭
一同壱分　　右両人京着上
飯代薪共ニ
〆弐両

［五二丁裏］
六月十九日　　古本
一四匁五分　　古今選
同　　舎密開宗
一七匁五分　　新本七扁
同　　医療正始
一七匁五分　　新本七扁
同　　医範提綱
一弐朱壱□　　右者柴神明前岡田ニ而求メ申候
同　　猪口代
一七百文
同　　皮骨払代
一八拾文
同

一五拾文　付上ケ代

［五三丁表］

同　草リ代

一百弐拾文　医良正始

一金七匁五分　六扁

一丁銭百三十五文　小月ゟ大坂まて

運賃

一金三歩　駕籠大回

此金四十五匁　先払

一金九匁五分　銀針拾本

一同弐歩弐朱ト　賀来長平

銀壱匁　上下地一反

［五三丁裏］

一百弐拾文　草履一足

廿一日　九州へ

一金壱両壱歩弐朱ト　仕切残り

四百十六文

廿一日

瞳ラン

一巾着ニ　牧野弥太郎殿

紙入レ　購

同　□□弥兵衛殿ゟ

一席筆入レ　到来

艸草入レ

四方盆菊の柱脚

皮巾着・猪口ツ飛騨高山焼

竹□□

筆　手拭一　何も丸利細工

［五四丁表］

一割澤布　田中重助

購

同　沢田玄□殿

黒色地　同断

一紗羽織

同　高橋五兵衛ゟ

一江戸唐絵　同

一本

同　久恒良仙殿

一大布　同

手拭切

同

一箱入猪口三ツ　岡見半大夫殿ゟ
色□原一箱　同
同
一口紅半楮　島半又三郎殿
烟草入り同紙品　同
［五四丁裏］
一菓子一箱　佐藤三禮殿
男
帯地　購
胸紐
〆
一団扇　熊谷仁兵衛殿
三本　同断
一手拭地　前野□宅殿
壱反　同
手前良正二石分
堀倉源助六月
一金弐両ト　五日ゟ同廿二日
壱歩弐朱　迄
［五五丁表］
残六百拾六文
□村

一金弐朱　源七八へ
渡ス
同
一同壱歩　野口□
久恒良仙殿へ
頼
一同弐朱　同人ニ被頼
紀伊国屋
きせる代
一百文　同人へ頼ニ
高直ニ付
廿一日　高橋甚蔵へ遣ス
一肴壱鉢　坂本杏二郎殿
［五五丁裏］
廿一日夜
一金弐百拾六匁　田中重助
内金壱歩弐朱　大小次切
渡
手前緑頭下ケニて引
〆金三両弐朱六匁
廿一日夜

一金弐歩　同人
遣ス　青具代
廿弐日朝渡シ
一金壱歩弐朱　蚊衣
百弐拾文　圃団
□銭

［五六丁表］
一菓子箱　梁田記殿
鰹節
一元結五把　岡見鎌太郎殿
煙吹露五ツ
ふさようふし
苧二結
〆
一胸紐壱対　荒尾利右衛門殿
子供かんさし
同髪掛

［五六丁裏］
一百弐十四匁　畳針
三本

一三盆砂糖一箱　佐藤三禮
紫腰帯一
胸ひも一
別帳六月廿九日トス
七月三日吉
一暁八半時原駅発足、倉沢昼道場高岸在遙望遠州洋荒海
茫々欲奪目依茶店食各ニ而生鮑及酒一盞□而倉沢発足

［五七丁表］
道ヲ早メて詣　久能山ニ上、尚　東照宮社其山独立十八
丁斗村蛇行して上ル、最此久能村伊奈伊右衛門成ル者案
内ヲ頼、茶代四、五百文□□七ツ過時分ら登山ニ掛り□
山上ノ口有楼門、京都ノ与力榊氏の吏共其中ニ着座、当
家中
之伊奈伊右衛門江頼奥平大膳大夫・村上宗元後藤半三郎
□□年礼出候□直行、今

［五七丁裏］
日夕ニ付男一人米研候方尋候所、　神ニ□ル御供米ト申し
山上井三ツ有之蔵沢山ニ出ル、此井共ハ別山ノ岸ニ在、
三天之外ハ岩屈独立蔵沢山ニ出ハ不思義□□致候、別二ツ
井も七十廣有之、上古山本勘助造候、井之内申伝候社殿
之御造営ハ申も中々愚也、華ヲ尽シ美ヲ極申候、正面　東

［五八丁表］
照宮ト申□榜有之、両方右大人、左大人有之其影生ク如シ、山寺天下第一之壮観也、山上之形之地形四方ハ高木欝然覆、社殿日落ハ寂然として不日光、此奥ニ奥之院と申所有之候得共、御製禁ニて参詣不相成候由

［五八丁裏］
案内伊右衛門之話承ル、追々□□□□ニ相成候天下ノ山□伊右衛門へ酒代居形別ニ告て道ヲ形ル
帰路百姓ニ連々来り久能山之様子結構ヲ語候所、同人申様私ハ此辺之百姓ヘハ月々奥院上□御魂被為在候所、草採りへ

［五九丁表］
罷出候間、精ク致方之由□□ニ而内分之所ニて承方□折入て頼候品同人御他言御無用ニ可被下ト申と申様ハ先上段中心ニ六角之大石有之、瓜ノ如ク其中二間六、
間　て
七畳ノ御覧有之即ウンケン種々立派之事ニて四月十六日御祭礼ニて当

［五九丁裏］
坊住致同宦大僧正ニ成り下段之御間ヲ開き御祈禱ヲ奉り京都ゟ御代参等有之、扨ハ大造之御義ニ御座候而御山之後ニ一騎打之閑道ニ候ハヾ、此分誰も私共ゟ外ニ知ル者無御座候、尚又御山ノ西北之側ニ　東

［六〇丁表］
照宮御帰依ノ妙見宮安置金之くさりニて上り字ヲ提申候、早ク旭日ニ決し其光り灼々ニ面モ白□□□□□之御造営ニ御座候、□也ト申シ
夢暮久能下山其ゟ行人ニ道ヲ尋て夜四ツ時分□□村着

［六〇丁裏］
尤夜道ニ相成り而宿屋へ表へ定紋付之桃提ヲ下テ目駿ヲ致候様先祖之方へ申付置候
同四日
一暁七ツ時駿府発足云々

［六一丁表］
七月十四日大坂ニて
一金百四両　松井取かへ之分
内廿一日
壱両三歩　日船運賃
同弐朱　田戸津茶代
廿一日

同壱歩　船中三人七月十五
日ゟ同廿朝迄
内四百文つり
廿三日
同弐歩弐朱　幸切銭雑用
十四日
同壱両　原岡頼ミ大坂ニて
同日
同壱歩　大坂三人滞留中
入用
〆四両辻

［六一丁裏～六二丁裏］（白紙）

［六三丁表］
覚
六月六日
一十弐銅　肴煮附代
六月六日
一十三百文　ウナギ代
同七日
一十弐文　豆煮代
同　一四文　生姜
同　ぬか代
一十弐文
六月八日朝
一百文　仕出シ被成候
同　三度さゝけ代
一弐拾文

［六三丁裏］
嘉永元申五月二日出立、従□□郎手人人足共川越大坂中
津江戸着発祝義遣候覚
一五月二日中津出立
五日
一丁銭百文　家来
端午祝義ニ遣ス
廿日
一同弐百文　生民健蔵へ
大坂着祝義同断
廿一日九六
一五百文　足付人足誤認へ
布団即日遣ス
十一日
一金弐朱　人足五人へ七四り

坂越ニ付祝義乞
て遣ス

［六四丁表］
同廿九日大井川ニ越祝義ニ而遣ス
一七百文　手人弐人人足
五人共ニ
六月四日江戸着同断
一金弐朱　手人両人へ
同五日同断
一丁銭五百文　人足五人へ
遣ス
五月二日□□出立之間祝義
一五百文　人足五人へ
遣ス

［六四丁裏］（白紙）

［六五丁表］
雑用記
六月六日
百
一丁銭弐文　原岡氏ゟ仕出シ
同
一弐拾四銅　茄子
銅　キウリ代
一三拾六銅　キウリ代
同　一廿四文　油豆腐代
同　一五拾弐文　魚煮附代
同　同　一五拾文　原岡氏ゟ仕出シ
被成候
一

［六五丁裏～六六丁裏］（白紙）

［後表紙見返し］
稲本

【注釈】

［一丁表］
○陳台寺義元首墓…『今川義元』によると、義元の葬儀は永禄三（一五六〇）年六月に臨済寺（現静岡市）にて営まれ、

その後同寺に隣接して天沢寺が創建された（同書二九三頁）。末寺には善得寺、清見寺などがあるが（平凡社『日本地名大系　静岡県』「臨済寺」の項）、陣台寺に関しては未詳。

［一丁裏］

○金谷（宿）…東海道五十三次の二四番目の宿場（現静岡県島田市）。正徳元（一七一一）年に定められた金谷宿からの駄賃・人足賃銭は島田宿まで荷物一駄一二四文・乗掛荷人共一二四文・軽尻馬一疋七七文・人足一人五八文、日坂宿まで荷物一駄一四八文・乗掛荷人共一四八文・軽尻馬一疋九四文・人足一人七一文で、弘化二（一八四五）年からは五ヵ年を限って五割増とされた。また正徳元年の宿泊木賃銭は主人一人三五文・召仕一人一七文・馬一疋三五文。当宿は往還の両側に町並が続き、旅籠屋のほか食物を商う茶店や諸商人が軒を連ねた（『日本地名大系　静岡県』）。

［二丁表］

○原川…原野谷（はらのや）川と垂木（たるき）川の間にあり、北東は岡津（おかつ）村。東海道の掛川・袋井両宿の間の宿として原川宿ともいわれ、酒店・茶屋などを設けて生業とした（『日本地名大系　静岡県』）。

［三丁裏］

○大直日神（おおなおひのかみ）…『古事記』には「大直毘神」とある。

［四丁表］

○二川宿…江戸より三四番目、三河のいちばん東の宿場で大岩村の東につづく（現豊橋市二川町）。領主地頭などは大岩村と同じく推移した。二河とも記した（『日本地名大系　静岡県』）。

［六丁表］

○前渡村…江戸時代を通じて旗本坪内本家領（現各務原市）。坪内氏には本家よりの内分三家として前渡坪内・平島坪内・三井坪内の三家がある。前渡は当村の惣名で、上前渡村は大門村組、下前渡村は松本村組と称し、上前渡村は内分前渡坪内家・同平島坪内家が、下前渡村は同平島坪内家が領した（『日本地名大系　岐阜県』）。

○鳴海（宿）…東海道の宿駅の一つで、熱田宮宿と三河池鯉鮒（ちりゆう）の間に位置する京から数えて一四番目の宿場（現名古屋市緑区鳴海町）。本陣は元和七（一六二一）年頃、本町の西北の位置に置かれたが、寛永一〇（一六三三）年頃、根古屋町に移った。初期は浅岡吉右衛門、その後は代々西尾伊右衛門が勤め、嘉永年間（一八四八―五四）に千代倉家に交代した。脇本陣は本町筋の銭屋新四郎・大和屋佐七の二家である（『日本地名大系　愛知県』）。

○宮（みや）宿…東海道五十三次の第四一宿目。熱田社に南面する海岸近くで、精進（しようじん）川（現新堀川）から波止場までの一一町一五間。第四〇宿の鳴海から一里半、次の桑名（現三重県）へは海上七里渡（宮渡）であり、美濃

路・佐屋（さや）路との分岐点でもあった。熱田社の門前なので宮宿という（『日本地名大系　愛知県』）。

［七丁表］

○桑名（宿）…慶長六（一六〇一）年正月、江戸幕府は東海道の宿駅を制定した際、桑名宿が定められた。四日市宿へは陸路三里八町、宮宿へは海路七里である。天保一四（一八四三）年調べの東海道宿村大概帳では、本陣二、脇本陣四、旅籠屋は大八軒・中三四軒・小七八軒、合計一二〇軒ある。渡船場であるため、天候の都合などにより欠航する場合もあり、旅籠屋の数は隣の宮宿に次いで東海道では第二の多さである（『日本地名大系　三重県』）。

○四日市…江戸時代の現四日市市域には中心となる藩がなく、幕府領・大名領・旗本領が複雑に入組み、領主の変遷がはなはだしい。現四日市市に属する村数は一〇〇。うち幕府領の村数二一、桑名藩領の村数四六、津藩領の村数一九、亀山藩領の村数八、菰野藩領の村数四、和歌山藩領の村数一などである。陣屋は慶長八（一六〇三）年に造営された（『日本地名大系　三重県』）。

［八丁表］

○亀山（宿）…東海道五十三次の一。亀山城下町は、士族屋敷地を除けば、東町・西町からなる宿場で、併せて亀山町といわれ、東海道が屈曲しながら東西に通過する。隣宿関地蔵年寄中に宛てた慶長六（一六〇一）年に宿は成立している。西の関宿へ一里半、東の庄野宿（現鈴鹿市）へ二里で、万治年間（一六五八―六一）の本駄賃はそれぞれ三九文、四九文（『日本地名大系　三重県』）。

○関宿…鈴鹿川の左岸にある近世東海道の宿場。下りは亀山宿（現亀山市）へ一里半、上りは坂下宿へ一里半六町を継送り、さらに宿東側から伊勢別街道が分れ楠原（現安芸郡芸濃町）へ一里、宿西側から大和街道（加太越奈良道）が分れ、加太へ一里半を継送る（『日本地名大系　三重県』）。

○坂下宿…坂下村に置かれた鈴鹿峠直下の近世東海道の宿場。東の関宿から一里二四町、次の近江国土山（つちやま）宿（現滋賀県土山町）へ二里半。天保一四年（一八四三）の町並は五町五六間で宿往還長さ一九町四四間、宿の中心は上中町・下中町で、問屋場一ヵ所、本陣三軒、脇本陣一軒である（『日本地名大系　三重県』）。

［八丁裏］

○水口宿…東海道五三宿の一（甲賀郡水口町）。東の土山宿まで二里半七町、西の石部宿まで三里半。宿は水口美濃部村に属し、幕末には宿内に三〇余町を数えた。また水口藩の城下町としての性格も備え、郡内最大の町場であった（『日本地名大系　滋賀県』）。

○石部宿…東海道五三宿の一（現甲賀郡石部町石部村）。宿高一千七一九石余、東の水口宿まで三里半、西の草津宿まで二里半一七町五四間。石部村に属し、江戸時代後期には一二

町を数えた。天保一四（一八四三）年当時、町並一五町三間、地子免許八千五六〇坪、人数一千六〇六・家数四五八で、本陣二軒・旅籠屋三二軒を数える正徳元（一七一一）年の定賃銭は、草津宿まで荷物一駄一四〇文・乗掛荷人とも一四〇文・軽尻馬一疋八八文・人足一人六九文、水口宿までは各一四六文・一四六文・九一文・七〇文。木賃銭は主人三五文・召仕一七文・馬三五文（『日本地名大系　滋賀県』）。

［九丁裏］

○月之輪新田…月輪町（現京都市東区）のことか、未詳。

［一九丁表］

○富嶋と申所…富島一丁目～二丁目あたりか（現大阪市西区）。大坂に入津する諸国の廻船などから多額の浄財が集まったため、のちに富島と称されるようになったともいう（『日本地名大系　大阪府』）。

○田戸津…多度津（香川県）のことか。

［一九丁裏］

○金（刀）比羅宮…香川県仲多度郡琴平町鎮座。祭神大物主神、配祀崇徳天皇。創祀の年代を明らかにしないが、神体山としての象頭山にかかわる神験を基底にして、原始に発する信仰によると思われ、『延喜式』神名帳所載の雲気神社が、あるいは金刀比羅宮の原始社頭ではないかとの説は傾聴に値する。天正十三（一五八五）年、仙石秀久が讃岐に封ぜられると寺領七十石を寄せるが、改易によって没収。代わって同十五年入封の生駒氏は、寛永十七（一六四〇）年に至る五十余年間に、社領三百三十石を寄進した。生駒氏没落後、同十九年、そのあとを受けた松平氏もこれを安堵する一方、慶安元（一六四八）年二月、これを朱印地とし、幕末まで変わることなく、別当金光院はこうした社領を背景に支えられて権威的存在となっていった（『国史大辞典』）。

［二一丁表］

○豊後姫嶋…国東半島の北四キロの海上に位置する離島。鎌倉時代は宇佐宮弥勒寺領であった。南北朝期から戦国時代には姫島氏を中心とする在地武士団の姫島寄合中が活躍、大友氏の浦辺水軍に属していた。弘化四（一八四七）年の家数三七六・人数二千二。漁船は嘉永五（一八五二）年一八六艘、万延元（一八六〇）年には一七七艘。姫島は杵築藩の流刑地で、庄屋は慶長年間（一五九六―一六一五）に移住した古庄氏が代々勤めた（『日本地名大系　大分県』）。

［二五丁表］

○鈴ヶ森…鈴ヶ森刑場跡のことか。

［二五丁裏］

○影取…『日本地名大系　神奈川県』の「東海道」の項に、「代表的な立場茶屋のある地は箱根―小田原間の畑宿（現箱根町）、小田原―大磯間の梅沢（現二宮町）、平塚―藤沢間の南湖（現茅ヶ崎市）や四ッ谷（現藤沢市）、藤沢―戸塚間の影取（現戸塚区）、神奈川―川崎間の生麦（現横浜市鶴見区）

などである」とある。

○鳴立沢といふ西行法師の古詠…『山家集』（上巻「秋」）に、「心なき　身にもあはれは　しられけり　鴫たつ沢の秋の夕暮れ」とある。

［二六丁裏］

○須走（村）…柴怒田（しばんた）村・水土野（みどの）新田の西に位置し、西に富士山、北は駿河・甲斐の国境稜線が控える高原地帯を占める（現駿東郡小山町須坂村）。古くから富士の登山口（東口・須走口）であり、また甲州へ向かう籠坂峠越（旧鎌倉街道）の麓集落として発達した（『日本地名大系　静岡県』）。

［三三丁裏］

○法蔵寺（現岡崎市本宿町）…東海道筋南側に位置し、近世を通して門前は下馬の扱いであった。浄土宗西山深草派の三河三檀林の一つで、二村山と号す。本尊は阿弥陀如来。寺伝では行基と空海の伝承があり、二村山出生（しゅつしょう）寺と称し、古くは法相宗であったと伝える（『日本地名大系　愛知県』）。

［四二丁表］

○牧野弥太郎…御供番（二〇〇石）。『奥平藩臣略譜集録』には、「奥平昌敦公夫人が牧野家より御入輿の際付き人として同家より従い来るものか」とある（一五一～一五二頁）。

［四二丁裏］

○久恒良仙…『奥平藩臣略譜集録』には、「高一五〇石　御医師」とある（一五九頁）。

［四三丁表］

○神谷源内…奥平家三川時代以来の家臣。供番格、高二〇〇石。神谷潤亭は奥平昌男代に辞して蘭学に通じた（『奥平藩臣略譜集録』五八頁）。

○山﨑渚…『奥平藩臣略譜集録』には、「高　二〇人扶持　御家中」とある（一六五頁）。

［四三丁裏］

○間利子彌助…『奥平藩臣略譜集録』の「間利子恵七家」の項に、「高一〇〇石供番格間利子恵七　弥助」とある（一五七頁）。

○荒尾利右衛門…『奥平藩臣略譜集録』の「荒尾七郎兵衛家」の項に、「一五〇石荒尾利右衛門」とある（六六頁）。

［五一丁表］

○小月（村）…現下関市の大字名（小月町）。

［五二丁裏］

○舎密開宗…宇田川榕庵（一七九八～一八四六）訳書。内篇一八巻、外篇三巻。初篇は天保八（一八三七）年、外篇の刊行はおそらく弘化四（一八四七）年。博物学を「学の門墻」と見なし、化学を「理の堂奥」として万物学の最高位に位置づけた榕庵が、晩年情熱を傾けた未刊の大作である。「舎密」はラテン語系オランダ語の chemie（化学）の音訳であり、

「開宗」とはもののおおもとを啓発する意味である。英人ヘンリー William Henry（一七七四～一八三六）の『舎密小篇』An Epitome of Chemistry（一八〇一）をドイツのトロムスドルフ J. B. Trommsdorff（一七七〇～一八三七）が一八〇三年に独訳増補し、さらにイペイ Adolf Ijpeij（一七四九～一八二〇）が蘭訳増補した Chemie voor beginnende liefhebbers, 1803（CBL と略称）が直接のテキストである。『舎密開宗』は単なる翻訳ではなく、叙述の骨格は CBL に拠りながら、他二〇余冊の蘭書を参考引用した詳細な著述である。榕庵の夭折によって、原本の植物成分の章の一部と、動物成分および鉱物分析法以下に対応する部分が未刊のまま残ったが、一部の欠落はあるものの、未刊部分に対応する榕庵の遺稿が残っている（『洋学史事典』）。

○医療正始…伊東玄朴（一八〇一～七一）著、全八編二四冊。初編は天保六（一八三五）年一二月の出版で、第八編は安政五（一八五八）年春の刊行となっており、完結までに二三年を要している。オーストリアのプラーグ大学教授ビショップ Bischoff の原書 C. von Eldik が蘭訳したものを和訳したものである。伊東玄朴著となっているが、実際は箕作阮甫が二〇余年を費やして訳したものである。病名、症状、経過、原因、転帰、予後鑑別、治療の順に記載し、さらに臨床実験の体験談も付記している（『洋学史事典』）。

○医範提綱（和蘭内景医範提綱）…宇田川玄真（榛斎、一七七〇～一八三五）の講義を門人・諏訪士徳（藤井方亭、一七七八～一八四五）が筆記したものを文化二（一八〇五）年に出版した本文と、亜欧堂田善作の銅版解剖図（文化五・一八〇八年刊）とからなる。本文は平易な文体からなり、西洋解剖学・生理学から病理学に至るまで簡明に述べている。本書は弘化二（一八四五）年に復刻されたが、残存するものはほとんどこの版である。付図は最初の同版画図としての評価を受けている。また玄真の創作した腺、膵の文字が本書ではじめて公表され、それが現代の常用語として用いられている例が多い（『洋学史事典』）。

［五四丁表］

○岡見半大夫…『奥平藩臣略譜集録』には、元禄中に召し抱えられ、江戸定府供番格（四〇〇石）とある（一四六頁）。

［五四丁裏］

○熊谷仁兵衛…『奥平藩臣略譜集録』には「高百石本国出羽生国美濃熊谷仁兵衛四十」とある（一一〇頁）。

【参考文献及び史料】

参考文献

▲有光友學『今川義元』（人物叢書）吉川弘文館、東京、二〇〇〇八年。

▲今永正樹『医も亦自然に従う（村上医家事歴志）』村上記念病院・村上医家史料館、中津、一九八二年。
▲岩下哲典「世界遺産『富士山―信仰の対象と芸術の源泉』江戸時代に流行した民衆宗教「富士講」と、日本人本来の心の領域」（世界遺産アカデミー編『世界遺産アカデミーWHA MR』第二〇号、二〇一三年、所収）。
▲大野晋編『本居宣長全集』第九巻、筑摩書房、東京、一九六八年初版。
▲国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館、東京、一九七九～九七年。
▲後藤重郎校注『山家集』（新潮日本古典集成）新潮社、東京、一九八二年初版。
▲生田重倫編『奥平藩臣略譜集録』私家版、中津、一九七三年（活字版は山内祥二編、一九九九年）。
▲日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、東京、一九八四年。
▲日本歴史地名大系『静岡県の地名』平凡社、東京、二〇〇〇年。
▲日本歴史地名大系『岐阜県の地名』平凡社、東京、一九八九年。
▲日本歴史地名大系『愛知県の地名』平凡社、東京、一九八一年。
▲日本歴史地名大系『三重県の地名』平凡社、東京、一九八三年。
▲日本歴史地名体系『滋賀県の地名』平凡社、東京、一九八三年。
▲日本歴史地名大系『大阪府の地名』平凡社、東京、一九八六年。
▲日本歴史地名大系『神奈川県の地名』平凡社、東京、一九八四年。
▲日本歴史地名大系『大分県の地名』平凡社、東京、一九九五年。
▲半田隆夫校訂『御参勤御供日記』中津藩政史料撰集（二）、中津藩政史料刊行会、中津、二〇〇三年。
▲諸橋轍次編『大漢和辞典』大修館書店、東京、一九五七年初版。
▲諸橋轍次編『広漢和辞典』大修館書店、東京、一九八二年初版。
▲吉川幸次郎編『本居宣長集』（日本の思想一五）筑摩書房、東京、一九六九年。
▲吉田洋一「村上家の人物交流―所蔵掛幅を素材として―」（中津市歴史民俗資料館分館医家史料館叢書ⅩⅢ『人物と交流Ⅲ』、中津市、二〇一四年、所収）。
▲『御家中系図　嘉永三年改』中津市立小幡記念図書館蔵、中津市。

史料

▲「諸雑用記」（写本、表紙とも六八丁、一二・〇糎×一八・三糎、村上家史料、九―一一三、村上医家史料館蔵）。

▲「村上宗玄知行宛行状」（嘉永元年、折紙、三九・四糎×五三・二糎、村上医家史料館蔵）。

注

1 『御家中系図　嘉永三年改』第九冊（中津市立小幡記念図書館蔵）九六～一〇〇頁。

2 呼称に関しては、『御家中系図　嘉永三年改』には「春海」の記載は見受けられないが、今永正樹『医も亦自然に従う（村上医家事歴志）』には「八代・村上春海」とあり（同書一七四頁）これに従った。恐らく六代玄秀が「宗玄」と号することから混同を避けるため「春海」を使用したものと思われる。

3 帆足万里と中津の関係については、拙稿「村上家の人物交流―所蔵掛幅を素材として―」（中津市歴史民俗資料館分館医家史料館叢書ⅩⅢ『人物と交流Ⅲ』、二〇一四年所収）参照。

4 松木谷は現玖珠郡九重町の字名に「松木」とあるが未詳。寒水は、現宇佐市安心院町の字名。元村に関しては未詳。

5 恐らく久留島通嘉（みちひろ、一七九八～一八四六）のことか。

6 『医も亦自然に従う（村上医家事歴志）』一七五～一七六頁。

7 「（仮）」は史料中に該当する文言がないため、内容を勘案して記載した。

8 【史料】六一丁表。

9 【史料】一一丁表。

10 中津藩政史料撰集（二）、半田隆夫校訂、中津藩政史料刊行会、中津、二〇〇三年。

11 同右二六頁。

12 【史料】二五丁表。

13 【史料】二五丁裏。

14 【史料】二六丁裏。

15 岩下哲典「世界遺産『富士山―信仰の対象と芸術の源泉』江戸時代に流行した民衆宗教「富士講」と、日本人本来の心の領域」（世界遺産アカデミー編『世界遺産アカデミーWHA MR』第二〇号、二〇一三年、所収）など参照。

16 【史料】二五丁表。

明治初期における「中津市立北部小学校」及び「中津市立南部小学校」の沿革

當所美恵子

要旨

本稿は、百年以上の長きにわたり空白であった明治初期における「中津市立北部小学校」及び「中津市立南部小学校」の沿革解明に取組み、その一部を明らかにしたものである。

解明にあたっては、大江医家史料館寄託資料である「三旗小学校」に関する新史料群の調査によって、まず北部小学校の沿革の一部が明らかになった。

さらに、この新史料群とほぼ同時期に中津で発行された『田舎新聞』の掲載記事や、当時の小学校の卒業証書といった村上医家史料館所蔵資料などによって、「中津市立北部小学校」及び「中津市立南部小学校」両校の沿革の一部解明へと進展した。

本稿はまた、何故に今日まで沿革不明であったかについて、学校名表記の視点からの一考察を試みた。

キーワード

北部小学校、南部小学校、進修小学、金谷小学、三旗小学、闇無小学、桜町小学、田舎新聞、大江雲澤、村上田長

はじめに

「中津市立北部小学校」（以下、北部小学校）と「中津市立南部小学校」（以下、南部小学校）の両校は、黒田・細川・小笠原・奥平の各家が治めた中津城下町に立地し、北部小学校は、福澤諭吉が十九歳まで過ごした旧宅[1]の近隣に位置し、南部小学校は、彼の著書『学問のすゝめ』の発端となった「中津市学校」の存在していた正にその地に現存している[2]。

中津の歴史に深く関わり、多くの先哲を輩出してきた学区域でありながら、目下、両校とも明治初期における学校沿革が今日に至るまで不明確な状況である。

中津市教育委員会の資料[3]においても、北部小学校は明治三七（一九〇四）年三月以前が空白であり、南部小学校は、「明治九年八月、本校の前身　進修校開校」の記録以降は、明治二〇（一八八七）年三月まで空白である[4]。

以上を踏まえて本稿は、百年以上にわたり不明であった北部小学校及び南部小学校の明治初期における沿革を、ここにその一部を明らかにするものである。

なお、沿革の解明にあたっては、江戸時代中期より中津城

下町で代々藩医を勤めた、北部小学校区鷹匠町「大江医家[5]」六代大江雲澤（一八二二～九九）が残した「三旗小学校」に関する新史料の出現がその端緒を開いた[6]。さらに、江戸時代初期より代々藩医を勤め、現在も医業を続ける南部小学校区諸町「村上医家[7]」九代村上田長（一八三九～一九〇六）に関わる史料が、両校の沿革解明を進展させた。

最後に、「何故今日まで、両校の明治初期の沿革が空白となっていたのか」についても一考察を試みた。

一、「三旗小学校」史料に見られる北部小学校

①「三旗小学校」の概略

「三旗小学校」史料とは、大江医家六代大江雲澤の曽孫にあたる青柳敬一郎氏より、平成二四年度、中津市歴史民俗資料館に寄託された多数の史料の中の一点である。

木製の文箱（縦三〇糎×横二三糎）の形状で、表面に「明治九年十一月　学校書類入　第三聯区担当方」と墨書されている。

この木箱の中に収められた、明治九年から明治一五年までの「三旗小学校」の運営に関する七〇余点の史料群をいう[8]。

当時の「三旗小学校」の運営は、現在とは大きく異なり、明治五（一九七二）年公布の学制のもと、広く国民全体に教育を施すこととする一方で、「教育は人々自らの立身の基礎ともなるものであるから正租にまってはならないという方針[9]」から、教育に係る費用・人員面ともに、地域住民の負担を主体とするものであった。

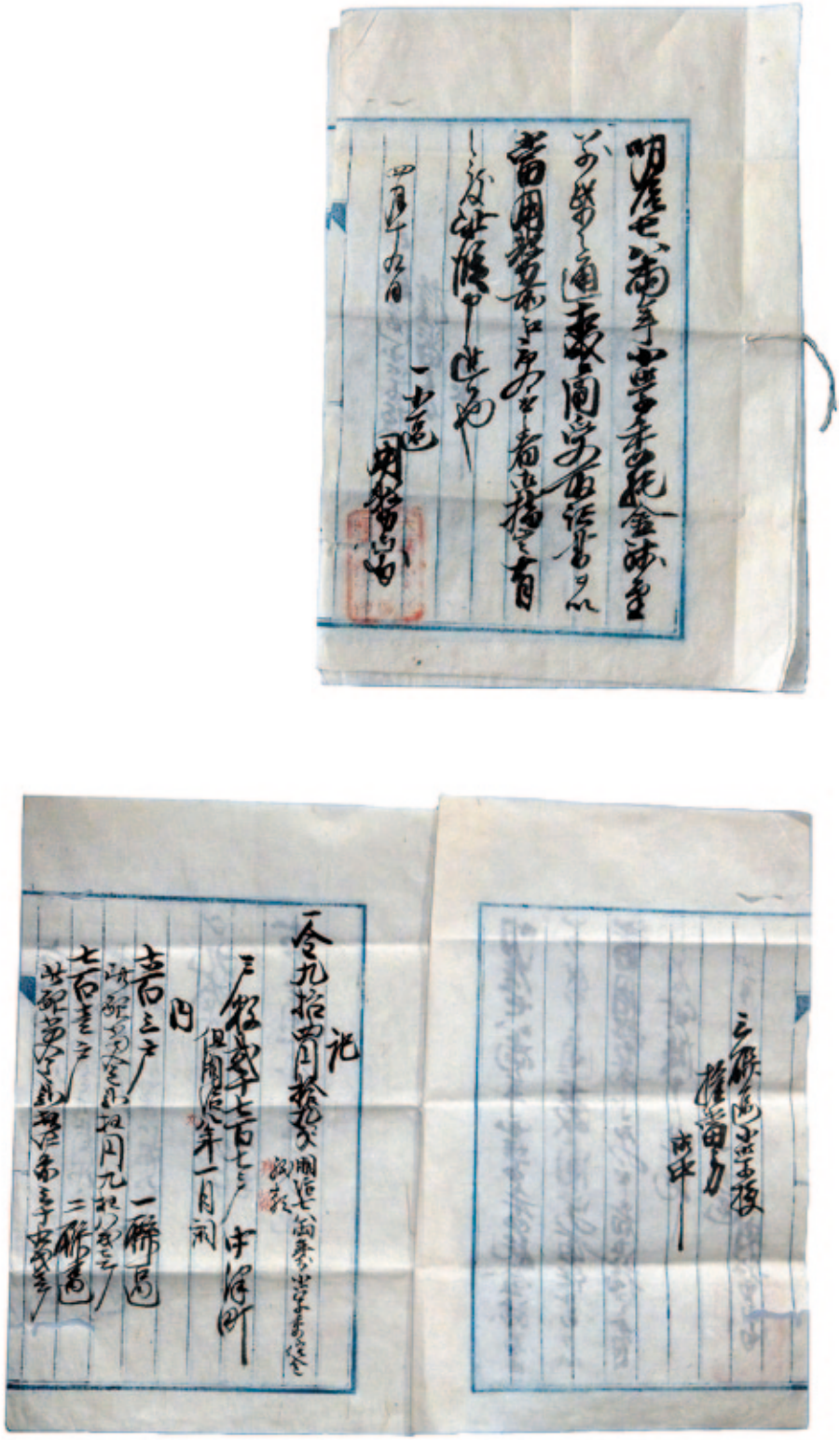
それ故、史料の中に、学校の会計簿、各町内の寄付金、募課金簿、学校新築にあたっての募金人名簿、学校敷地払下げやその賦税に係る書類、教職員への給料支払記録簿等が見られる。

また、当時の中津町（概ね中津城下町一帯を指す）の小学校は、聯区という区域ごとに設置され、四聯区に分けて運営されていた[10]。（図一）北部小学校区は、三聯区と四聯区にあたり、南部小学校区は、一聯区と二聯区[11]であった。

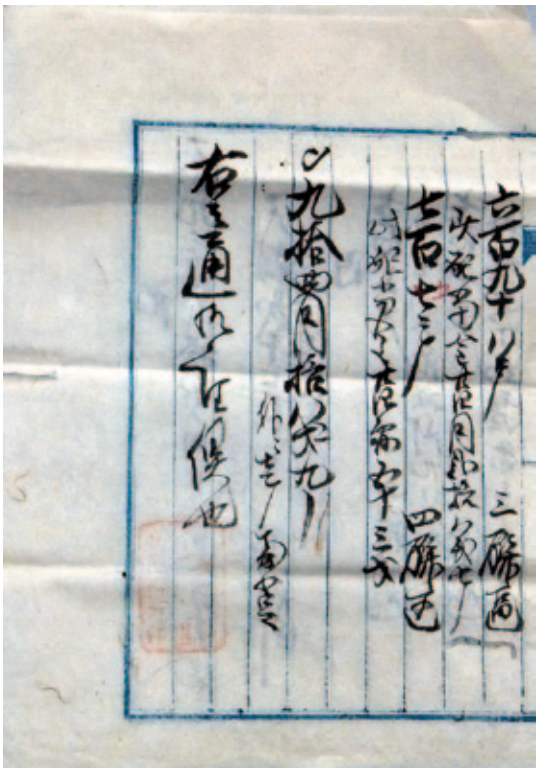
大江雲澤らは、三聯区に「三旗小学校」を新築してその運営にあたり、担当領域は、鷹部屋、二ノ丁、北門通り、船頭町、留守居町、弓町、新堀町、姫路町、米町、塩町、船町、桜町、豊後町、寺町、仲間町、鷹匠町、餌指町であった[12]。

つまり「三旗小学校」とは、北部小学校に至る沿革二校のうちの一校であったといえる。

○明治九年一月時点における一聯区から四聯区の戸数及び委託金残金が見られる史料



図一　明治七八両年の小学委託金残金受取に関する明治九年一月調の中津町各聯区の戸数と金額（二四・五糎×一七糎）（大江医家史料館寄託資料）。



明治七八両年小学委託金残金
前紙之通相成候間受取証書ヲ以
當用務所江受取之者御指出有
之度此段申進候也

一小区
用務處

四月十九日
三聯区小学校
担当方
御中

記

一　金九拾四円拾九銭　明治七八両年分小学委託金
　　残額
　戸数弐千七百七戸　中津町
　　但明治九年一月調
　　内
六百三戸　一聯区
此配当金弐拾円九拾八銭一厘
七百壱戸　二聯区
此配当金弐拾四円三十九銭一厘
六百九十八戸　三聯区
此配当金二拾四円弐拾八銭七厘
七百五戸　四聯区
此配当金二拾四円五十三銭

〆九拾四円拾八銭九厘
　外ニ壱厘剰不足

右之通御座候也

なお、この史料は、町内を四聯区に分けて運営した時期が、明治七年からであった可能性も秘めているが、現時点では確定できない。

②明治九年「可象小学校」

明治九年一一月、大江雲澤、石野銀衛、長野林米の三名が新たに小学校の運営に加わり、これまで運営にあたってきた岩井泉とともに四名体制となった。（図二）本校は、豊後町に存立しており、「可象小学校」という名称であった。

○明治九年から一四年まで使用された金銭出入簿の記載から四名体制が窺われる。

図二　明治九年から一四年まで使用された金銭出入簿に見られる明治十年四月及び六月の担当者記帳箇所。次の担当者名も記されている（一三・五糎×一八糎）（大江医家史料館寄託資料）。

○岩井泉より大江雲澤、石野銀衛、長野林米宛ての包紙と在中書類一一点[13]

○可象小学校の払下げに関する「指令写」右面より豊後町であったことがわかる。[14]

○明治九年三月から一三年まで使用された募金簿[15]の裏表紙に押された可象小学校印[16]

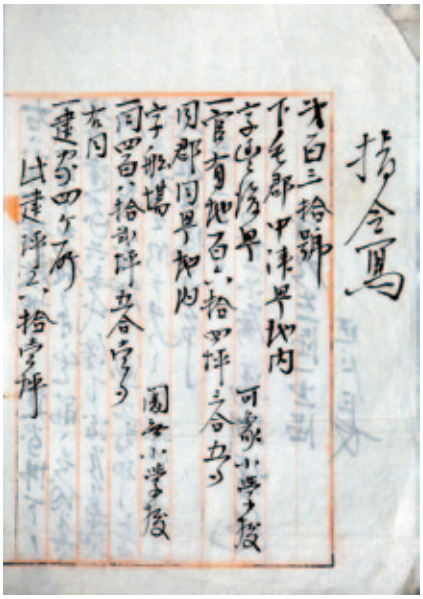
○可象小学校への寄附目録[17]

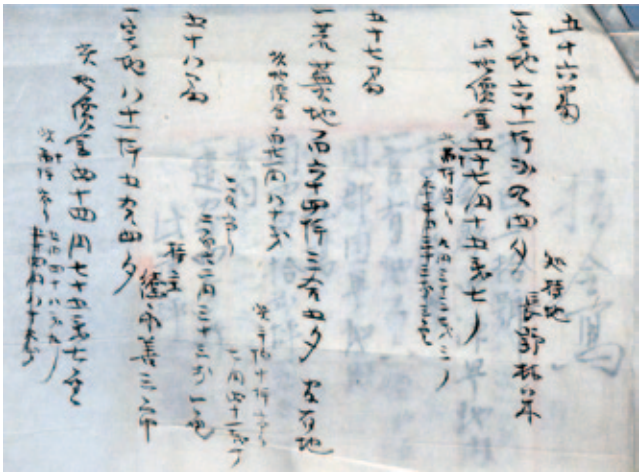
当時の大分県大属馬淵清純より贈られている。

③明治一〇年 新設「三旗小学校」

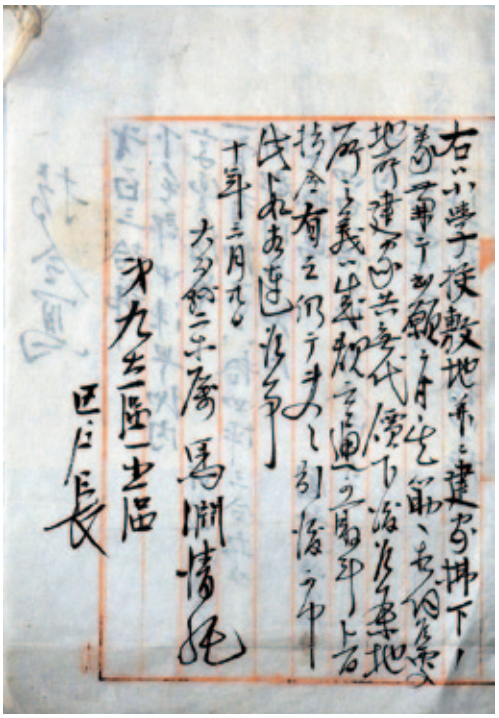
同年豊後町にある可象小学校は桜町に新設し三旗小学校として運営されることとなったことが窺える。（図三）おそらく雲澤らが「可象小学校」の運営に参画する時点で、すでに「三旗小学校」として新築する計画があり、「三旗小学校」という名称も雲澤らが新小学校及び地域に対して、支援の意志と愛情を込めて付けたのではないかと推測する。

○明治一〇年三月二〇日付「敷地賦税上納願」と「指令写」[18]





図三　明治十年三月廿日付の敷地賦税上納願及び指令写（二四・五糎×一七糎）（大江医家史料館寄託資料）。



敷地賦税上納願
下毛郡中津三旗小学校敷地豊後
町通旧勢溜五拾七番荒蕪地百六拾
四坪三合五勺此隣地比較金百弐拾壱円
八拾銭之地所明治十三年三月廿日御下渡
ニ相成候ニ付御成規之通賦税上納
仕度　此段　奉願候也
大分県下毛郡中津
三旗小学校担当方
石野治造
大江雲澤
明治十年三月廿日
大分県令香川真一殿

指令写
第百三拾号
下毛郡中津町地内
字豊後町　可象小学校
一官有地　百六拾四坪三合五勺
同郡同町地内
字船場　闇無小学校
一同　四百八拾弐坪五合壱勺
右同
一建家四ケ所
此建坪六拾壱坪
右ハ小学校敷地並ニ建家払下ノ
為兼テ出願ニ付其筋ヘ相納候處
地所建家共無代価下渡候条地
所之義ハ成規之通可取斗旨
指令有之　仍テ夫々引渡可申
此段　相達候事
十年三月廿日
大分県大属　馬淵清純

第九大区一小区
区戸長

○明治一〇年一月五日付三旗小学校棟上げに関する「上棟寄付品控簿」[19]
○十年一月付「学校新築会計表」[20]
○三旗小学校新築募金人名簿[21]

図四　三旗小学校新築に関する収支一覧表と「新築募金取立表」の下書（二四・五糎×三三糎）（大江医家史料館寄託資料）。

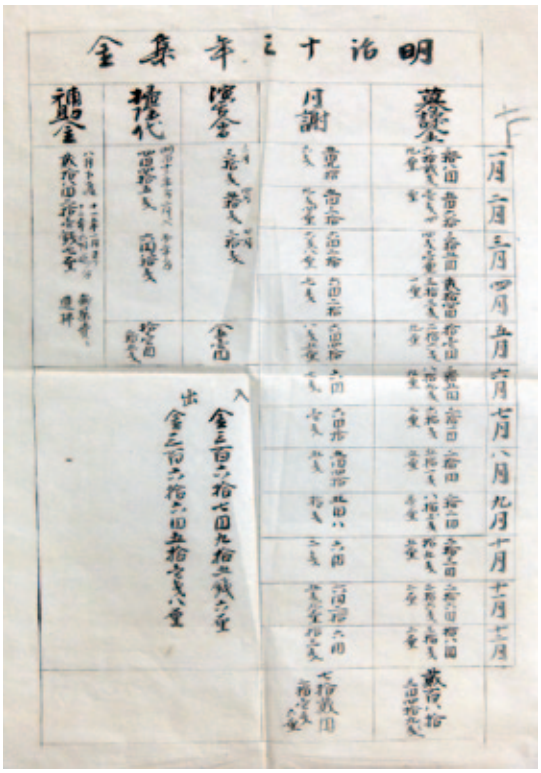
図五　三聯区における各町内の募金高が見られる。「新築募金取立表」（二四・五糎×三三糎）（大江医家史料館寄託資料）。

④北部校区「闇無小学校」について

前記の「指令写」の記述によって、船場（四聯区）の地に「闇無小学校」の存在が確認できる。

よって、明治一〇年三月時点において北部小学校区に設置されていた二校は、三聯区の「三旗小学校」と四聯区の「闇無小学校」であった。

なお、明治一五年時点においても三旗小学校は存続していたことが分かる。



図六　各月の集金状況が項目別にまとめられた表。「明治十三年集金」（三九糎×二六・七糎）（大江医家史料館寄託資料）。

図七　各月の主な支出が項目別にまとめられた表。「明治十三年会計表」（三九糎×二六・七糎）（大江医家史料館寄託資料）。

○明治一四巳歳　三旗学校会計簿[22]

○明治一五年一〇月付の「三旗小学　学資憤発簿」[23]

また、明治九年三月から明治一三年十二月まで使用された「募金簿」の記載から、次のような人物も見受けられ、三聯区の三旗小学校運営に協力したことが窺える。

図八　明治二二年、寺町松巌寺において献体解剖をされた豪商酢屋十四代の富永章一郎。「募金簿（明治九年～一三年）」、八丁表。

図九　三旗小学校運営にあたった大江雲澤と、養蚕事業に尽力した横山武吉郎。「募金簿（明治九年～一三年）」、四〇丁表。

図一〇　福澤諭吉の姉礼の夫で、福澤の厚い信頼を受けた小田部武。「募金簿（明治九年～一三年）」、四九丁表。

図一一　更生保護の創始者川村矯一郎。「募金簿（明治九年～一三年）」、七一丁裏。

図一二　三聯区において募金高が最も多額であった和田彌六郎。「募金簿（明治九年～一三年）」、九四丁裏。

図一三　福澤諭吉の師白石常人と中津市学校協議人であり、第七十八国立銀行を設立し頭取を務めた山口廣江。「募金簿（明治九年～一三年）」、九七丁裏～九八丁表。

二、『田舎新聞』に見られる北部小学校及び南部小学校

①『田舎新聞』の概略

大分県編『大分県の百年』の第二章第三節「新聞と言論の発達」において記されている。概要は次の通り。

「明治九年一一月一三日、県北中津町で『田舎新聞』が発行された。九月頃から村上田長、山口半七、中野松三郎、是恒真揖らが同志を募集して、一株五円、一八〇株をもって資本となし、村上田長が社長に就任、主幹兼編集長に増田宋太郎、編集担当は竹下権四朗、記事取材には土佐の立志社から帰った自由民権の闘士鷹居匡、久保益良、増田宋太郎の実弟岡本真坂らがあたり、大分県最初の「新聞」らしい新聞であった。発行当初、『田舎新聞』の題字は右書きであったが、これは東京の『新聞雑誌』で活躍した広瀬淡窓（一七八二～一八五〇）の門弟長三洲（一八二九～一八九五）の筆になり、長三洲が村上田長に新聞の発行をすすめたためであった。

増田宋太郎をはじめ村上田長、山口半七、中野松三郎、是恒真揖らは、中津町を中心とした県北における自由民権論者で、『日本新聞史』によれば、「県庁録事、裁判記事その他の雑報、投書なども載せ一応新聞としての体裁を整えて」おり、一頁三段組み、一段二〇字詰め二六行、美濃紙大の洋紙を縦に折った四頁からなっていた。

『田舎新聞』創刊当時の社長村上田長（一八三八～一九〇六）は、元秋月藩の士族で、中津の村上家に養子となった人物。杵築の元田伯林らに師事して陽明学を修学し、明治維新に際しては私立学校を経営して、村上直次郎博士らをはじめ多数の人材を世に送った。また、この『田舎新聞』によって地方文化に貢献したが、明治一九年には大分中学校長兼県立師範学校長として、教育の充実に尽力し、その後は玖珠郡長として地方開発に功績を残した。

『田舎新聞』には社説、論説はなかったが、投書や寄せ書きで時事問題や、県庁をはじめ官庁に対する批判を展開し、地方における言論の発達に寄与した。経営困難から明治一四年七月、『田舎新聞』は三〇七号をもって廃刊となったが、大分県における言論の発達に果たした役割はきわめて大きかった[24]」。

なお、「三旗小学校」を運営した大江医家六代大江雲澤と『田舎新聞』初代社長を務めた村上医家九代村上田長とは義理の兄弟である[25]。

②『田舎新聞』「第四号」の三校に関する記事

明治九年十二月四日発行の「第四号」雑報欄を見ると、この時点において、南部小学校区には進修小学校（生徒一三六

名）があり、北部小学校区の三聯区には「可象小学校」（生徒一二六名）が、四聯区には「闇無小学校」（生徒八五名）があったことが窺える。

「○前号ツヅキ
進修小学校○生徒百三十六名内優等十三名及第百
二十九名落第七名四級卒業優等姓名○長谷川蔵之
助［十年十一月］○山本才次郎［十二年十一月］○島
津松二郎［十二年二月］○奥よ志［十二年一月］
可象小学校○生徒百二十六名優等三名及第五十四
名落第四名
闇無小学校○生徒八十五名優等三名及第七十八名
落第四名三級卒業優等○森まき［十三年］○佐甲常
吉［十二年］外に進取学校にて女子授業生三名
○小岸じゅん［十四才三月］○菅沼はえ［十四才一
月］○西原志げ［十三才］」（『田舎新聞』第四号）

③『田舎新聞』「第三六号」の進修小学、闇無小学に関する記事

明治一〇年七月二三日発行の「第三六号」雑報欄を見ると、この時点で南部小学校区、第一聯区に「進取小学」があり、北部小学校区、四聯区に「闇無小学」があったことが窺える。

なお、記事中の「進取小学」の表記は、「進修小学」を指すと考える。

「○当小学四箇聯区の内一聯区進取小学本月十八日
臨時大試業がありまして左の通り優等上等の卒業
になりました
進取校全科卒業優等○松掛清三郎○高江庄太郎○
手島節三○矢野目やすへ○上等小岸つぎ○鵜飼孝
市○高橋えい○阿部熊吉○猿橋民三○五十嵐勢治
○岡田作二○手島岩吉○加来和三郎○藤澤常次郎
四聯区闇無小学左の通り○上等佐甲常吉○森まき」（『田舎新聞』第三十六号）

④『田舎新聞』「第二〇一号」の進修小学に関する記事

明治一三年二月一八日発行の「第二〇一号」雑報欄の記事から、明治一三年二月時点において、南部小学校区の殿町に、「進修小学」があったこと、また女子の学科を設け、裁縫を教える準備をしていたことが窺える。

「○殿町の進修小学では変則女子の学科を設け傍ら裁縫を授
んと仕度中なるよ志」（『田舎新聞』第二〇一号）

⑤『田舎新聞』「第二六四号」に見られる四校の姿

明治一三年一〇月二〇日発行の「第二六四号」雑報欄の記事には四校が同時に記載されており、明治一三年一〇月時点

において、「金谷小学」、「進修小学」、「三旗小学」、「闇無小学」があったことが窺える。

なお、記事中の校名列記順序から、各校の存立する聯区について、第一聯区が「金谷小学」で、第二聯区が「進修小学」であった可能性も浮上するが、現時点では特定できないため、今後の調査課題とする。

「〇中津市中の小学秋季試験は下毛郡長鈴木閒雲君同郡書記学務係井上剛三君学務委員戸長等の臨席にて寺町大法寺於て執行せられたり其の日次及び員数等は左の如くなりと

本月十一日八級十二日七級十三日五級六級十四日三級四級十五日一級二級にて生徒総数五百六十三人之を別てば金谷小学が及第百四十三人内優等二十八人。進修小学が及第百八十人内優等四十二人。三旗小学が及第百三十一人内優等十八人。闇無小学が及第百九人内優等二十人」（『田舎新聞』第二六四号）

⑥村上田長子女の小学校卒業証書について

この卒業証書（図一四）により、「進修小学」が明治一三年から一五年の間は存在していたことが窺える。

なお、証書に記載の「村上貞（ただし）」とは、田長の長男にあたる。

図一四　明治一三～一五年の進修小学の卒業証書（一九・五糎×二六・五糎）（村上医家史料館蔵）。

證書

大分縣 村上貞 年 月

下等小學第六級

卒業候事

明治十四年十月十日

進修小學

下毛郡内 中津聯校 進脩小學

證書

大分縣下毛郡 [illegible]上 貞 年 月

下等小學第八級

卒業候事

明治十三年十月十日

進脩小學

第五大學區 第三十六番中 學區進脩小學

三、両校の沿革

①解明期間と学校名

これまで述べてきた明治九（一八七六）年から明治一五年の間についての北部小学校及び南部小学校の学校沿革をまとめる。

まず、北部小学校については、明治九年においては「可象小学校」と「闇無小学校」の二校であった。明治一〇年から一三年の間は、「三旗小学校」と「闇無小学校」の二校であった。明治一三年から一五年の間も、「三旗小学校」の存続は確認できた。

次に、南部小学校については、明治九年から一三年九月までの間「進修小学校」と他にもう一校の存在があった。その一校は多分に「金谷小学校」の可能性が高いが、現段階では名称の特定はできない。

明治一三（一八八〇）年一〇月には「進修小学校」と「金谷小学校」が存在し、さらに卒業証書から「進修小学校」は明治一五年時点においても存続していたことがわかった。

以上が、各史料から確認できた明治初期における北部小学校と南部小学校の沿革である。

四、沿革不明に関し校名表記の視点からの一考察

これまで、長きにわたり両校の沿革が明らかになってこなかったのは、あらゆる時点において、その学校名の表記が特定・統一されてこなかったことに起因するものと考える。つまり、新聞や歴史書等において、正式な校名で表記していたり、通称で表記していたり、その通称が別の時点における正式名称と類似していたりと、表している時期・史実について齟齬や混同が生じたことにより、歴史が整理できず沿革が不完全なものとなっていたのだろうと推測する。

その事例の一部を以下に挙げた。

○『大分県教育百年史』第一巻（一）より。

明治一三年八月に[26]、「中津町の殿町小学校に小学校で初の裁縫科を予科に設置」と記され、明治一四（一八八一）年四月二二日付で[27]「中津高浜村古表神社内で、中学校、上等小学校、金谷、殿町、桜町の三小学校の連合運動会開催」と記述されている。

○廣池千九郎著『中津歴史』より。

「金谷第一聯区ニシテ後明治十八年六月校舎を改築ス諸町第二聯区ニシテ此歳［＝明治九年］八月校舎ヲ殿町ニ新築シテ之ニ移ル

桜町第三聯区ニシテ後明治十年一月校舎を新築ス　堀川第四聯区ニシテ後明治十八年校舎ヲ改築シ闇無校ト云　ノ四枚ヲ開設ス」[28]と記述されている。

○今永正樹著『ふるさと歴史年表』より。

「明治九（一八七六）年二月、中津の小学校を四学校区に統合。（金谷校、殿町校、桜町校、堀川校[29]）」と記述されている。

その他、複数の書にも以上三例の様に、「進修小学」、「三旗小学」、「闇無小学」の名称を町名で表記している。

なお、「金谷小学校」に関しては、「金谷」が本来地名であるためか、他の名称は見出せない。

○『田舎新聞』より。

本稿で第三聯区は、明治一〇年から一五年は「三旗小学校」であったことを解明した。

しかし、『田舎新聞』に、「三旗小学校」存在期間中にもかかわらず、「桜町小学校」と書かれている記事がある。

まず、明治一〇年八月一三日発行の「第三九号」雑報に、「桜町小学校」とあり、次に、明治一一年三月四日月曜日発行の「第六七号」にも同様に「桜町学校」と書かれている。

これらの記事から、正式名称は「三旗小学校」であるにもかかわらず、地域住民の間では、通称として「桜町小学校」も認められており、使用されていたのではないかと推測する。

「○当中津有志の輩二十名余発起にて大に演説会を開かれ来ル十九日桜町小学校に於て発会になる由皆さん夕飯後より聴にお出なさい」（『田舎新聞』第三九号）

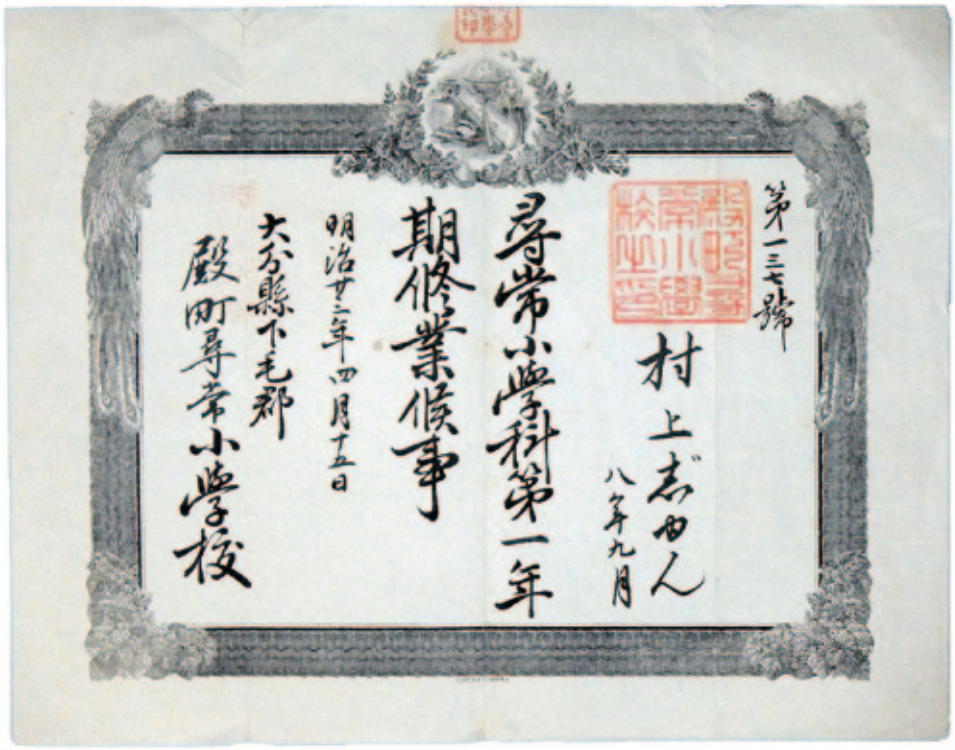
「○二月十日は第二日曜日亦一社員の演舌会にて例の通り桜町学校にて開かれ升尤も同夜は同外の演舌を許さるる事故有志の諸君は五演舌あれ但志時間は午後第七時より開場」（『田舎新聞』第六七号）

○尋常小学校卒業証書及び修業証書より。

明治一九（一八八六）年より設置された尋常小学校の卒業証書及び修業証書によれば、「殿町尋常小学校」（図一五）「桜町尋常小学校」「堀川尋常小学校」（図一六）が正式名称となっていることがわかる。

なお、証書に記載の「村上恣ゆん（じゅん）」とは、田長の長女にあたる。

（桜町・堀川の二校の卒業証書及び修業証書の写真は、今永正樹著『ふるさと中津、耶馬溪なつかしのアルバム一九八〇』の一一頁を使用した。）



図一五　明治二三年豊町尋常小学校の修業証書（二一糎×二七糎）
（村上医家史料館蔵）。

おわりに

明治初期の「中津市立北部小学校」及び「中津市立南部小学校」の沿革について、一部ではあるが解明を行ってきた。今後はさらに全容解明を目指し、調査を続けたいと考える。

今回の解明の鍵が民間に保存された資料であったことから、同様に、例えば旧家等に静かに眠っている資料の存在・発見などといった様々な情報提供のご協力によって、明治初期の小学校運営に関する沿革のさらなる解明がなされることを切に願うものである。

北部小学校・南部小学校の両校区ともに、明治期において次のような先哲を輩出している。

○北部小学校区

・福澤諭吉（一八三五～一九〇一）慶応義塾創立者

・和田豊治[30]（一八六一～一九二四）紡績業界の巨頭、和田奨学金創設者

・川村矯一郎（一八五二～一八九一）更生保護の創始者

○南部小学校区

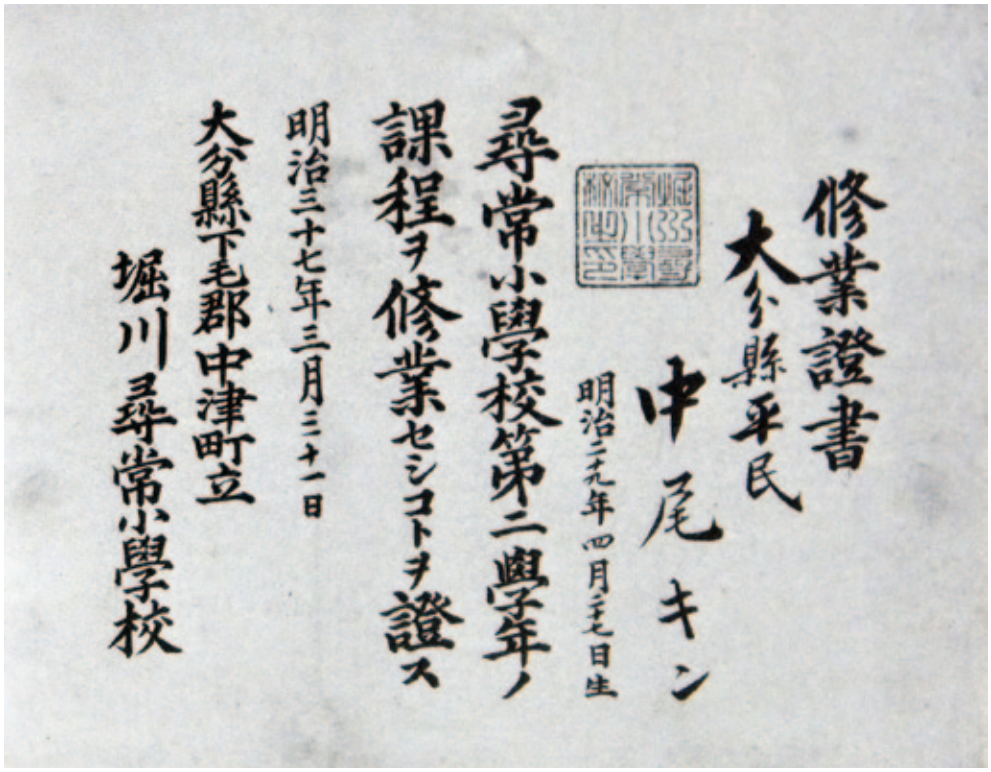
・小幡篤次郎[31]（一八四二～一九〇五）福澤諭吉を支えた第一人者、中津市学校初代校長、中津図書館の礎

・小幡英之助（一八五〇～一九〇一）西洋歯科医第一号

・水島銕也[32]（一八六四～一九二八）神戸大学礎の初代校長

このような豊かな地に存在する北部小学校及び南部小学校の沿革の解明を行うことは、有用だと考え、さらなる課題解決・解明に取り組むこととしたい。

図一六　明治二七年桜町尋常小学校の卒業証書及び明治三七年堀川尋常小学校の修業証書
（今永正樹著『ふるさと中津、耶馬溪なつかしのアルバム一九八〇』の一一頁より転載）。



【参考文献及び史料】

参考文献

▲『田舎新聞』第四号、明治九年一二月四日発行。
▲『田舎新聞』第三六号、明治一〇年七月二三日発行。
▲『田舎新聞』第三九号、明治一〇年八月一三日発行。
▲『田舎新聞』第六七号、明治一一年三月四日発行。
▲『田舎新聞』第二〇一号、明治一三年二月一八日発行。
▲『田舎新聞』第二六四号、明治一三年一〇月二〇日発行。
▲今永清二編『中津の歴史』、中津市刊行会、中津、一九八〇年。
▲今永正樹『医亦従自然也　村上医家事歴志』、中津、一九八二年。
▲今永正樹『ふるさと歴史年表』（増補改訂版）、中津、一九八三年。
▲大分県編『大分県の百年』、大分県、一九六八年。
▲大分県教育庁編『大分県教育百年史』第一巻通史編（一）、大分県教育委員会発行、一九七六年。
▲大分県下毛郡教育会編『下毛郡誌』、名著出版、東京、一九七二年。
▲大島明秀「一九世紀後半中津における医師大江雲澤の「門人帳」について」（ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀編『中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書』第九巻、二〇一〇年所収）
▲尾紀尋常高等小学校同窓会『ふるさと尾紀』、中津、一九九三年。
▲尾島春海『明治百年・大分県の歩み』、毎日新聞社西部本社発行、一九六八年。
▲川嶌眞人『医は不仁の術　努めて仁をなさんと欲す』、西日本臨床医学研究所、中津、一九九六年。
▲慶応義塾大学出版会『福沢諭吉事典』、東京、二〇一〇年。
▲重松ツギ、重松正孝『闇無浜神社―由緒と歴史』、中津、二〇一三年。
▲嶋通夫『ふるさとの歴史』、中津、一九八五年。
▲當所美恵子「三旗小学校」―大江雲澤の小学校運営」。ミヒェル・ヴォルフガング・吉田洋一・大島明秀 共編『人物と交流Ⅲ』中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書Ⅷ、中津、二〇一四年、五八～六八頁。
▲中津市史刊行会編『中津市史』、大分、一九六五年。
▲中津中央ロータリークラブ創立三十周年記念事業委員会『この町について』、中津、二〇〇五年。
▲西澤直子「中津市学校に関する考察」（『近代日本研究』第一六巻、一九九九年）。
▲野田秋生『豊前中津「田舎新聞」「田舎新報」の研究』、エヌワイ企画、大分、二〇〇六年。
▲羽島知之『新聞の歴史①　新聞の誕生』、日本図書センター、東京、一九九七年。

▲半田康夫『大分県郷土史年表』、大分県、一九五三年。
▲廣池千九郎『中津歴史』、中津、一八九一年。
▲毎日新聞社編『大分県の歴史と文化』、大阪、一九六一年。
▲三谷紘平『シリーズ藩物語　中津藩』、現代書館、東京、二〇一四年。

史料

▲「三旗小学校史料」。「明治九年十一月　学校書類入　第三聯区担当方」と表面に墨書きされた木製の文箱入り（大江医家史料館寄託資料）。
▲「村上貞　小学校卒業証書」（村上医家史料館蔵）。
▲「村上志ゆん　小学校修業証書」（村上医家史料館蔵）。

注

1　現在「国指定文化財史跡福澤諭吉旧居」として公開されている。

2　以下、中津市教育委員会作成南部小学校生田門横設置の「生田門と中津市学校」より引用。「南部小学校の敷地は「大手屋敷」と呼ばれた家老の生田家（一八〇〇石）の屋敷と、隣の「中の屋敷」と呼ばれた奥平図書（二六〇〇石）の屋敷があった場所の一部を含んでいます。明治四年（一八七一）、福沢諭吉の建議により、「大手屋敷」に西日本有数の英学校である中津市学校が創立されました。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」で有名な『学問のすゝめ』は、この市学校を創立する時に、中津の青少年に学問の重要性を説くため福沢諭吉によって書かれたもので、翌年刊行されて大ベストセラーになりました」。

3　現中津市ホームページ中津市教育委員会学校教育課作成「中津の教育」の「学校施設と沿革」より。

4　中津市歴史民俗資料館田中布由彦館長のご教示による。

5　平成一六年より中津市歴史民俗資料館大江医家史料館として公開されている。

6　「明治九年十一月　学校書類入　第三聯区担当方」と表面に墨書きされた木製の文箱入りの資料群。（大江医家史料館寄託資料）。詳細について、當所美惠子「三旗小学校」―大江雲澤の小学校運営―」参照。

7　平成八年より、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館として公開されている。

8　拙稿「資料紹介「三旗小学校」―大江雲澤の小学校運営―」（ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀共編『人物と交流Ⅲ』、二〇一四年所収）参照。

9　『大分県教育百年史』第一巻通史編（一）、二一〇頁。

10　明治九年一二月四日雑報欄「〇当市中も四聯学区に分ちしより」（『田舎新聞』第四号）。

11　明治一〇年七月二三日雑報欄「〇当小学四箇聯区の内一聯区進取小学」及び「四聯区閣無小学」（『田舎新聞』第三六号）。

12　史料「明治九年三聯区学校課金姓名簿」、及び「三旗小学校新築募金名簿」に、各町名が明記されている。

13　當所美惠子「三旗小学校」―大江雲澤の小学校運営」、六七頁（図二三と図二二）参照。

14　同　六三頁（図一一）参照。

15　同　六二頁（図四）参照。

16　同　六二頁（図五）参照。

17　同　六二頁（図七）参照。

18　同　六三頁（図一一）、六四頁（図一二）参照。

19　同　六三頁（図八）参照。

20　同　六三頁（図一〇）参照。

21　同　六三頁（図九）参照。

22 同　六六頁（図一九）参照。
23 同　六六頁（図二〇）、六七頁（図二一）参照。
24 大分県編『大分県の百年』、六七頁～六八頁。
25 今永正樹『医亦従自然也　村上医家事歴志』、一七七頁。
26 『大分県教育百年史』第一巻通史編（一）、九八七頁。
27 『大分県教育百年史』第一巻通史編（一）、九八九頁。
28 廣池千九郎『中津歴史』、三六五頁～三六六頁。
29 今永正樹『ふるさと歴史年表』、九九頁。
30 和田豊治生誕地は、現在「和田公園」として整備されている。
31 小幡篤次郎と小幡英之助の生誕地は、現在「中津市歴史民俗資料館（国の登録文化財）」として公開されている。
32 水島銕也生誕地は、現在「水島公園」として整備されている。

資料紹介

①中津市歴史民俗資料館蔵「詩經」

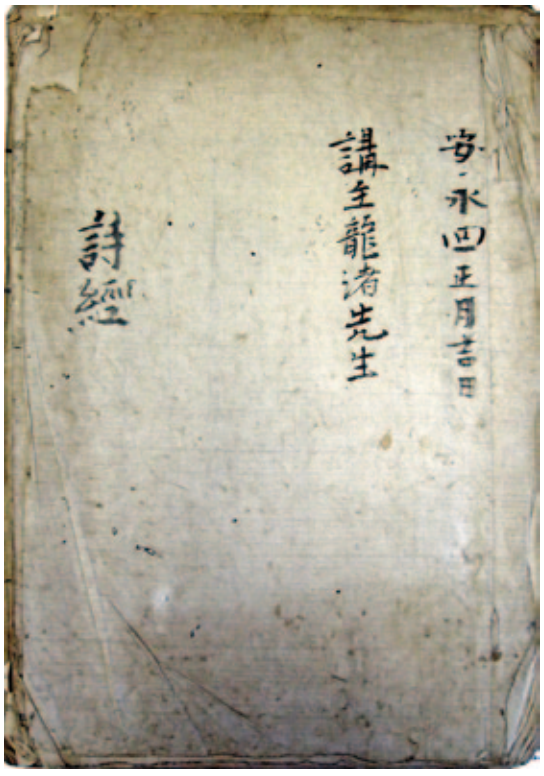
これまで叢書で取り上げてきた近世の医家・屋形家は、中津城下町から約一七キロメートル離れた耶馬溪屋形村に居を構えていた。現在、中津市歴史民俗資料館に収蔵されている屋形家資料は五〇〇点を越える。かかる過疎地域にあって、いかにして資料や情報を得たのか。

無論、情報源や資料の入手経路は、様々な書籍や人的交流であったと考えられるが、とりわけ中津藩儒であった倉成龍渚との交流を示す資料については、既に叢書第七巻で「外療内治法」下巻を取り上げた。この中で、中医学における外科医療的内容について屋形諸道が倉成龍渚から教えを受けたことが分かった。

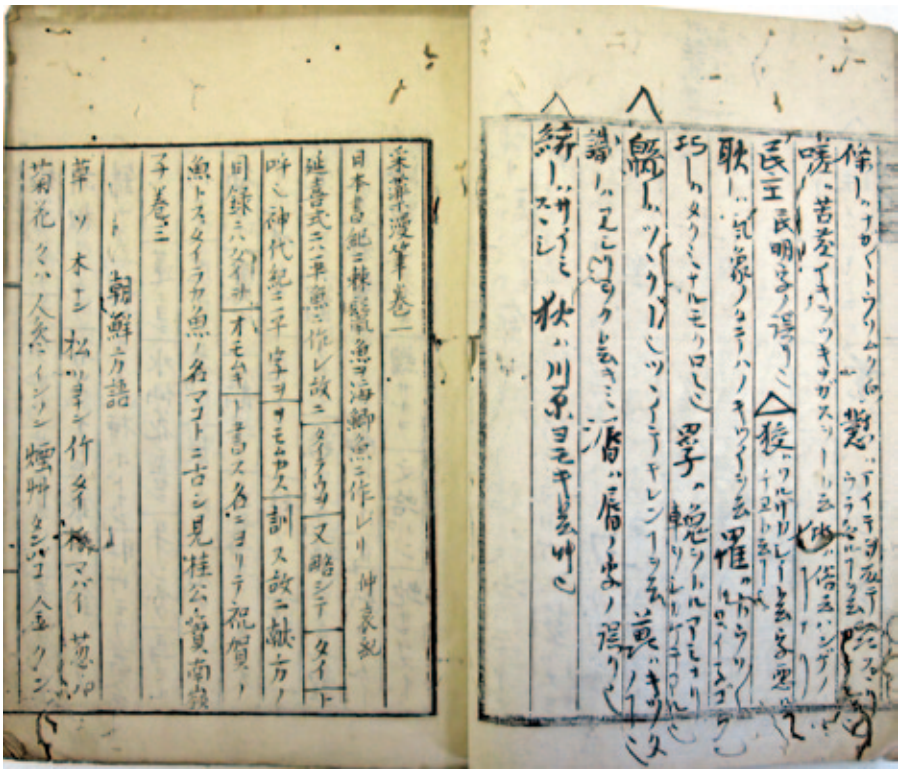
一方で、龍渚との関係を示すもう一つの資料である「詩經」については簡単な言及のみに留まっている。そこで、内容について再度紹介し、今後の展望を示したい。

まず、表紙に「安永四年正月吉日／講主龍渚先生」とあり、一七七四年正月に、野本良右衛門宅で行われたと見られる龍渚を中心とした講義の機会に書写したものと分かる。

「詩經」と打ち付けながらも、これに関する内容は不在で、後世は「周易本義」の語釈と、本草の語彙、異名、出典を採録した「采藥漫筆」から成る。中でも「朝鮮方語」と記された部分は目を引く。文字通りならば、「朝鮮の方言」、すなわち、日本語に対応する朝鮮語が記されていると考えられるからである。



図一　「詩經」の表紙。



図二　「朝鮮方語」の冒頭部分。

試しに「朝鮮方語」の冒頭部分三つの単語を見てみよう。「草　ソ　木　ナン　松　ソヨナン」とある。

草は朝鮮語で초（チョ）であり、同様に木は나무（ナム）、松は소나무（ソナム）。記述上に多少の転訛は認められるものの、諸道が写した底本は、朝鮮語を記したものであったと見てよいだろう。

龍渚以外に、中津城下の町医で画人であった田中田信との交友や、阿蘭陀通詞吉雄耕牛の元への長崎遊学、或いは書籍群を通して、屋形諸道が町から離れた集落にあっても医学・医療を修めえたことはこれまでにも指摘してきたが、朝鮮語に係る資料まで入手していた事実には驚嘆するばかりである。端倪すべからざる背景の解明に向けて、今後は底本や入手経路の解明を課題としたい。（大島）

②明治初期の中津における薬種店舗と諸売薬

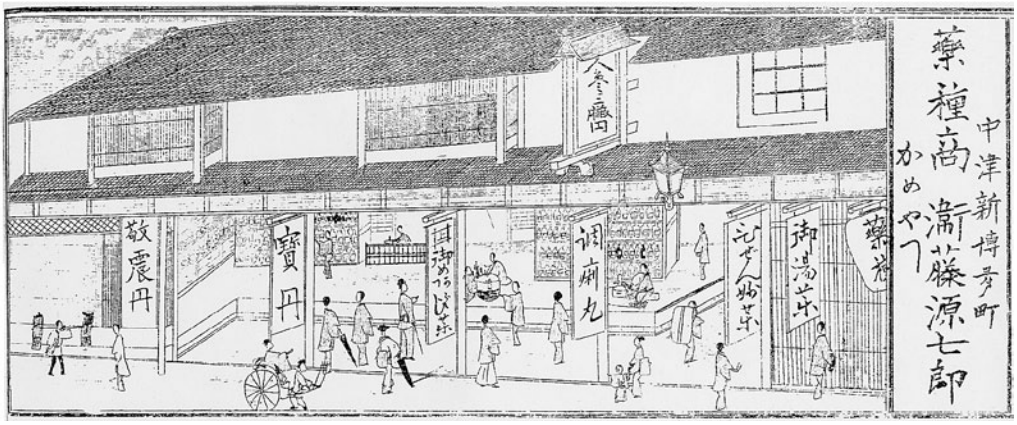
明治一九（一八八六）年、泉亀吉が大阪で刊行した『大分県下名所商家独案内記』に、当時の中津市で医薬品や医科器械などを取り扱っていた店舗の版画が掲載されている。政府が西洋医学を導入しつつ、伝統医学の排斥を進めていた時期だが、中津における和・漢薬の人気は衰えていなかったようだ。版画に描かれた店には江戸時代の名残がまだ色濃く残っている。薬袋をかたどった「袋看板」に屋号が記され、屋根看板には、丸散、煉薬、膏薬、合薬など人気の高かった売薬が確認できる。

・「人参三臓圓」（大坂の薬種商吉野五運の家伝秘薬）
・「調痢丸」（「鰯屋調痢丸」とも称した）
・「寶丹」（寶丹は、オランダ人医師ボードウィンの処方からヒントを得た守田治兵衛（九代目）が開発した湿潤性粉末の気付け薬。明治四年、官許第一号の公認薬）
・「敬震丹」（牛黄、麝香、竜脳、薬用人参、鬱金などを配合した和漢薬製剤）
・「人参五臓圓」（人参、地黄、干ウナギなどを配合した滋養強壮剤）
・「天寿丸」（阿波国名東郡観音寺村の富松武助薬房が発売した腹薬）
・「一粒金丹」（津軽藩医渋江氏がオットセイの陰茎と睾丸を主成分に調合した精力剤）
・「致真膏」（膏薬、詳細不明）
・「保命圓」（腹薬、詳細不明）
・「真妙圓」（詳細不明）
・「びぜん妙薬」（七宝美髯丹。何首烏、牛膝、茯苓、枸杞子など七つの生薬を調合した漢方薬）

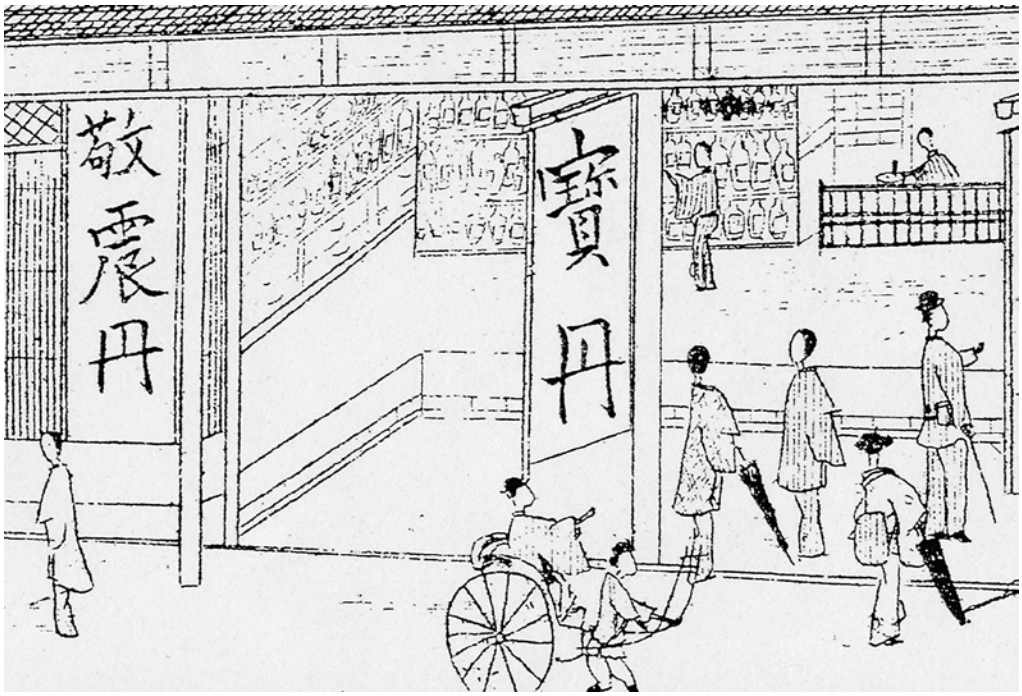
また、亀屋および播磨屋の版画に、細長い薬草や生薬を切るための片手盤が見られる。（ミヒェル）

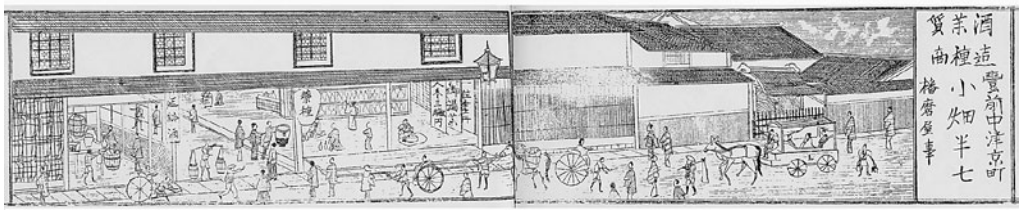
参考文献

▲宗田一『日本の名薬―売薬の文化誌』東京、八坂書房、一九八一年。
▲鈴木昶著『江戸の妙薬』東京、岩崎美術社、一九九一年。
▲山崎光夫『日本の名薬』東京、文藝春秋、二〇〇四年。

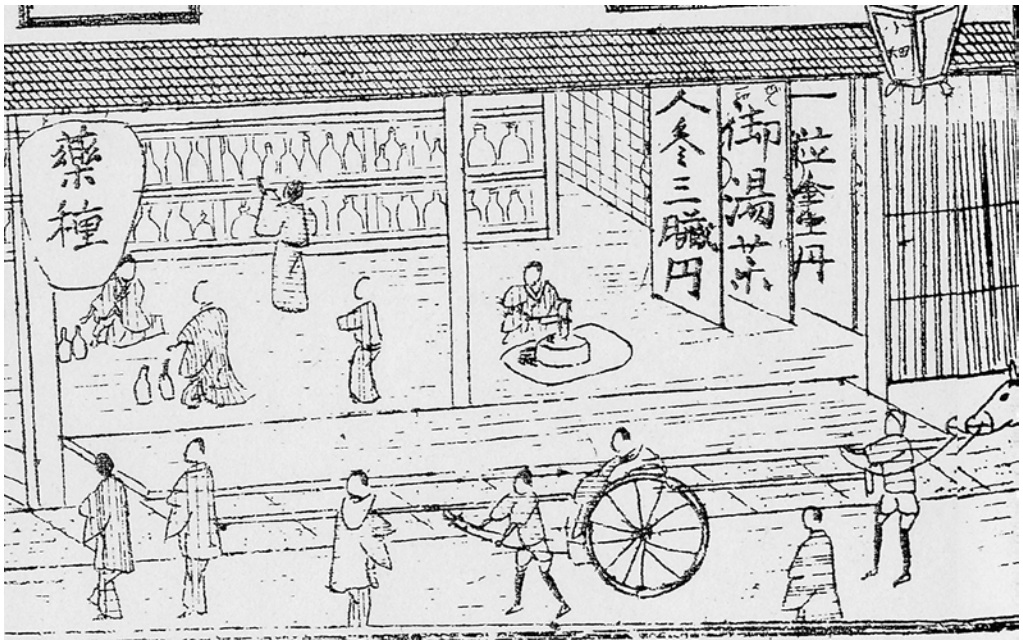


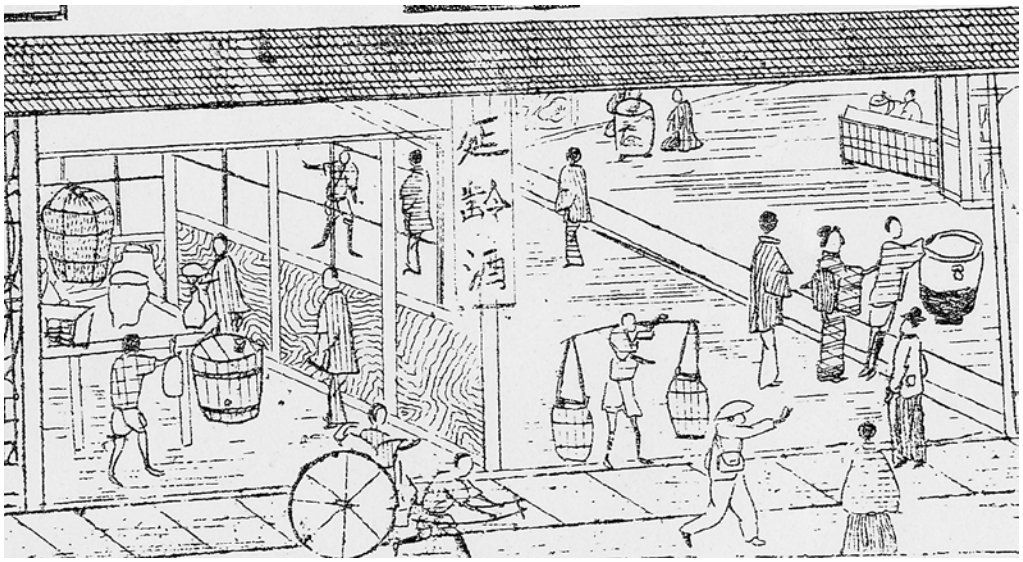
図一　新博多町、薬種商　亀屋（漱藤源七郎）



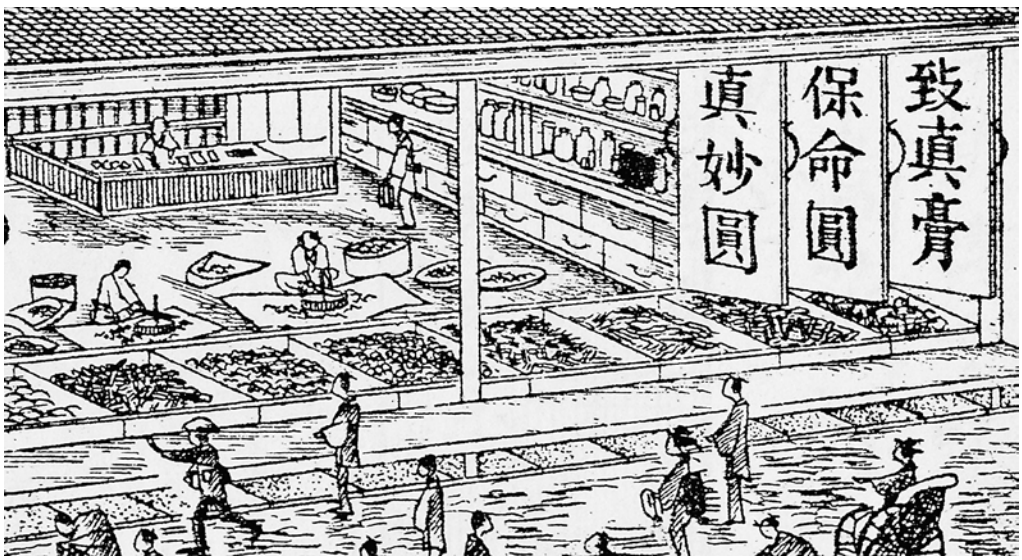


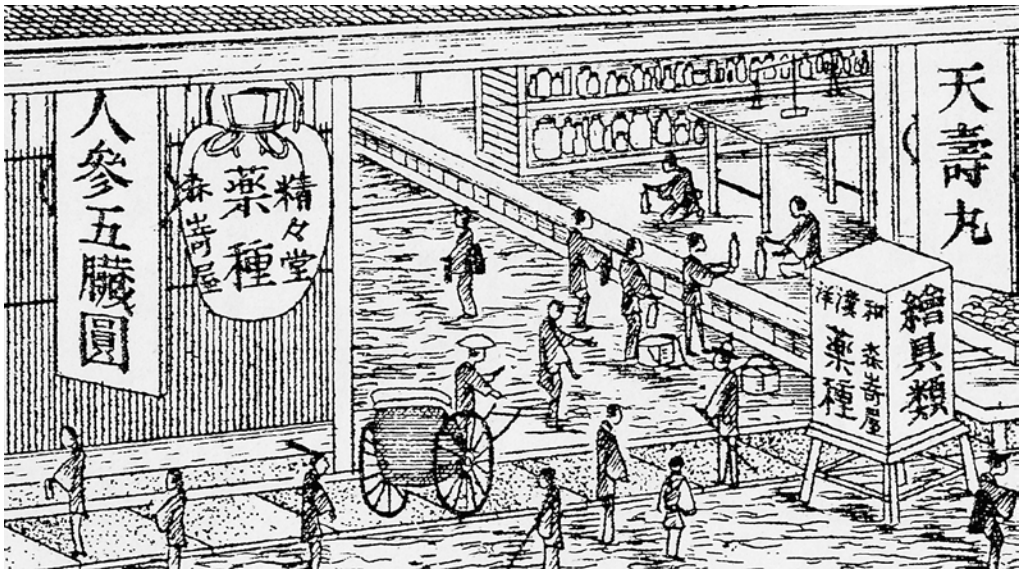
図二　京町、薬種商　播磨屋（小畑半七）


藥種
一粒金丹
御湯茶
人參三臟円


延齡酒

図三　新博多町、薬種商　森寄屋（森松蔵）




天壽丸
繪具類
和漢洋
森壽屋
藥種
精々堂
藥種
森壽屋
人參五臟圓

ABSTRACTS

Akihide ŌSHIMA

On the manuscript “Study of Medical Books” and the physician family Yakata

This study deals with a manuscript entitled *Iseki-kō* that was kept by the Yakata family, who over many generations took care of the small population in the remote hamlet of Yakata and its surroundings (nowadays part of the administrative area of Nakatsu City, Ōita prefecture). Among the various prints and manuscripts that were found in the former residence of this family, there was an Edo-period manuscript of 38 pages bound in the traditional four-hole binding (yotsume toji). It contains the titles, authors, number of volumes and other data of more than one thousand Chinese books on medicine in chronological order until the Ming Dynasty. A comparative analysis of the graphical properties showed that the manuscript was written by Yakata Moromichi (1746–1826), the first physician of the Yakata family. It is hardly conceivable that these books were piled up in his house. Further investigations brought to light a similar manuscript kept by Kyōto University as part of the Fujikawa Collection. It was written by Nozu Genkai, a physician yet to be identified. As this second manuscript with 1212 titles shows various more elaborate traits, Yakata’s text seems to be a later copy. No other copy has been found, and nothing is known about Nozu and the circumstances under which Yakata made his copy.

Yakata lived in an isolated and rather backward hamlet. But like many ambitious physicians of the Edo period, he ventured out and managed to build up an impressive network. He was on good terms with Tanaka Denshin (1748–1824), a physician in the castle town of Nakatsu and with Kuranari Ryūsho (1748–1812), a Neo-Confucian scholar employed by the lord of Nakatsu. Yakata also went to Nagasaki and studied Western medicine in the school of the interpreter and scholar Yoshio Kōgyū (1724–1800), whose knowledge and collection attracted thousands of visitors from all over the country. Obviously, Yakata Moromichi conducted intensive studies about both Western and Chinese medicine.

Yōichi YOSHIDA

On the manuscript "Miscellaneous Records" *(Sho-zatsuyō-ki)* kept by the physician family Murakami

Nakatsu is located in the eastern part of Kyushu. Early modern history of this area starts in 1587 with the arrival of Lord Kuroda Yoshitaka (1546–1604). During the 17th century, the local rulers changed several times because of forced relocation by the Edo Government. In 1600, the domain was given to the Hosokawa clan, which was substituted by the Ogasawara clan in 1632. From 1717 up to 1871, the Okudairas ruled Nakatsu. The history of the Murakami family goes back to Murakami Sōhaku, who started his medical practice during the Ogasawara era in 1640. From the third generation on, the successive heads of the family served as domain physicians to the Okudaira clan.

This study deals with a manuscript entitled *Sho-zatsuyō-ki.* On its second page, it shows the date "first year Kanei", which corresponds to 1848 in the Western calendar. Various names of places and some chronological remarks, as well as expressions such as "departure from Sumpu", "from Fuchū to Kanaya eight miles" and "pilgrimage to Mount Asama", show that these are notes taken during journeys from Edo to Nakatsu. In the mid-18th century, Murakami Harumi (1806–1893) served as physician to Lord Okudaira Masatomo.

The manuscript starts on July 1 with Sumpu (present-day Shizuoka), followed by notes about Kanaya, Hamamatsu, Futagawa, Okazaki, Kuwana, Yokkaichi, Kameyama, Kusatsu, Ōtsu, Kyōto (July 9) and finally Ōsaka, where the domain of Nakatsu maintained a trading station with storage houses.

Another part of the manuscript begins with the arrival in Ōsaka on July 14. This time, the journey continues by ship to Shikoku including a pilgrimage to the Konpira Shrine (July 17), a famous site of prayers for safe seafaring located halfway to the top of Mount Zōzu. Two days later, the party passed the island of Himejima in the Western part of the Seto Inland Sea.

Additionally, there are records from when Lord Okudaira had finished his obligatory attendance in Edo and was about to return to his domain. Servants from his Edo residence are accompanying the travelers to the village of Shinagawa (June 23). Later entries mention Hodogaya, Totsuka and Fujisawa, all

of them well-known stations of the famous “East Sea Road” (Tōkaidō).

None of the journeys is completely recorded, but all descriptions are very detailed, giving the names of temples and shrines, lodges, meals and prices, and thus provide valuable information on the state of traveling in late-Edo Japan.

Mieko TŌSHO

On the elementary schools of Nakatsu in the early Meiji period

In 2012, the Ōe Medical Archive received a generous donation by a descendant of Ōe Okujirō, the third son of the physician Ōe Untaku (1822–1899), who was adopted by the Tsukioka family. Among various old photos, scrolls, books and manuscripts, there was a wooden box containing more than 70 excerpts of records related to the establishment of a school, donations and fund-raising efforts. The records cover the period from 1876 to 1882, when Japan introduced compulsory education and started to establish elementary schools. Many communities had great difficulty in securing sufficient financial resources, but as education was highly valued in Edo-period Japan, we can observe private donations of money, construction land and materials throughout the country. As the detailed records preserved by the Tsukioka family show, the population of Nakatsu was deeply involved in the establishment of communal schools. Combined with the information given by the local “Rural News” *(Inaka Shimbun)*, one of the first newspapers in Meiji-era Japan, these source materials shed new light on the twists and turns in the establishment and running of elementary schools in Nakatsu. They also underline the thirst for education and Japan's enthusiasm to catch up with the modern world.

索引

い
醫書五經……6
豎籍考……1〜9
田舎新聞……82、95〜97、100

え
漪藤源七郎……109、110

お
汪旭帝……6
大江雲澤……82〜83、86、87、89、92、95
小畑半七……110、111

か
金谷小学……82、96、97、100

き
京都……39、42、43、46
金瘡跌撲療治伝……4、5

く
闇無小学……82、89、91、96、97、99、100

こ
廣愛書……6
五診集……6

さ
桜町小学……82、99、100
雑記……4、5
雑書……4

し
詩經……5、106、107
諸雑用記……39、42、46
徐子宇……6
進修小学……82、95〜99
神農……6
神農本草経……6

た
大始天元冊……6
田中田信……1、4、107

ち
致和樞要……6
陳會……6
陳景魁……6

倉成龍渚……1、4、5、106

て
天工開物……4

と
東垣十書……6
痘疹大全……6

な
中津市立南部小学校……82、95、96、99、101、102
中津市立北部小学校……82、91、95、99、101、102

に
日光東照宮……42、45

の
野津玄海……1、6、8

ひ
必用灸穴秘訣……4
姫島……43〜45

ふ
富士講……43
富士登山……39、43
伏犧……6

み
三旗小学……82、83、87～92、95～97、99、100

む
向井元升……4
村上春海……39、41、45
村上田長……39、82、83、95、97

も
森松蔵……112

や
屋形家……1、2、4、8
屋形諸道……1～8
屋形養民……1、3、4
薬種商……108～113

よ
吉雄耕牛……1、4、107

CONTENTS

PREFACE
ARTICLES

Akihide ŌSHIMA
On the manuscript “Study of Medical Books” and the physician family Yakata 1

Yōichi YOSHIDA
On the manuscript “Miscellaneous Records” *(Sho-zatsuyō-ki)* kept by the physician family Murakami 39

Mieko TŌSHO
On the elementary schools of Nakatsu in the early Meiji period 82

Source Materials
“Shikyō”, an Edo period manuscript kept by the Nakatsu Museum of History and Folklore 106

Drug merchants and medicaments in Early Meiji-Nakatsu 108

ABSTRACTS 114

INDEX 117

Wolfgang MICHEL, Yōichi YOSHIDA, Akihide ŌSHIMA
PERSONALITIES AND ENCOUNTERS IV
NAKATSU MUNICIPAL MUSEUM OF HISTORY AND FOLKLORE – MEDICAL ARCHIVE SERIES, No. 14
CITY OF NAKATSU, BOARD OF EDUCATION
Kawaharada Printing Co., Nakatsu, March 2015

● 執筆者一覧

大島　明秀（おおしま・あきひで）
熊本県立大学文学部准教授

當所　美恵子（とうしょ・みえこ）
中津市歴史民俗資料館

Michel, Wolfgang（W・ミヒェル）
九州大学名誉教授

吉田　洋一（よしだ・よういち）
久留米大学文学部准教授

中津市歴史民俗資料館 分館 医家史料館叢書XIV
ミヒェル・ヴォルフガング、吉田洋一、大島明秀　共編

人物と交流 Ⅳ

平成27（2015）年3月

発行者　中津市教育委員会
刊　行　中津市歴史民俗資料館
〒871-0055 大分県中津市1385番地（殿町）
TEL 0979-23-8615

印　刷　株式会社 川原田印刷社